平成２４年度

学級経営ハンドブック

第2集

鳥取市小学校教育研究会
特別活動部会

「学級経営ハンドブック　第2集」　目次

はじめに

「学級経営ハンドブック第2集」作成意図と活用　P 1～ 2

委員会活動のアイデア　P 3～12

代表委員会のアイデア　P13～20

集会活動のアイデア　P21～28

しかり方・ほめ方のコツ　P29～32

あいさつ指導のアイデア　P33～40

学習発表会のアイデア　P41～44

生徒指導対応のコツ　P45～52

集団を高めるアイデア　P53～62

忘れ物をなくす指導のアイデア　P63～68

「自立心」を学ぶ活動のアイデア　P69～76

「協　力」を学ぶ活動のアイデア　P77～88

「がまん」を学ぶ活動のアイデア　P89～94

おわりに

はじめに

子どもたちの人間関係を形成する能力や社会性の低下の問題、心の問題、いじめや不登校の問題等、学校現場のかかえる問題は深刻で大きなものばかりです。そうした中、いま「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」特別活動を学校教育の基盤にすえ、これらの諸問題を解決しようとする実践が多くの学校で進められています。

特別活動は週１時間の学級活動のほかに、児童会活動、クラブ活動、学校行事がありますが、日々の係活動、清掃や当番活動、給食の時間など、教科学習以外は特別活動の対象と考えられます。これらの時間を創意工夫しつつ、各学校が「魅力ある学校づくり」に努めておられます。

今年度の鳥取市教育委員会主催「全教職員対象研修会」での講演テーマは、「魅力ある学校づくりのための『心の居場所づくり』と『絆づくり』～今やっていることを見直そう～」でした。その内容は、まさに特別活動をどう見直していくかということでした。そしてさらに、見直すには先ず私たち教師が、「教師が育てる」発想と「子どもが育つ」発想を区別し、自らの構えや態度を変えることを強調されました。

前置きが長くなりましたが、今年度も私たち鳥取市小学校教育研究会特別活動部は、「学級経営ハンドブック」を第２集として部員の総力を挙げて作成しました。昨年度と同様に、学級経営や特別活動において日常的に活用できるアイディアを共有することをねらって作成しました。ですから、その内容は、広く前述の特別活動の対象と考えられる活動のすべてで活用できるものになっています。先生方の日々の実践に役立つアイデアとして、また実践を振り返る際の気づきの材料としてお役に立てていただければ幸いです。

平成２５年３月

鳥取市小学校教育研究会

特別活動部長　前田　哲雄

「学級経営ハンドブック②」の内容と活用について

１ 作成の意図

学校は、大まかには「学力」と「社会性」の２つの資質能力を身に付けるためにある。

しかし最近は、とりわけ「社会性」が身に付きにくくなっている。なぜだろう？

「少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議」の報告書に、そのヒントを見つけた。

報告書では、現在の児童生徒の問題行動の背景や要因が**「学校や地域社会といった、本来社会性を育成する場で社会性が育まれにくくなっている。」「多様な人間関係の中で、社会性や対人関係能力を身に付ける機会が減っている。」**ことにあると指摘している。

大変なことである。学校は、子ども達に「社会性」を身に付けさせることが専売特許だったハズなのだが、そうではなくなってきているというのである。

しかも、驚くことにこの報告書は、今から１２年も前（平成１２年）にこうした状況を分析し、「子どもたちの社会性を育成するための」具体的なプログラムを提案している。

そしてこの報告書で述べられている４つの結論の内の２つが、まさしく本書作成の意図と一致する。

結論１	学級や学年をこえた多様な「かかわり合い」なしに、学級担任が学級内だけで「社会性の基礎」を育てることは困難である。

学級経営は主に学級担任が行う教育活動ではある。しかし、こと「社会性の基礎」の育成を主眼とする特別活動においては、学級での活動を中心にはするものの、むしろ学級外との多様な関係性を求めて行かなくては「社会性」は育たない。しかもその方法は多様であり、特効薬・万能薬はない。もちろん、一朝一夕につく代物でもない。だから、

結論２	「魔法のプログラム」や「便利なゲーム」は存在しない。

のである。

近年「学校の職員みんなの目で子ども達を見ていく」とか「学校が一つのチームになって子ども達を育てていく」という発想が当たり前になってきている。それは、「社会性」は様々な資質能力の総体であり、他との多様な集団活動をとおして育つものだからである。当然、学級だけががんばっても効果は薄く、学校全体が総がかりで、意図的計画的に取り組まなくてはとても身に付くものではない。

ただし、一旦「社会性」が育ってくると、子ども達の反応が、表情が、動きがよくなり、付随するように学力も伸びていく。学力が単独で成り立つものでなく、社会性という土壌に育つものだからである。当然「社会性」の土壌が豊かになれば、学力は広く根を張り、高く太く成長していく。

「魔法のプログラム」は存在しないが、**「妥当なプログラム」**は存在する。それは、「子ども達の実態をふまえ、目指す子ども像に向けた指導と評価を丁寧に続けていくこと」、つまり**「当たり前のことを地道に確実に行うプログラム」**に他ならない。これらのプログラムがそのまま放っておかれては意味がない。すでに実践をくぐらせた「妥当なプログラム」だけに、それらをまとめ、鳥取市全体の子ども達を育てるために共有してこそ初めて意味が出てくるのである。

２ 構成の特徴

本書の特徴は、以下の３点である。

① 指導内容・活動・資質能力別に構成しているため、ニーズに応じて読める。

学級経営および特別活動において指導が必要な内容・活動・資質能力を、１２項目採り上げている。とりわけ本書では、第１集では扱わなかった「しかり方・ほめ方」などの指導内容・技術や「がまん」などの資質能力を付ける指導方法のアイデアを載せている。教師のニーズに応じた編集をしている。

② 各学級で直ぐ取り組めるアイデアが豊富。

ほぼすべてのアイデアが実際に鳥取市内で取り組まれているアイデアであるため、いきさつや方法の詳細等問い合わせが可能。また、直ぐ取り組めるように具体的な手順を示している。

③ 活動ごとの意味づけが明確。

すぐ使える活動のアイデアばかりを求めがちになるが、何よりも「その活動がなぜ必要なのか」「その活動を何のためにさせるのか」という意義や構えをしっかりもつことが大切。そこで大まかには、意義→具体的活動・アイデア→留意点という活動の流れに沿って

記述している。

学級経営の心得

1 学級経営と特別活動

学級経営とは、**教師が「学級集団の育成を通して自己実現を支援する」営み**であり、個々の教育課題（授業、指導計画、係委員会活動等）と発達課題（児童理解、集団活動、リーダー育成等）が達成できるように、計画・運営することである。

特別活動は、「望ましい集団活動を通して」ということを前提として実践的な集団活動を行うことを特質とするため、学級経営での位置づけは大きい。**特別活動も学級経営も「集団活動」を方法原理としている**ためである。つまり、特別活動がしっかりできていることが、学級経営の安定につながる。**特別活動まるごと学級経営**と言われる所以である。

2 学級経営の心得

学級経営を進めていく上では、押さえておきたい心得がある。なぜなら、**「心得ておくと見方が変わる。見方が変わると態度が変わる。態度が変わると行動が変わる。行動が変わると学級が変わる。」**からである。

心得その１ 学級は生き物・生もの

学級は**生き物のごとく成長する**。放っておくと病気にもなる。上手く指導していけば、一斉に笑ったり考えたり活動したりし、明確な意思さえもつようになる。そして、学級は**生もの**である。手早く調理をすると素晴らしい味を出すが、何もしないとすぐ腐る。しかもこの生ものには**旬**がある。**時期とタイミング**をはずさなければ、とてつもなく進化する。学級は、生き物で生ものだと思って扱うことが大切だと心得たい。

心得その２ 終わりのイメージを詳細に

「凄い学級を創るぞ！」とホームランねらいで意気込むよりは、**「そこそこの学級」**をねらい、ポテンヒットでもバントでも出塁を増やす工夫を積み重ねた方が気持ちは楽。ただし、４月当初から**「最終的にどんなことを言ったり、したり、書いたりする子どもたちにしたいのか」**という**「終わり（到達）のイメージ」**を**詳細に描く**ことにこだわっていくことが大切だと心得たい。４月から詳細なイメージが描けるようになると学級経営の力量はかなり高いと評価できる。

心得その３ 競争より共創

学習や生活にある程度の競争を仕組むことは必要だが、バランスを欠くと「狂育」になる。そこで、子どもたちの考えやアイデアを採り入れ、**学級経営に参画させ**、教師と共に学級を創る**「共創」**の方向を目指したい。そうすると、教師も子どもも判断し表現する場が増えるため、**失敗も増えるが、力もついてくる。**

ただし「共創」するためには、教師自身に**明確な見通しと相当の時間と手間をかける覚悟**が必要になる。それでも挑むのは、子どもたちがみるみるうちに変容していくからである。今後は**「共創」の学級経営に挑み続ける**ことが大切だと心得たい。

心得その４ 3つの門がまえ

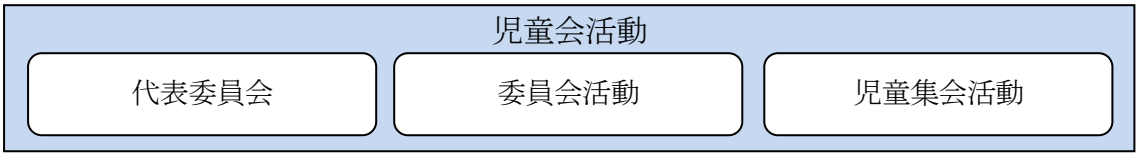
学級担任は、経験年数に関わらず、良いことも悪いことも抱え込み、「閉じる」傾向が強い。「閉じる」と、外からの評価が嫌みに聞こえたり、判断が自分勝手になったりするため、いわゆる**危機管理意識が低くなる**。そうなると学級経営はおぼつかない。

そこで、**「内（自分・学級内）にも外（保護者・地域）にも開く」**ことを心がけたい。具体的には**「聞く」こと＝情報を仕入れること**、と**「問う」こと＝良いことも悪いこともできるだけオープンにすること**である。担任になったその日から、毎日学級の窓を**「開」**いて、自分を含めた大勢の人の声を**「聞」**き、したことを世に**「問」**うことが大切だと心得たい。

委員会活動のアイデア

1 委員会活動の意義

委員会活動は児童会活動の目標を具現化する３つの活動形態（代表委員会、委員会活動、児童集会活動）の１つとして位置づけられている。



児童会活動の目標

> **児童会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。**

この目標は、今回の指導要領の改訂で新たに示されている。とりわけ「よりよい学校生活づくりに参画し」の「参画」の文言は、教育基本法の第２条三に「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に**参画**し、その発展に寄与する態度を養うこと」と示されていることとつながっている。さらに、**「協力して諸問題を解決しようとする自主的・実践的な態度」**は、指導要領改訂の趣旨にもあげられている**「自治的能力の育成」**を意図している。

こうしたことを受けて、学習指導要領解説では委員会活動について次のように示されている。

> 学校内の自分たちの仕事を**分担処理するための活動**である。主として高学年の全児童が、いくつかの委員会に分かれて、自分たちの学校生活を向上発展させ、より豊かにしていくために、**児童の発意を生かし、創意工夫して**実際の活動を分担して行うものである。

ポイントは２つ。一つは、委員会活動を**「分担処理するための活動」**を位置づけた点。もう一つは**「児童の発意を生かし、創意工夫して」**という点である。つまり両方を意識して委員会活動に取り組むことで、**参画する態度と自治的能力の両者を育成**していこうとしているのである。

2 委員会活動内容の構成

委員会活動では、大まかに「**参画する態度**」と「**自治的能力**」の育成を意図した、**当番活動**と**創造的な活動**とに活動内容を分けて構成することが多い。

> **①安心・安全な学校生活の充実を図るための当番活動（常時活動）**
> **②児童の創造的な活動により豊かな学校生活向上を図るための活動（創造的な活動）**

活動内容	
①安心・安全な学校生活の充実を図るための当番活動（常時活動）	**②児童の創造的な活動により豊かな学校生活向上を図るための活動（創造的な活動）**
＊全校児童が安心・安全な学校生活を送るために必要な仕事 例　放送、花の水やり、動植物の世話、保健活動、給食の配膳、後始末の世話、本の貸し出しの世話、運動器具の整理整頓、アルミ缶集め、ベルマーク回収と集計、あいさつ運動	＊創造的な活動により、学校生活がより楽しく豊かになる活動 例　読書祭り、動物クイズ、キャップ集め大会、ドッジボール大会、全校リレー大会、１００％廊下歩こう運動、そうじがんばり週間、募金活動、読み聞かせ活動、

特に②「児童の創造的な活動により豊かな学校生活向上を図るための活動（創造的な活動）」に取り組むと、委員会の中での**自主的な話合い活動や集会活動の活性化につながっていく**ことが想定される。また、②創造的な活動への取り組みは、**各委員会どうしの連携・協力・分担が必要な場面を生み出し**、結果的に学校教育目標や各学校の児童会活動の目標達成に向けたアプローチにもつながっていく。ただし、②創造的な活動のみに活動が集中するとバランスを欠く。あくまで委員会活動は①と②の両方の内容があって、はじめて児童会活動の目標達成に向いていく。

また、委員会活動は「参加」ではなく、児童自身が「参画」していくことに大きな意味がある。ともすれば教師は「委員会活動はこれまでからあるので、児童は参加するものだ」という意識をもってしまう。しかしそれでは「参加」で終わってしまい、「参画」には至らない。そこで、「参画」を促すためのアイデアが、前述した活動内容②なのである。活動内容①と②は別々ではなく一体としてとらえるものだが、とりわけ活動内容の**②創造的な活動は、「参画の態度」を促すだけでなく、「自治的能力」の育成にもつながる重要な仕掛け**として、指導計画に組み込んでおきたい。

こうした委員会活動内容の構成の工夫は、**キャリア教育の流れにも沿っている**。委員会活動をとおして「人間関係をつくっていくこと」や「役割を果たすこと」「責任を持って働くこと」「みんなで課題を解決していくこと」などを育成していくことは、キャリア教育で育てる諸能力とすべて合致しているのである。

３　委員会活動の編成のアイデア

委員会の編成に向けては各学校の実態によって違うが、４月の早い段階で以下の点に留意して構築したい。

○　学校をより安心・安全で楽しいものになるように、児童が必要と考える委員会
○　学校運営上、教師が必要と考える委員会
○　学校生活の充実・向上を図るための分担処理をするという側面からも仕事量に大きな偏りがなく、児童が満足感を得られるような委員会

児童の自主的・自発的に活動したいという願いと教師からの願いの両方で委員会が立ち上げられることが望ましい。そこで子ども達と一緒に創り上げるという視点から以下のよ

うな手順をふまえたい。学校や教育課程、児童の実態からそれぞれの学校でのやり方があり、学校独自のやり方で編成は行うが、１つの例として紹介する。

（1）委員会活動立ち上げまでのスケジュールと内容、アイデア例

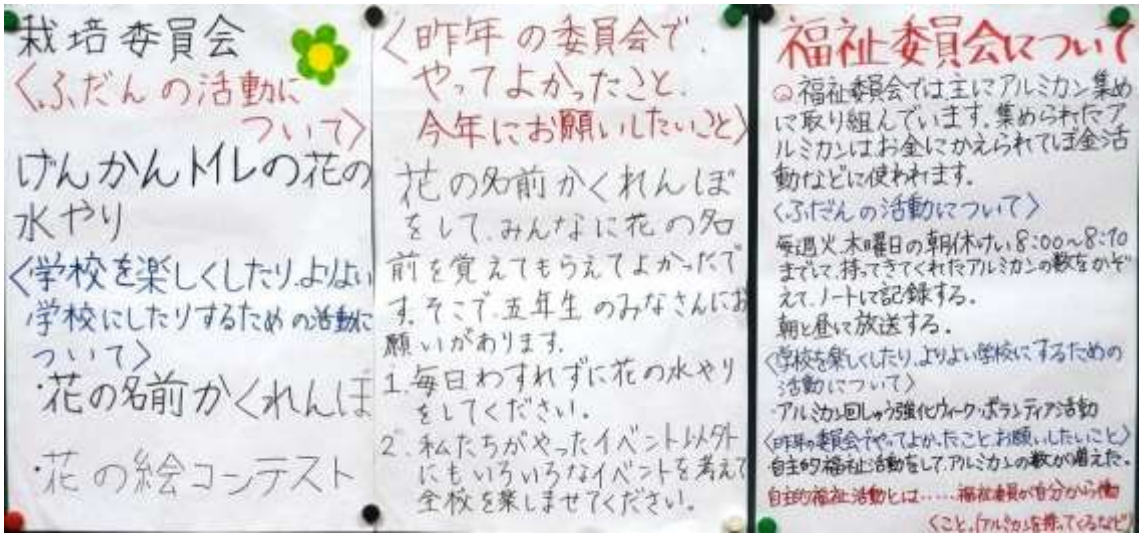
スケジュール	主な内容	アイデア・留意点
前年度末（2月末）	○１年間の委員会活動の状況をふり返る。 ・仕事内容 ・委員会の所属人数 ・創造的な活動への成果と課題等 ⇩ **次年度への委員会組織立ち上げの情報にする。** ○次年度、委員会に入る学年児童への見学会を行う。	○各委員会での 1 年間の活動状況をふり返る。学校教育目標と各学校の児童会活動の目標に対してどうだったのかを基準にすると分かりやすい。ここで話し合われたことは５年生児童が引き継ぎ、次年度に申し送りする。 **・自分の所属していた委員会は必要か、** **・どこかの委員会と合併した方がよいのか** **・新たに委員会を立ち上げた方が効果的か** ○次年度、初めて委員会に入る学年については見学会等を設け、意欲づけをする。
前年度末（３月）	○来年度の委員会組織について検討する。	○児童から出た委員会組織を教職員で見直し、次年度への方向性を決定する。
新年度（４月）	○職員会で委員会組織等を提案する。	○年度末の委員会組織の方向性をもとに教職員で検討し、提案する。
４月	○新６年生による委員会の所属と、委員長、副委員長を決定する。 ・６年生が委員会のテーマや活動内容、創造的な活動についての案を作成する。	○新6年生による委員会を立ち上げ、担当の教師との話し合いを休憩時間等を使って行っておくとよりよい。 ○創造的な活動について特に休憩中を使って計画・実施していくことが多い。そのため、子ども達が活動を自分達で決めて、それをしたいと思うように指導していくことが自主的な活動への展開につながる。
４月	○６年生から５年生への委員会活動の提案を行う。 ・委員会のテーマ（案） ・常時活動と創造的な活動（案）	○５年生から初めて委員会に所属する場合、なかなか各委員会での活動のイメージが持てない場合がある。新６年生が考えた案を見て、一緒に活動していこうという意欲づけにしたり、所属決定の判断にしたりする。
４月	○今年度の各委員会に所属する全児童を決定する。	○委員会に所属する全児童が決定したら、メンバーや活動場所等を各学級に配布する。

（2）委員会活動での初日の工夫

新６年生が作成した各委員会の案について、委員会所属の児童全員と担当教員で考える。考えていくことは以下のとおりである。

・1年間（前期・後期制であれば半年間）の各委員会のテーマ
・学校をよりよくしていくための願いと実現方法

新６年生が作成した案をもとに共通理解をしたり､付け加えたりする活動を通して、児童も教師も見通しを持ち、願いを持って活動することができる。また、決まったことは学校で統一した画用紙などに書き、掲示板等にはり出すことで、各委員会の様子や連携の取り方などの目安にすることもできる。



６年生が作成した各委員会の案を画用紙にまとめる。今年度、委員会に初めて入る学年の教室前に掲示し、子ども達にどんな活動をするのかを見通しを持たせるとより効果的である。また、自分が所属する委員会での願いや活動を委員会初日までに**視覚的に見ておくことで話し合いも活発になる。**初日の委員会ではこの案をもとに修正を書き込み、後日、全校児童が見えるところに掲示すると児童にとって見通しが持てる。

(3)新6年生(新メンバー)に引き継ぐ工夫

学校によっては前期後期制、通年制など様々である。どちらにしても、自分達のやってきた活動がどうだったのかをきちんとふり返ることが次年度にもつながり、学校の文化として継承されていくと考える。また、こんな委員会活動にしていこうという願いを下学年に継承していくことは次年度の委員会活動への意欲への高まりと連帯感を生むことにつながることが多い。ここで引き継がれたことを学校で統一した画用紙などに新６年生の子ども達がまとめておくと、新年度に効果的である。

3 委員会活動のアイデア

(1)委員会の活動内容とネーミング

委員会の所属が決定したら、最初の委員会活動の時間に委員会のネーミングを決定すると、より児童の自主的な活動が期待できる。ただしネーミングをする際、各委員会のテーマ（この委員会でこんな学校にしたいという願い）や仕事内容に合うものにする。

☆委員会のネーミングや活動内容例

委員会名	ネーミング例	活動内容例
運営	○○小バージョンアップリード	・代表委員会の計画・運営。代表委員会だよりの発行 ・あいさつ運動

		例　全校あいさつリレー ・児童総会等の計画・運営 ・各委員会の連携調整
図書	ブック カラフルブック	・図書室の利用促進のための活動 ・校内読書の推進活動 ・読書月間の取り組み 例　児童による読み聞かせタイム 朝の連続小説シリーズ、巨大絵本づくり 本のしおりコンテスト
放送・広報	ブロードキャスター ○○小報道局 スマイルスクープ	・校内放送の企画と運営 ・行事の記録や紹介 ・掲示板等の活用や校内新聞づくり 例　○○小新聞、テレビ放送
飼育	生き物育てよう アニマル ラビット仲良し	・飼育舎内小動物の世話 ・環境整備 ・動物等に興味を持ってもらう企画 例　ペットコンテスト、１日飼育体験イベント
栽培	フラワー 花いっぱい	・草花の世話と花のある環境づくり ・草花等に興味を持ってもらう企画 例　花の名前クイズ、花の種配布、植樹祭
福祉・環境	国際 ボランティア チョボラ	・アルミかん、ペットボトル、ベルマーク集め ・募金活動 ・ボランティア活動の推進活動 例　環境に良いせっけん作り、ペットボトル積み大会
体育	スポーツ	・一輪車や竹馬等の環境整備 ・体力向上の推進活動 例　異学年○○スポーツ大会、○○運動教室
美化	キラピカ クリーン	・清掃活動の推進活動 ・ゴミの分別・回収 例　だまって掃除しよう週間、ぞうきんがけリレー大会
集会	パーティー イベント	・集会活動の計画・運営 ・各委員会等の連携を図った集会活動の推進 例　紅白歌合戦、６年生を送る会 チャレンジランキング集会
保健	赤十字 健康第一	・けが人の世話 ・清潔、安全のための推進活動 例　校内安全マップ作り、健康替え歌コンクール
給食	ランチ 給食残さず食べよう おいしい	・給食の準備、片付け ・楽しい給食にするための企画 ・給食月間の取り組み

		例　給食川柳コンテスト、お礼の手紙 給食残食調べ

（2）活動のアイデア事例

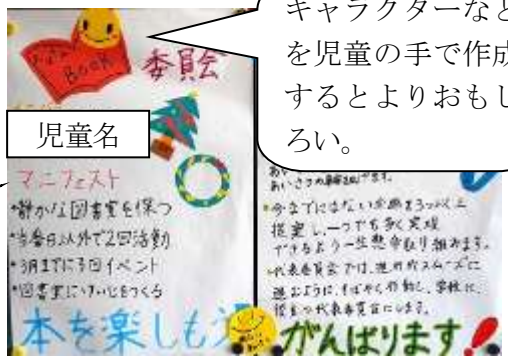
委員会活動の掲示の工夫

①　　全委員会の活動計画

委員会のテーマ（委員会活動を通してどんな学校にしたいのか）や活動内容等を明記したものを掲示するようにする。書く内容としては委員会のテーマ、常時活動の内容と役割分担、創造的な活動の内容等である。創造的な活動については、通年制であれば１年間の予定を、前期後期制であれば半年間の予定を計画し、目に見える形で掲示しておくと、児童にとっても教師にとっても見通しが持てる。

児童の顔写真などがあるとより効果的である。

自分達でどんな活動を実現していくのかをまとめる。



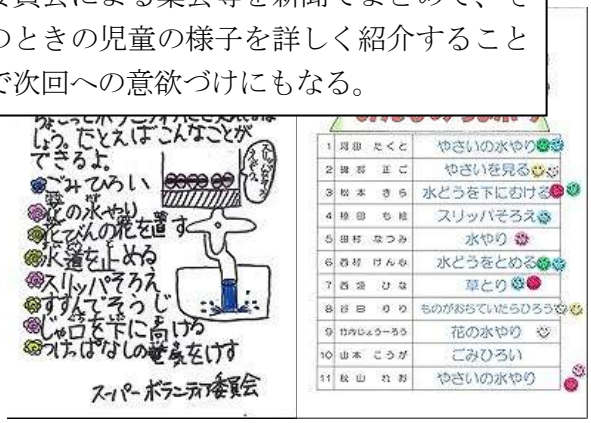
キャラクターなどを児童の手で作成するとよりおもしろい。

②活動を知らせる掲示

毎朝、児童玄関に行事や全校児童に向けたメッセージ、クイズをボードに書いてみてもらうようにする。

委員会による集会等を新聞でまとめて、そのときの児童の様子を詳しく紹介することで次回への意欲づけにもなる。

アルミかんやペットボトルのキャップを多くの人に協力してもらうために、縦割り班ごとに人数を集計して、掲示する。給食時の校内放送で各色の人数を放送することでより効果的になった。



福祉委員会によるボランティア活動の推進活動。「ぼく・わたしのちょボラ」として毎日継続できるボランティア活動を決め、教室に掲示して月ごとにふり返るようにしている。

各委員会の連携の工夫

中学校区で一緒に取り組んでいく活動や校内で特に力をつけていきたい項目について各委員会がそれを達成できるように、それぞれが役割分担をし、連携を取りながら活動を進めていくことがある。教師主導で行っていたものが、１つの目標を達成するために全部の委員会で取り組んでいくことになるので、児童主体の活動に変わり有効であった。しかも、委員会同士の横のつながりを感じることができる工夫である。

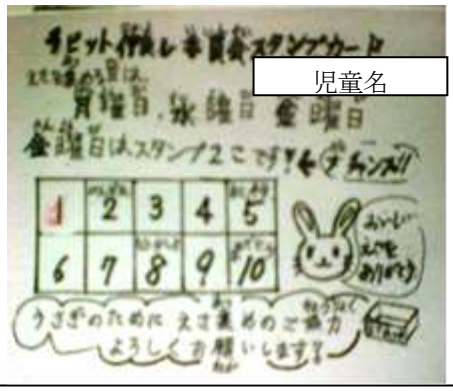
平成24年度　委員会活動　100%週間への取り組み

委員会名	11日(月)～15日(金) あいさつ	18日(月)～22日(金) 時間	25日(月)～29日(金) 返事	2日(月)～6日(金) そうじ	9日(月)～13日(金) ろうか歩行
運営	校門から児童玄関前までさわやかロードをつくる。始学年を誘う。 校舎内をまわる。	休憩終了時の声かけ	高学年が手本を見せる。		学級リーダー・委員長が校内で声かけをして回る
集会	ポスターづくり 教室を回って、あいさつをする。				
体育	あいさつ運動に参加する。	休憩終了時の声かけ			
飼育	あいさつ運動に参加する。				
栽培	明るく元気にあいさつをする。 ポスターを描き、はる。				
図書		図書の作業を時間を守ってやる。 休憩終了時の声かけ			
放送	放送で呼びかける 手本を見せる				
保健				がんばっている人を放送で紹介	がんばっている人を放送で紹介
広報	ポスターを描き、はる。			ポスターコンクール	
給食	クラスごとに呼びかける。できたクラスを月曜日に発表 進んであいさつ	放送を聞いて声をかけていく			走っている人を注意する
美化				黒板に書いて呼びかける ポスターづくり レベル表の作成	

全校児童の意欲を高める活動の工夫

①スタンプカードの活用

うさぎのえさ・アルミ缶集めなど、全校に呼びかけて協力してもらいたいが、なかなか集まらない。そこで、委員会で話し合ってスタンプカード方式に取り組むことにした。ちらし･放送で紹介したところ、下学年が楽しみながらうさぎのえさ・アルミ缶集めに協力し始めた。登校中、朝の学級等で、空き缶の音が鳴り響き、全校に広がった。委員会の活動が活性化していった。



えさを集めるのは、月・水・金だが、金曜日はスタンプ２こ（大チャンス）、マスの中には「がんばれ」「あと半分」「もう少し」「おめでとう」などの言葉があり、スタンプ集めの励みになった。

アルミカンを１０こもって来たら、スタンプ１こ押してもらう。スタンプが５こ集まったらクイズ大会に参加できるという楽しみで、多くの児童がアルミ缶を持ってきていた。

②集会活動との関連

例１　植物クイズラリー

「毎日水やりをして、植物を大切にしよう」の月目標を受け、身近な植物に親しみ、もっと仲良くなり、友達になれるように、栽培委員会が“植物クイズラリー”を計画した。全問正解者には栽培委員会から育てた苗をプレゼント。

例２　生活目標と児童集会との関連

生活目標については、具体的に何を直したいのか、何を守ればよいのかを代表委員会で話し合い、各委員会ごとに月ごとで集会と兼ねて担当する。児童集会では、生活目標についての発表だけでなく、委員会活動の紹介を行い、全校で一つの方向に向かえるようにする。

運営委員会・・・あかるいあいさつをしよう
健康委員会・・・健康なくらしをしよう
栽培委員会・・・美しい学校にしよう
生活委員会・・・身だしなみを整えよう
福祉ボランティア委員会・・・ありがとうを伝えよう
図書委員会・・・読書をしよう
体育委員会・・・元気な体を作ろう
給食委員会・・・かんしゃして、残さず食べよう
情報委員会・・・心を形に表そう

(3)評価の工夫

委員会活動も係活動同様に評価の仕方しだいで、活動がさらに活発化する。しかし、委員会活動は複数学年の所属があるため、評価のためにショートの時間であってもふり返りをしたり、見なおしたりする時間がもちにくい状況がある。また、教師自身も担任ではない児童を受け持ち、評価するので、活動の様子や記録が残るような環境を作っておくことが重要になる。

①　委員会活動ノートを作成する。

委員会活動ノートを用意し、毎日の常時活動等のふり返りができるようにする。自分がいつ、何をどんな形で行ったのかなど、具体的なふり返りができるシートを用意しておくことが大切である。また、活動の中でがんばっていた友達の肯定的な内容を書く欄などがあるとお互いのつながりも増し、効果的である。創造的な活動については、その都度、時間をとってふり返ることが次への活動への手がかりになるので、成果と課題をしっかり個人としても、委員会自体としてもまとめておくとよい。

最初の委員会では委員会名、役割、メンバー、願い、常時活動、創造的な活動、活動予定などをノートやファイルに記録を残すようにする。その都度の委員会活動で自分たちが学校生活をより豊かなものにしようと考えていた願いや活動の進行状況などをその都度振り返り、意欲づけにしたい。

また、年度末や学期末には、次年度に向けての資料として話し合われたことを資料として残すようにする。

②毎月の委員会活動でふり返る。

毎月の委員会活動で今月の自分達の活動をふり返る。ふり返る視点としては活動内容も大切であるが、委員会活動を立ち上げたときに考えていた委員会のテーマ（委員会活動を通してどんな学校にしたいのか）に近づけているのかを１つの目安にしたい。その視点を持たせることで、もっと委員会自体に創造的な活動を取り入れたり、自分自身の活動内容や態度が今の状況で達成できているのかを見つめ直したりすることができる。

③自己評価を行う。

自分用のふり返りカードに評価をしていく。毎月の委員会活動で行う。

年　組　番 名前

【委員会の目標：前期】
【自分の目標　：前期】

月	活動内容 ふり返り→ ◎よくできた ○できた △もう少し	自分から進んで活動しようとしましたか。	友達と協力して活動できましたか。	楽しく豊かな学校生活をつくるために、活動を考えたり工夫したりすることができましたか。	自分の役割に責任をもって取り組むことができましたか。	自分の考えを活動にいかせましたか。	【感想】 ・よかったこと ・もう少しがんばりたいこと （日々の当番活動もふり返って）
4		◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	
5		◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	
6		◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	
7		◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	
8 9		◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	◎・○・△	

【前期の反省】	ふり返り	【担当の先生から】
	◎・○・△	

後期　委員会活動カード

評価カードを使う際に考えておきたいことは以下の通りである。

・ふり返る視点をきちんと持たせる。できれば、それぞれの観点を具体的にする方が児童にとってはふり返りやすい。

集団活動や生活への関心・意欲・態度
集団の一員としての思考・判断・実践
集団活動や生活についての知識・理解

・短時間でできるカードにする。
・教師からの評価を返すような仕組みを作る

4　活用に向けて

（1）児童にとって主体的な委員会活動になること

委員会活動は、当番活動はもちろんであるが、児童の目標意識によって大きく変わるものである。**「この委員会活動でこんな学校を創りたい」という願い**をしっかり持たせることが必要であり、それが委員会活動への主体的な参画にもつながる。学校運営上、どうしても人数や男女比等の調整は必要であるが、どの委員会になっても自分達で学校文化を

創るという意識を持たせて所属を決定し、活動に取り組ませていきたい。

（２）全教職員で取り組むこと

児童主体とはいえ、教師側の願いも当然取り入れていく必要はある。全教職員で取り組み、モデルやアイデアを提供することも大切なことである。そして、子ども達の取り組みやがんばりを担任だけでなく、**全教職員で認めていく過程**が意欲づけになり、自己肯定感の高まりにもつながる。

（３）見通しを持った活動へ

１年間、または半年間の自分達がしようとする活動の流れが分かるようにすることが児童にも教師にもゆとりを持ち、満足感の得られる活動につながると考える。年度初めに年間、または半年間の計画案を立て、「各委員会との連携はとれないか」や「行事が重なりすぎていて調整した方がよいのではないか」などの検討をし、決定していく。それを**目に見える形で（例えば掲示など）子ども達にふれさせることで委員会活動への見通しを持たせたい**。

（４）児童から児童への学校文化（委員会文化）を引き継ぐプロセスを大切に

６年生は最高学年として委員会活動をリードしていくが、年度末には５年生に引き継ぐことになる。この学校を、**この委員会を来年度はこうしてほしいという「願い」を5年生に伝える**ことができれば６年生にとっても、５年生にとっても効果的である。６年生は小学校で培ったものが中学校での生徒会活動へ、５年生は来年度の最高学年としての自覚へとつながる。そのような願いを児童が持つためにも、委員会活動が児童の自主的・自発的な活動で達成感や満足感が得られるような活動にしなくてはならない。

代表委員会のアイデア

1 代表委員会の意義

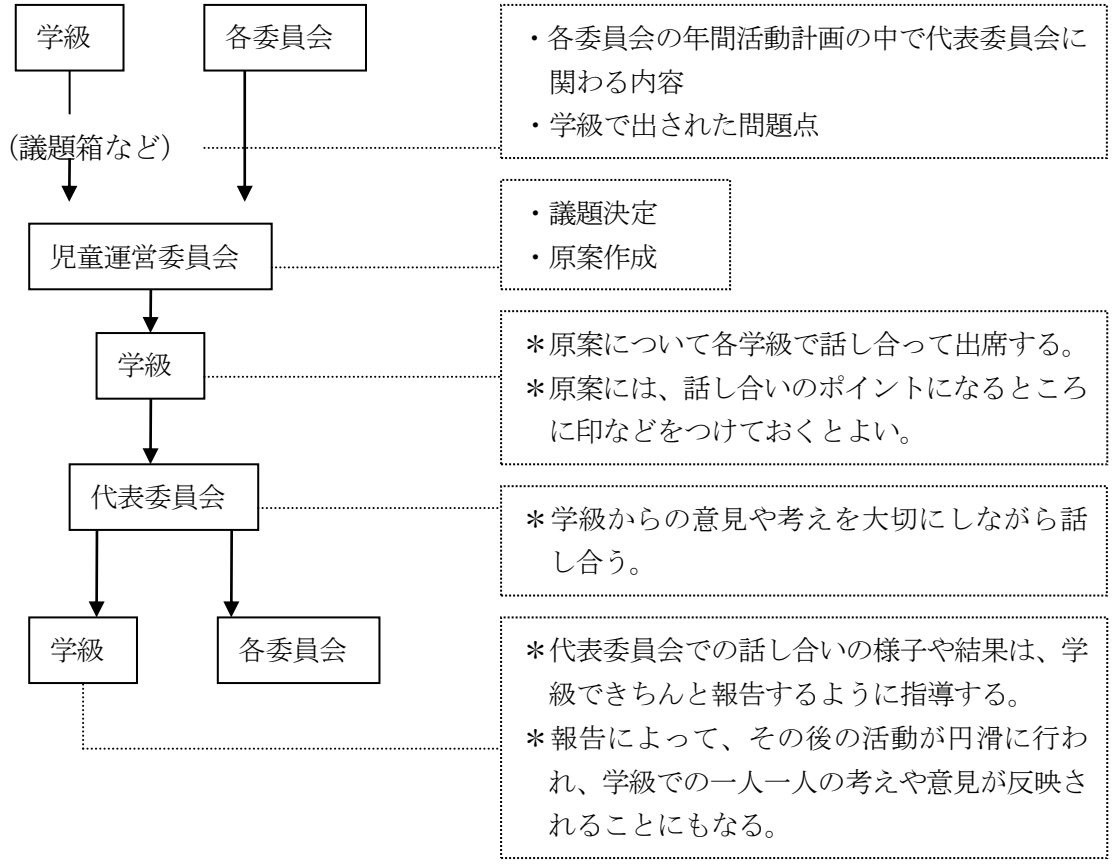
代表委員会は、**自分たちの学校生活の充実と向上を図るために、学校生活に関する諸問題について話し合い、解決を図るための活動を行う**。主として高学年の代表者が参加して、学校生活に関する諸問題について話し合い、解決を図るための活動であり、全校児童の意向を反映し、学校生活をより向上発展させるための**自発的、自治的**に行われる活動である。

代表委員会の構成，組織は学校の実態によって異なるものであるが，主に高学年の学級代表，各委員会の代表，関連する内容等必要に応じてクラブ代表が参加する。

代表委員会において，話合い活動の計画や準備等を行い，円滑に運営する組織として運営委員会（または児童会計画委員会）を設置し，適宜交代して経験ができるよう工夫することが必要である。

代表委員会では、まず、「伝えてよかった」「伝えたから問題が解決できた」「みんなで話し合うことで自分たちのくらしをよりよくすることができた」という経験を積み重ねることで、さらに**みんなで学校を盛り上げていこうという意識を高めていく**ことが必要である。そこから、よりよい**学校生活づくりへの「参画」、他者とのより広く深い関わり**をとおして、**よりよく生きていこうとする態度の育成**につなげていくことが大切である。

＜代表委員会の流れ＞



※学級で話し合う時間

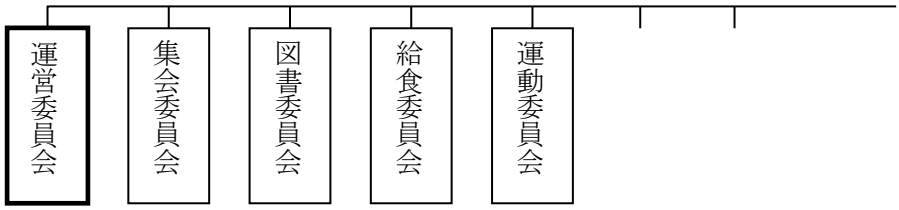
特別活動の学級活動として扱うが、議題によって１時間とる必要のないものは、朝の会や帰りの会などを活用してもよい。

代表委員会は、**学級会の学校版**である。「こんな学級にしたいな」という思いを「こんな学校にしたいな」という思いに発展させ、よりよい学校生活づくりに参画していくことが大切となる。なぜなら、こうした力が、**将来関わるであろう職場や地域社会においても必ず必要となる力**だからである。例えば、会社や地域でイベントを考えたり問題解決を図ったりする場合、関係者が集まり合意形成を図ろうとする。そこには、「よりよい職場に。よりよい地域に。」という職場づくりや地域づくりに参画しようという思いがある。そして、決定した内容に従い、協力して実現しようとする。価値観の多様性が広がっている現代の状況を考えれば、今後はさらに**多様な考えを引き出し、認め合い、生かし合いながら合意形成を図り、共に生きていくような人間関係が自ら築けるようにしていくこと**が求められている。

２ リーダー選出のアイデア

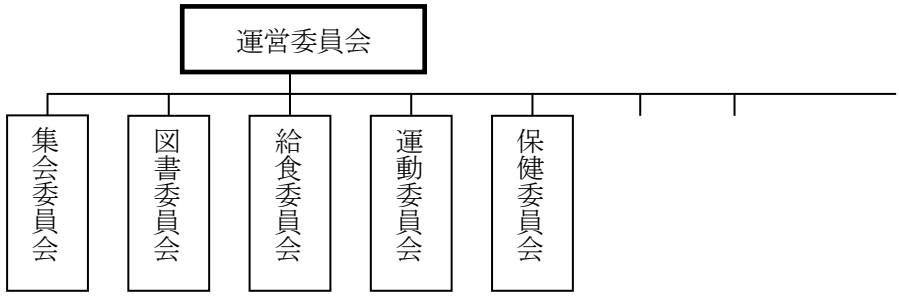
委員会の核となる運営委員会のメンバーは、特に「学校を元気にしたい」「学校を盛り上げたい」という、学校づくりへの参画意識の高さが求められる。そのため、委員会立ち上げの前に教師から「学校づくりへの熱い思い」「活動すべてが学校の歴史につながる」「運営委員は学校の顔」などの思いを伝え、やる気を高めておくことが重要となる。

（**その1**）委員会の一つとして、運営委員会を置く構成



・委員会の一つとして選択する。

（**その2**）各委員会の委員長で運営委員会を編成



・委員会の一つとして選択するのではないので、より学校づくりに参画したいという思いが強調される。

（**その3**）前期、後期とも、すぐに活動できるように、事前にリーダーを選出しておく。

・前期運営委員長は、学年の児童・教師の話し合い、または選挙によって 5 年の 3 月末までに決定する。
・前期のその他のリーダーは、前学年の 3 月末に候補者を選出する。4 月のクラス編成後にリーダー会議を開いて、各担当を決定する。
・　後期役員は、学年児童・教師の話し合いにより、9 月末までに決定する。

3 議題のアイデア

代表委員会の議題として
・前学年に共通の問題であること
・子どもの自治的な活動の範囲を超えないこと
・子どもの手によって解決し、実践の見通しがもてること
・創意工夫の余地があること
について配慮し、議題を設定する。

議題設定をする時の配慮として、**子どもの思いを生かした切実感のある議題**が望ましい。また、子どもにとって、**学校生活が楽しくなる予感を感じさせたり、学校での取り組みに見通しを持ったりすることができるような議題**にするため、教師は子どもとよく話し合いながら、その思いを実現できるように支援していくことが必要である。

（**その1**）○ 限られた時間の中で話合いを進めるために、できるだけ焦点化した議題にすることが望ましい。

・代表委員会活動の組織や運営に関すること
「代表委員会の年間計画を立てよう」
「一年間の振り返りをしよう」
・学校環境を改善する方法に関すること
「プランターに花を咲かせよう」
「掲示板を利用して活動の様子を知らせよう」
・全校児童の集会活動に関すること
「縦割りなわとび集会をしよう」
「全校オリエンテーリング大会をしよう」
「学級目標と学級の旗を紹介しよう」
・委員会の活動計画や実践に関すること」
「動物となかよくなろう」
「ブックマラソンをしよう」
・集団生活の改善や、日常生活の規範に関すること
「クリーン作戦できれいな学校にしよう」
「あいさついっぱい運動をしよう」
・学校行事への参加に関すること
「運動会を盛り上げる工夫をしよう」
「縦割り遠足で行うオリエンテーリングの方法を工夫しよう」

○ 望ましくない議題

・教育課程に関すること

「休み時間を長くしてふれあい活動をしよう」

・金銭徴収に関すること

「一人〇円以上の募金をしよう」

・安全管理上の問題に関すること

「屋上の使い方を決めよう」

・人格を傷つけるような結果が予想されること

「クラスの何でもベスト３を紹介しよう」

・健康安全上の問題に関すること

「学級対抗駅伝大会のやり方を決めよう」

（**その2**）議題は、学校行事や〇〇週間に合わせて各委員会や学年が案を考える。

【例】４月：運営委員会「元気なあいさつで一年をスタートしよう」
５月：保健委員会「歯を大切にしよう」
６月：放送委員会「学級紹介をしよう」
７月：運営委員会「運動会のテーマを考えよう」
９月：運営委員会「前期の振り返りをしよう」
１０月：運営委員会「学習発表会のテーマを考えよう」
１１月：図書委員会「校内読書祭りの取り組みについて」
１２月：給食委員会「給食週間の取り組みについて」
１月：運営委員会「チャレラン大会を成功させよう」
２月：５年生　「６年生を送る会について」
３月：運営委員会「一年間の振り返りをしよう」

「各委員会、学年からのお願い」では、日々の生活の中で気づいたことをみんなで確認する場、声をかけ合う場とする。学校生活の中で問題となっていることがたくさん出てくるが、**よくないことをあげるだけで終わるのではなく、どうしたらよいか、どんな言葉で呼びかけをしたらよくなっていくかを考えて意見を出し合うようにする。**

【例】保健委員会：〇階のトイレのスリッパがそろっていてとてもいいです。みんなで気をつけましょう。
運動委員会：ミニイベント「サッカーシュート大会」への参加ありがとうございました。参加人数は〇人でした。結果は〇〇でお知らせします。次のイベントでも協力をお願いします。
栽培委員会：一人一鉢の取り組みが始まっています。水やりを忘れずにしましょう。
運営委員会：あいさつ運動へのご協力ありがとうございました。特に下学年の元気な声がよかったです。

４　年　生：竹馬を片付けるときは，番号に合わせて片付けてください。
よろしくお願いします。
６　年　生：ろう下や階段は，安全に歩行しましょう。外で遊べない日が
多いですが，みんなで気をつけましょう。

（**その3**）運営委員会が議題を考える。

【留意事項】①学校全体としての問題か。

・一部のクラスについての問題なら全校で話し合う必要はない。
運営委員が全校の実態をきちんと把握することが大切。

②例年通りになっていないか。

・児童の実態をふまえ、運営委員が身の回りの様子をよく考えたり、他の委員会に働きかけたりして議題を決める。

（**その4**）＜柱１＞　学校教育目標「かしこく（知）」「やさしく（徳）」「たくましく（体）」について、全校での取り組みを話し合い、振り返る。

＜柱２＞　生活課題を話し合う。

【例】代表委員会の議題

月	日	柱１（学校目標）	柱２（生活課題）
4	24	学校目標前期の取り組みについての話合い	
5	28	学校目標「　」の振り返り・取り組み方	
6	26	学校目標「　」の振り返り・取り組み方	
7	17	学校目標「　」の振り返り	運動会のスローガン
8			
9	27	学校目標後期の取り組みについての話合い	
10			
11	20	学校目標「　」の振り返り・取り組み方	
12	18	学校目標「　」の振り返り・取り組み方	
1	29	学校目標「　」の振り返り	
2	19	６年生を送る会についての話合い（５年生が運営）	
3			

＊学校目標の振り返りについては、学級で取り組んでみた具体的事項の情報交換をして、他の学級の今後の取り組みの参考にする。

＊生活課題については、運営委員会で生活を振り返ったり「学級からのお願い」を参考にしたりして、運営委員会で議題を決定する。

＊委員会のかかわり

○「知」：広報委員会、図書委員会など

○「徳」：飼育委員会、栽培委員会、集会委員会など

○「体」：運動委員会、保健委員会、給食委員会など

委員会として関連して活動できるようであれば、全校に働きかけていく。

４ 代表委員会の準備のアイデア

どの学校でも、忙しい学校生活の合間を縫って代表委員会を運営しているのが実態と思われる。では、その準備はいつ行うのか。司会団で集まり、会議の流れを確認したり板書計画を話し合ったりする時間の持ち方や工夫について一例を紹介する。

＜時間の工夫＞

給食時間を活用する。

・当日までに司会団が集まり、役割分担をしたり会議の流れを確認したりする。

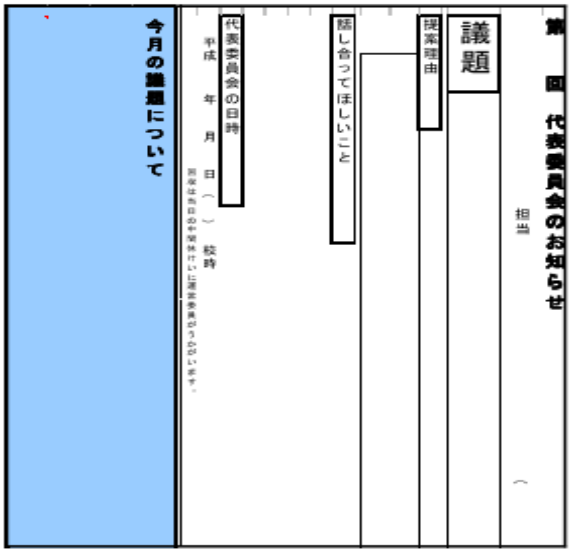
・当日は、各学年からの意見が板書してある児童会室で、全体の意見を見ながら似ている意見をグループに分けたり方向性を話し合ったりして、焦点化を図る。

＜板書の工夫＞

各学年の意見を短冊に書いておくと、似ている意見をグループ化するときに動かしたり、意見を取り下げたり決定したりするときに、短冊を上げ下げすることができるので、見やすい板書になり思考が深まる。また、**その後の、代表委員会の報告や掲示などへの活用**も考えられる。

短冊を使った板書の工夫

＜議題用紙の工夫＞



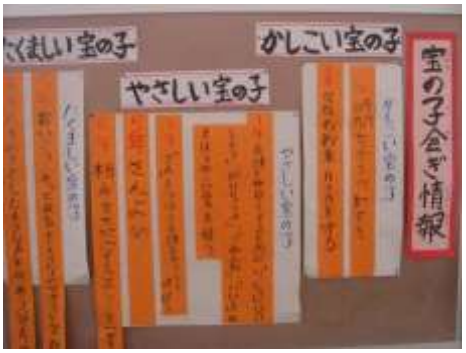
改めて、板書したり短冊に書き直したりしない方法として、左のような**議題用紙の工夫**もある。Ｂ４（またはＡ３）サイズの用紙の着色部分に学級で話し合ったことを大きくペンで記入し、切り取って提出してもらう。これも、短冊同様、話し合いの中で移動が可能である。

５ 報告のアイデア

代表委員会で決まったことは、**報告用紙に記録して各学級に配布する**ことはもちろんだが、**決定までの話し合いの内容や、何年生の意見が採用されたのかなどの報告**があると、各学年で話し合ったことの意義を感じたり、自分たちの意見一つ一つが大切にされていることを感じたりして「話し合ってよかった」「次の話し合いもがんばろう」という思いを持つことができる。こうしておくと、一人一人が学校づくりに参画していることを実感し、代表委員会のための学級会での話し合いに意欲を持つことができるのである。

＜児童会室前の掲示＞

毎月の代表委員会の報告を掲示する。



＜全校朝会での運営委員による報告＞

毎月１日の全校朝会では、運営委員会が前月末に開かれた代表委員会の報告をする。意見を採用された学年も、採用されなかったが大切な意見だと紹介された学年も「話し合ってよかった」「学校づくりに参画してよかった」と実感する瞬間である。

２年生からは、「ろくぼくの使い方を守ろう」「ステージに上がらないようにしよう」という意見が出ていました。元気よく外や体育館で遊んで、たくましい宝の子になりましょう。そして、なるべく他学年と交流して、もっともっとなかよくなりましょう。体育館で遊ぶときは、体育館の決まりを守って、気持ちよく遊べるようにしましょう。

「たくましい宝の子」は「晴れた日は外で、雨の日は体育館の決まりを守って、なるべく他学年と遊ぼう」です。「天気のいい日は外で遊ぼう」は、３年生と５年生から出ていました。「他学年と遊ぼう」は、５年生と６年生から出ていました。「体育館の決まりを守ろう」は、４年生と５年生と６年生から。

５月の学校目標は、「たくましい宝の子」です。「晴れた日は外で、雨の日は体育館の決まりを守って、なるべく他学年と遊ぼう」です。たくましい宝の子になれるように、学級で守り方を話し合ってください。そして八十四人で決めた目標が守れるように、がんばりましょう。

～さんよびは、相手を大切にする気持ちが表れた、優しい言葉です。いい気持ちになる言葉を遣うと、相手にも優しい気持ちが伝わります。よびすてやあだなで呼ぶのはやめて、八十四人みんなを ～さんよびしましょう。そして、相手を傷つけない、いい気持ちになる言葉をつかいましょう。

「やさしい宝の子」は「～さんよびをして、いい気持ちになる言葉をつかう やさしい宝の子になろう」です。～さんよびを気にしていたのは、３年生と５年生と６年生でした。言葉遣いを気にしていたのは、１年生と４年生と６年生でした。

そして、今年は、少しステップアップして「おはようございます」だけではなく「こんにちは」や「さようなら」など、場に合ったあいさつが響き合う宝木小学校にしましょう。場に合ったあいさつをして、かしこい宝の子になりましょう。

「かしこい宝の子」は「場に合った明るいあいさつをして かしこい宝の子になろう」です。これは、３年生と４年生と５年生と６年生から出ていました。明るいあいさつは、した人も、された人も、いい気持ちにさせます。昨年の６年生がつくった伝統を、引き継いでいきましょう。

運営委員会からの連絡をします。四月二十二日の宝の子会議でもちかえった案を運営委員会で話し合いました。学校目標「かしこく やさしく たくましい宝の子」について、決まったことを発表します。

６ その他のアイデア

＜1年生代表の参加＞

１年生の代表が夏休み明けから話し合いに参加したり、６年生を送る会の話し合いから参加したりするなど､学校によって様々である｡代表委員会に参加しない期間については、話し合いの内容について、運営委員が１年担任に聞き取りをして、会議中に１年生の意見についての質問が出れば、運営委員で答えられるように準備しておくとよい。

＜教師間の協力体制＞

代表委員会が、担当職員だけの取り組みにならないように、参加を呼びかけることが大切。低・中学年であれば、質問されて困ってしまったり、思うように意見が言えなかったりする場面も出てくると思われる。そのときに担任の助けがあれば、自信を持って発言することもできる。また、全職員で全校の子どもたちを育てる意味でも、代表委員会という場での子どもの育ちも見取りたいものである。

７ 活用に向けて

(1)学校づくりへの参画意識

「伝えたから問題が解決できた」「みんなで話し合うことで自分たちのくらしをよりよくすることができた」という実感を持ってこそ、次の代表委員会への期待が高まる。運営委員会は、より学校づくりに意欲的になるし、学級会での話し合いも充実したものとなる。**一人一人の意見が大切にされていることを感じさせ、みんなで決めたことを、みんなで守ることができたという達成感を実感させたい**。

(2)リーダー養成

代表委員会の運営に、運営委員会は大きな位置を示す。「こんな学校をつくりたい」という強い願いを持って学校を見わたしてほしい。その意識や行動を全職員で認めることが意欲付けとなり、その**リーダーとしての姿が、下級生の手本となり、あこがれとなる**。そして、その姿は、**次年度へと引き継がれる**こととなる。

(3)全職員で育てる

子どもたちの学校づくりの意識を全職員で共有し、一人一人のがんばりやリーダーとしての運営委員のがんばりを認め、あるいは、せっかく代表委員会で話し合ったのに機能していないことがあれば励ましたい。**子どもたちの学校づくりへの願いを全職員でサポートし、実現できるように手助けしていきたい**ものである。

集会活動のアイデア

１　集会活動の意義

集会活動については、小学校学習指導要領解説では、「集会活動は、学級（学校）生活を一層楽しく充実・向上させるために、学級（学校）の全児童が集まって行う活動である」と示されている。とりわけ、「学級生活を一層楽しく」という文言から、集会活動の如何が学校生活の満足度を左右するといっても過言ではない。

集会活動を行うメリットとしては、次のようなことがあげられる。

① 学校生活を豊かにする
② 子どもの主体性や自主性を助長する
③ 学校や学級の文化を創造する
④ 集団で活動するよさが体感できる

つまり、集会活動のない小学校生活は、カレーに福神漬け（ラッキョウ）がついていないことと同じで、主役を引き立てる名脇役がないことなのである。それほど集会活動の存在は大きい。

２　なぜ、子ども達は集会活動が好きなのか

子ども達は、集会活動が大好きである。それはなぜだろうか。

集会に参加する側の理由として、次のことが考えられる。

①自分の居場所がある→参加するだけでも楽しいなと感じられる**安定感**がある。
②何をするかが明確→どんなことをするかがわかるから、関わりやすいし、見通しを持ちやすいので、**安心感**がある。
③友達と一緒にできる→力を合わせるといろいろできる、やってよかったという**所属感・達成感**がある。
④認めてもらえる→自分達の力で学校を楽しくできるんだという**効力感**がある。
⑤喜んでもらえる→やったことがみんなの役に立つんだという**自己有用感**がある。

また、集会を運営する側の児童には、次のような力がつくと考えられる。

①**企画力**（内容を立案する、スケジュールを立てる、役割分担をする、お知らせをする、評価する）
②**人間関係調整力**（話し合い活動を活性化させる方法には何があるのか？と考える、集団意識（共に活動するよさ、所属感達成感）を高める）

このように、集会活動は、自らも楽しみながら同時に多くの力をつけられる場・時間なのである。

３　集会活動のアイデア

＜児童同士のつながりを深める集会のアイデア＞

アイデア１

１　活動名　**「歌声集会」**

２　集会の内容

（１）「中庭合唱」…全員が中庭に向かって今月の歌を歌う。６年児童が順番に指揮、感想を担当する。

（２）「ミュージックグランプリ」

・学年ごとに歌声を中心とした発表をする。(歌を中心に・合奏・ダンスなど)

・学年ごとの発表を聴くことを通して、学年間の交流を図る。

＜プログラム＞　(司会進行：運営委員会５・６年)

①はじめのあいさつ(児童代表)

②全校合唱　(今月の歌)（伴奏：音楽部、指揮：児童代表）

③学年発表　　５年　３年　４年　先生方　２年　１年　６年

全校手遊び歌（先生方）・・・審査中に行う

④結果発表

⑤終わりのあいさつ(児童代表)

＊発表内容と時間

・学年ごとに歌声を中心とした内容(歌・合奏・ダンスなど)

・学年 10 分以内(出入り合わせて)

＊審査員と各賞について

・審査員(9 名)

校長先生、教頭先生、1 年生の先生(1 名）、2 年生の先生(1 名）、3 年生の先生(1 名）、4 年生児童代表、5 年生児童代表、6 年生児童代表

・賞(例)

パワフルで賞、元気で賞、おもしろかったで賞、たのしかったで賞、アイディア賞、グッドで賞、ナイスで賞

アイデア２

１　活動名　**「めざまし集会」**

２　集会の内容　…１５分間の児童集会

※企画・進行→児童会運営委員会

①始めのあいさつ

→今回の集会のめあてを含めてあいさつを行う。

②今月の歌を歌う

→最初に音楽主任の先生に歌のポイントを話してもらう。全校児童で歌声を合わせることで，つながりを感じさせる。

③委員会発表

→読書祭りなどのイベント情報の発信（図書委員会），給食の後片付けの注意事項の連絡（給食委員会）など，必要な委員会が行う。自分たちの学校を自分たちでよりよくしていこうとする意欲を高める。

④終わりのあいさつ

→今日の集会での様子の振り返りと次回の集会までに特に頑張ることを確認して，まとめの話をする。

アイデア３

1　活動名　**「委員会担当集会」**

2　集会の内容

（1）　全校集会を各委員会が計画する。

「○月は△△委員会担当」というように年間計画を立て、各委員会が責任をもって企画・運営を行う。

（2）　各委員会とかかわりのある内容を考え全校に呼びかけたいことを劇やクイズにしたり、意識してほしいことをゲームで取り組んだりする。縦割り班で活動できる内容を計画する。

＜環境・美化委員会＞

「エコクリーン集会」

（定期的に点検している黒板下のきれいさの発表、ごみの量調べの発表をする。）

・ごみ分別ゲーム　・ぞうきんがけ競争

・風船掃き競争

＜運動・保健委員会＞

・委員による劇「どうして虫歯になるの」

・健康クイズ

＜図書委員会＞

「読書祭り集会」

・多読賞の表彰
・読み聞かせボランティアと合同で朗読劇
・本に関する○×クイズ

アイデア４

1　活動名　**「出てこい！ヒーロー集会」**

2　集会の内容

○事前に、自分の得意なこと（何でもよい）、全校の前で披露したいことなどを用紙に書いて応募する。

○司会は総務委員会が行う。

○一輪車乗り、キャッチボール、大縄、歌、けん玉、ダンス、逆上がり、卓球のラケットの上で球つき１００回　等

全校が「できるかな」「もう少し、がんばれ！」と息を飲んで見守り、できたときには「この子はこんなことが得意なんだな」すごい！！」と言ったつぶやきがたくさん聞こえてきてかれてとても温かい雰囲気が流れる集会。普段は目立たない子でも何か得意なことがあり、それを全校の前で勇気をもってやり遂げて全校が認め合える、個々のよさが生きる集会。

アイデア５

1　活動名　**「全校話し合い集会」**

2　集会の内容

Ⅰ形態

①たて割り班で円になる。

②（全校での意見交換になると）全校で円になるようにする。

Ⅱ手順

①たて割り班で「今がんばっていること」などを発表し合い、褒め合う。

これをすることにより、良い雰囲気作りをするとともに、「自分が発言してもいいんだという」安心感を抱かせることができる。

②議題を聞き、みんなで確認する。

（例）・生活目標　　・みんなで遊ぶ遊びを決めよう　・雨の日の過ごし方

③各たてわり班で議題についての解決方法や案を考える。

※議題によっては、学級ごとに話し合うことも可。

④決まったことを発表する。※理由をつけて言う。
⑤各班の解決方法や案について意見を発表する。
※賛成意見を中心に、意見を発表する。
⑥出てきた意見の中で、解決方法や案を決定する。

アイデア６

1　活動名　**「縦割り班対抗戦集会」**

2　集会の内容
（１）活動内容を決定する。
・各学級から縦割り班対抗戦でしてみたいことを話し合わせ、提案する。
・代表委員会で話し合い、対抗戦の内容を決定する。
・対抗戦を運営する担当の委員会を決定する。
（２）活動内容の例
＜なわとび集会＞
①リーダーは活動目標と練習日程・場所・時間を具体的に決める。
②グループ毎の活動計画は掲示板やホワイトボードを利用しメンバーへ知らせる。
③「なわとび集会」を企画する。
ⅰ　集会の日時を全校に知らせる。(種目の例：一斉跳びと８の字跳び)
ⅱ　各グループで目標設定をし、練習計画を立てる。
ⅲ　記録を取る毎に目標設定の修正をする。１週間に１度、新記録の更新を掲示する。
ⅳ　一斉跳びと８の字跳びの合計回数を競う。
ⅴ　次回開催を計画し、記録更新を目指す。
・その他…・ボール運び競走　・ボールリフティング競走
・つなひき　・全員リレー　・大声対決　・校内駅伝

＜地域とのつながりを深める集会のアイデア＞

アイデア１

1　活動名　**「つながろう集会」**
・日頃お世話になっている地域の方（保育園、読み聞かせボランティアの方など)に児童が招待状を出し、招待する。

・なかよし班の友達ともっとつながろう。

2　集会の内容

（1） 代表委員会でコーナーを決定する。

・どんなコーナーをやってみたいか、各学級で話し合って意見を出し、それをさらに代表委員会で話し合って決定する。

（2） 担当するコーナーを決める。（なかよし班、委員会などで担当）

【コーナー例】

1	ストップウオッチ５秒止め	9	折り紙	17	けん玉
2	おばけ屋敷	10	ペットボトルボウリング	18	豆取りゲーム
3	紙飛行機飛ばし	11	割り箸落とし	19	魚釣り
4	宝探し	12	こま回し	20	スリッパ飛ばし
5	トランプ	13	箱の中身あて	21	カルタ
6	片足バランス	14	ブロック積み	22	まちがい探し
7	空き缶つみ	15	色水運び	23	靴とばし
8	わなげ	16	ろく木ぶらさがり	24	しりとり

（3）学級で招待状を書く。

・お世話になっている地域の方に、学級ごとに招待状を書いて渡す。

（4）担当するコーナーの準備をする。

・仕事を分担し、みんなに喜んでもらえるコーナーや楽しい飾りを工夫して準備する。

（5）役割を決める。

・当日は、グループを半分に分け、コーナーを担当するグループと、他のコーナーを回るグループに分かれ途中で交代する。（地域の方と一緒に回る）

（6）保育園、下学年、上学年、お客様で記録をランキングし、閉会式で発表する。

アイデア２

1　活動名　**「梅祭り」**

校内に、４５年前に植えられた１００本の梅の木がある。その梅を毎年地域の方々や老人クラブの方々と採り、梅祭りをする。

2　集会の内容

＊委員会を中心に、お年寄りの方のことを考えながら、集会のゲームや内容を考える。

・梅運びリレー

・昔の遊び

・梅と手紙のプレゼント

＊集会後には、梅ジュースを作り、地域の方に渡す。

４　集会時に役立つアイデア

＜集会活動の集合について＞

年間を通して様々な集会活動が行われるが、内容よりも集合に時間がかかりすぎて次の活動に食い込んでしまったり、集合についてその都度指導を行ったりする場合がある。また、時間が制約され内容が消化不良になってしまうこともある。これでは、楽しさは半減するし、ねらいを達成することも難しくなる。

そこで、全員が決められた時刻に集まることの大切さを子どもも教師も共通理解することが必要であり、一度共通理解してしまえば他の全ての活動に応用できる技術である。

＜方法＞

① 集合は防災訓練と同じ（黙って、走らないで、早く集合）

・事前に、いつ、どこで、何が行われるのかを知らせておくことは必要であるが、**放送があったら、いつでも止まって聞き、行動する習慣をつける**ことが重要。

・放送で「何の目的で、どこに集合するのか」を聴き、行動する。

※縦割り班などの異学年の集合形態なら上学年にリーダー性を発揮させる。

② 集合したら集合の現状について短く話す。

・よかった点を誉める。（整列させてくれた上学年を必ず誉める）。

（具体的に、前よりもよくなったことについて、今日よかったことについて）

・集合時間を計り伝えていく。

※集合が遅くなり、活動内容に支障をきたしても集会の時間を延ばさない。

③ 教師が手本を示す

・教師が集合時刻に遅れてはならない。子どもが３分前行動なら、教師は５分前行動）※集会活動に対する教師の共通理解が必要。

５　活用に向けて

このように、多くの学校で様々な取り組みがなされており、成果が上がっている面がある一方で、課題も多い。

全校での活動の充実を図るためには、次のことが不可欠である。

① ねらいを明確にすること
② 準備から後始末までをトータルして立案すること
③ 評価ポイントを絞ること
④ マンネリ化を防ぐ手立てを考えること
⑤ 時間確保の方法を考えること

また、学級では、自主的に集会を運営するため、児童の発達の段階に応じて適切に指導することが必要となる。発達段階に即した指導のめやすは次の表の通りである。（小学校学習指導要領解説より）

（発達の段階に即した指導のめやす）

形態	話合い活動	係活動	集会活動
低学年	仲良く助け合い学級生活を楽しくする		
	・教師が進行等の役割を受け持つことから始め，少しずつ児童がその役割を担うことができるようにしていく。 ・友達の意見をよく聞いたり，自分の意見を言えるようにしたりして，学級生活を楽しくするための集団決定をすることができるようにする。	・当番的な活動から始め，少しずつ創意工夫できる係の活動を見付けられるようにする。 ・少人数で構成された係で仲良く助け合って活動し，学級生活を楽しくすることができるようにする。	・入門期には教師が主導して楽しい集会活動を多く経験できるようにする。 ・児童が集会の内容を選択し，簡単な役割や準備をみんなで分担して，誰とでも仲良く集会活動を楽しむことができるようにする。
中学年	協力し合って楽しい学級生活をつくる		
	・教師の適切な指導の下に児童が活動計画を作成し，進行等の役割を輪番で受け持ち，より多くの児童が司会等の役割を果たすことができるようにする。 ・異なる考えなどについてもしっかりと聞いたり，理由を明確にして意見を言えるようにしたりして，楽しい学級生活をつくるために，折り合いを付けて集団決定ができるようにする。	・様々な活動を整理統合して児童の創意工夫が生かせるような係活動として組織できるようにし，協力し合って楽しい学級生活がつくれるようにする。 ・朝や帰りの時間などを生かして，積極的に取り組めるようにする。	・集会活動の経験を生かし，ねらいを明確にして，創意工夫を加え，より多様な集会活動に取り組めるようにする。 ・計画や運営，準備などにおける役割を，より多くの児童が分担し，協力し合って楽しい集会活動をつくることができるようにする。
高学年	信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる		
	・教師の助言を受けながら，児童自身が活動計画を作成し，進行等の役割を輪番で受け持ち，話合いの方法などを工夫して運営することができるようにする。 ・学級のみならず学校生活にまで目を向け，自分の言葉で建設的な意見を述べ合えるようにし，多様な意見のよさを生かして，楽しい学級や学校の生活をつくるためのよりよい集団決定ができるようにする。	・自分のよさを積極的に生かせる係に所属し，継続的に活動できるようにする。 ・高学年としてふさわしい創意工夫のできる活動に重点化するなどして，信頼し支え合って，楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることができるようにする。	・児童会活動やクラブ活動の経験を生かして，学級生活を楽しく豊かにするための活動に取り組めるようにする。 ・話合い活動によって，互いのよさを生かしたり，反省を生かしたりして，信頼し支え合って創意工夫のある集会活動をつくることができるようにする。

学級の児童が役割を分担して行う集会活動において、最もつけたい力は**「自己有用感」**である。この力は、他者との交流がなくても成立する自尊感情や自己存在感と異なり、**他者との交流を通してのみ育つ力**である。例えば集会が終わった時に、「とても楽しかったので、また計画してください」「リーダーがうまく指示してくれたので、安心して楽しめました」などという感想が寄せられると、「役に立ててよかった」「必要とされている」という感情がわき、それまでの辛さや苦労が一度に吹き飛んでいく。

集会活動を丁寧に仕組んでいくことは、児童にとって**「自己有用感」を身に付ける最も有効な手立て**となる。

しかり方・ほめ方のコツ

1 「しかる」ことと「ほめる」こと

近年、「しかる」ことはよくないことで、子ども達の自主性を阻害するという考え方から、指導を躊躇するケースがおきているように思う。確かに、叱ってばかりいる教育では、子どもの自主性を育むことは困難であるが、少なくとも「ほめる」ことがいい教育で、「しかる」ことが悪い教育だというような短絡的な発想は見直す必要がある。

要は、「しかる」ことも「ほめる」ことも、めざす子ども像の育成のために必要な方法であり、問題はその２つの使い分けとタイミングの腹入りなのである。

(1)「しかる」こと

「しかる」と「おこる」は使い分ける必要がある。

「しかる」とは、**子どもが誰かに悪い影響を与えたり、やってはいけないことをしたりした場合に、その子をより良くしようとする注意やアドバイスを、あえて語気を強めて伝えることである。**感情に任せて大声でぶつける「おこる」とは、明らかに違う。「おこる」と、子どもは非難されていると受け止めるので、「こわい」という意識から萎縮したり、「今度は見つからないようにしよう」と遠ざけたり、下手をすれば教師に対して反発したりする。

したがって、**命やいじめ・金銭・プライバシーに関わることに対しては端的に「おこる」、成長に関わることを意図的に期待を込めて指導する場合には「しかる」**、という冷静な使い分けが必要である。

(2)「ほめる」こと

「ほめる」と「おだてる」はちがう。

「ほめる」とは、**子どもが誰かに良い影響を与えたり、やるべきことをがんばったりした場合に、その行為を認め、その意味や価値を賞賛や感謝の気持ちを込めて伝えること**である。子どもは、ほめられることで「自信」「判断力」「達成感」を身に付け、社会生活でのモラルを理解し、意欲をもって生活していく。つまり、「ほめる」ことは、子どもを正しく成長させる方法なのである。一方「おだてる」とは、相手がうれしがることを言って相手を得意にさせ、もちあげることである。つまり「おだてる」には、ある意図や下心などで相手を操作しようとすることが前提にあるため、「ほめる」とは根本的に異なる。

そこで、「ほめる」ときのほめ方やタイミングが重要になる。いかにもお世辞のように、口先だけでほめるのは逆効果で、やり方によっては相手を傷つけてしまうことにもなる。**子どものよいところを具体的に指摘することが「ほめる」こと。**子どもを単にいい気分にさせるだけなのが「おだてる」こと。両者を区別するだけでなく、ほめ方としかり方の使い方・使い分け方、そしてタイミング等、十分腹入りして対応していくことが肝要である。

2 しかり方・ほめ方のコツ

(1)しかり方のコツ

<u>①しかる目的や基準をはっきりさせる</u>

しかる際には、**子どものどんな判断や言動が悪いことだったのか、その言動が周りの人やものにどんな影響を及ぼすのかを子どもにも頭で理解でき、また、心で感じることができるようにすること**が必要である。「本当に悪いことをしてしまったなあ。相手の人は悲しかっただろうな。」「自分がこんなことをしてしまって、お父さんやお母さんは悲しむだろうな。」「二度とこんな悪いことはしないようにしなければ。」と、子どもが自分の心に誓うようなしかり方ができるのが望ましい。

また、学年始めに、どのような時にしかるのかを子どもたちに明らかにしておくことも必要である。**「人に迷惑をかけたとき」「人を傷つけたとき」「全力を出そうとしないとき」**など、**しかる場面を宣言しておき、それに照らして指導を行う**と効果的。

②正確に、的確に、短く

事実確認を正確に行い、何がいけないのかを問う。子どもが答えたことを補正しながら、「分かっているのに行動できないのがいけない。」としかる。**行為ではなく、その時の心や考え方をしかる**ことで、「自分の心や考え方のどこを直さなければならないのか。」を考え、行動する子どもを育てたい。

しかる際は、**短時間でしかる**。多くの場合、子どもはしかられる理由がほとんど分かっており、長くしかっても伝わらない。さらにそれが授業中であれば、きちんとできている子の妨げにもなってしまう。そうならないように、なるべく理由は、短く分かりやすく話す。

③個別指導と全体指導を行う

個別指導は他の子たちの目の気にならないように**別室で行う**。その後、全体に出来事の経緯と指導したことの概略を説明し、「○○さんはこれから～できるようにがんばると約束しました。先生も見守りますから、みなさんも見守ってください。」と伝える。

悪いことをしてしかられた人ではなく、よくなろうとがんばり始めた人というイメージにしたい。

（2）ほめ方のコツ

①タイミングを考える

ほめる際には、**子どもががんばったと感じているときにほめる**ことが、大切である。「目標を達成できた。」「できなかったことができるようになった。」「人が喜ぶような言動をした。」「みんなのために働いた。」「悪いことをしてしまったが、あやまることができた。」など、様々な場面での子どものがんばりを感じ、認めていくことが必要である。子どもががんばったと感じていない場合でも、その子のとった言動が、周りの人によい影響を与えているときには、しっかりほめたい。気持ちのよいあいさつをしている子、進んで友達に声をかけて活動している子、いつもロッカーを整頓している子など、**ふだんの何気ないことが人の役に立っていることを伝える**とともに、その子のことを担任だけでなく周りも認めているということを伝えていきたい。

②その都度ほめる

日々の小さなことの指導の積み重ねが、子どものレベルアップにつながる。「みんなが見ている」という意識をもたせることも大切である。いいことをした子をその都度ほめるように心がけ、**周りの子どもたちがいいことを自然と真似たり、いいことをした子を称賛し合ったりするような環境作り**に努めたい。

③子どもに合ったほめ方をする

子どもがうれしいと感じるほめ方も工夫していきたい。ほめる場面、タイミング、言葉、スキンシップ等、その子、**その場面に合ったほめ方**をするとともに、「また、やってみよう。」「続けていこう。」という**次への意欲につながるようなほめ方**をしていきたい。

④比較しながらほめない

しかり方にも関係があるが、人と比較してほめられて自信をもっても、その自信はまた人との比較によって、すぐに崩れてしまう。**自己肯定感は、他者との比較で生まれるものではない**ので、**自分を好きになるほめ方**を心がけていきたい。

⑤自己肯定感をもたせる

子どもが嘘をついたときは当然しかる。しかし、正直に話してあやまれたときはほめるチャンスである。**勇気をもって正直に話せたという自己肯定感**を子どもがもつことができ、これから生きていくうえで大切な財産になっていくと思われる。「３つ叱って、７つほめる」。**子どもを伸ばし、世の中の秩序を知ることができるほめ方**をしていきたい。

(3)アイデア

①もらさず指導し、忘れず記録する

１００円ショップに売ってある名刺ケースに大判の付箋を入れたものとペンを、常にポケットに入れておく。目についた子どもの様子や他の先生からの情報を書きこんで、指導に生かす。付箋はそのままノートに貼り付ければ、児童記録としても残る。清書しなくても走り書きがあるだけで状況を思い出すことができる。(思い出せる程度に書いておく。)

②担任以外がほめよう作戦

学年団で行動する際に、**クラスや個人のよいところを、担任以外の教師がほめる**。もちろん、学年団で申し合わせをしておく。「○組は整列がいつも早くていいね。」「○○さんはいつでも話を聞く姿勢がすばらしいね。」といった具合である。

担任は教室に帰った後で「○○先生のおっしゃったこと、先生も全く同じことを感じていましたよ。よいことはどの先生も同じように見られるのですね。君たち（○○さん）いいですよ。」と、よいことを再度ほめる。

また、学年団で子どもたちの様子を話すときに、よいことや伸ばしたいことを話題とする。それに該当する子どもの行動に出会ったとき、あるいは普段の会話の中で、「あなたの行動はとてもいいね。担任の先生がほめておられた通りだね。」「そういえば、最近○○をがんばっているそうだね。担任の先生が感心しておられたよ。」といった具合である。

これらの取組で、**他人から見た自分の姿を意識するようになるし、たくさんの人に見守られているという安心感をもつようになる**。

③「紳士録」をつくる

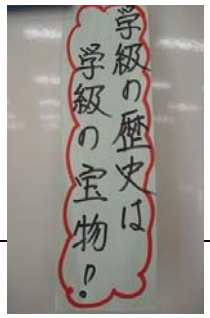
教室の後ろに**「紳士録」というノート**を置いておき、子どもが「がんばったこと」「うれしかったこと」を自由に書けるようにしておく。特に、**してもらってうれしかったことについては、**

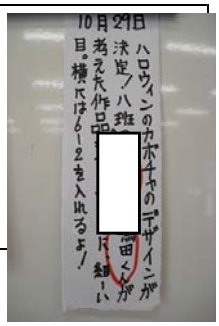
そのよい行為をした友達の名前も書くようにしておく。その「紳士録」をいつでも子どもたちの目にふれられるようにしておく。ときどき担任も「紳士録」にみんなの手本となる言動を記述したり、中身を紹介したりして、その良さを学級全体で共有する。

仲間に認められ、仲間にほめてもらえる教室環境の中で、子どもたちは自信をもってよりよい行動を心がけていくと思われる。

④学級の歴史に名前入りで掲載

学級の中で、学級目標の実現につながるようなよい言動や出来事を学級の歴史の一つとして**名前入りで記 録に残していく**。記念写真をその都度撮って掲示したり、学級通信に載せたりして、よい言動を目に見えるもの、形に残るものにしていくと、自己有用感がグンと高まる。





3　留意点

○しかることを躊躇しない

人はほめて伸ばすのが大原則だが、しからなくてもよいということではない。しかるべきときにはきちんとしかることが大切である。どちらも子どもたちに対する愛情の表し方なので、**バランスよくうまく使い分ける**ことが大切である。

○信頼関係を築くことが大切

子どもたちの性格は千差万別、よかれと思った指導が受け容れられないこともある。その際、信頼関係があれば、多少しかろうが怒ろうが、子どもたちはついてくるし伸びていく。日々、**心の通う指導やふれ合いを繰り返しながら信頼関係を築いていくことが大切**である。

○小芝居はばれる

子どもは、周りの大人のかかわり方に敏感で、ときに大人の心を鋭く見透かすことがある。子どもをほめたりしかったりする際、あたかも**その場しのぎの指導や小芝居のような指導は、子どもにばれてしまう**。子どもの成長を願い、心に語りかけるようなほめ方、しかり方をしていきたい。

○保護者とのやりとりが必要

子ども伸ばしていくためには、家庭との信頼関係づくり・連携が欠かせない。そのため、**保護者の学校への理解が深まるように、学級での子どもの様子や指導の内容を積極的に発信すること**が大切である。問題が起きたときだけ家庭と連絡を取り合うのではなく、普段から学校での生活の様子やよい姿を懇談会や学級通信などで積極的に発信したり、電話などで伝えたりしておく。「学校でこんなふうに指導したら少しうまくいきましたよ。」という具体的な手立て示し、家庭でも連携して指導してもらえるようにしたい。

あいさつ指導のアイデア

1　あいさつ指導の意義

(1)コミュニケーションの第一歩

「挨拶」の語源は、問答によって仏法修行の深浅をはかる「一挨一拶（いちあいいちさつ)」にあると言われている。「挨」には「押す・背を叩く・心を開いて近づく」、「拶」には「迫る・押す」という意味があり、合わせて「そばに身をすり寄せて押し合う」ことを表している。したがって、**「挨拶」は人と人とが出会い、出会った人同士が互いに心を開いて相手にせまっていくために交わす最初の言葉**であり、これから始まる**コミュニケーションの重要な第一歩**なのである。

(2)あいさつは文化

「おはようございます」の意味は、「早くから起きてご立派、ご苦労様でございますす」の略で、朝早くから働く人に向かって言う**ほめ言葉**であり、**ねぎらいの言葉**でもある。また「こんにちは」は「今日は、ご機嫌いかがですか」の略で、お昼に初めて出会った人の**体調や心境を気遣った言葉**だと言われている。つまり、**日本のあいさつは、まず相手の存在を認め大切にしようとするところから発している文化**なのである。

あいさつの仕方は、世界各国で違う。日本人は昔から道行く人には誰にでも、見知らぬ人にでもあいさつをしてきた。あいさつができない者は恥とされ、一人前とはみなされない日本固有の「あいさつの文化」があった。しかし、近年はあいさつそのものの重要性は叫ばれても、文化としての重要性が抜け落ちているように思われる。文化は、長い生活経験から陶冶されたものしか残っていかない。であるならば、我々の世代の役割は、相手の存在を認め大切にしようとする「あいさつの文化」を伝えていくことなのではなかろうか。

(3)まずは共通意識

「あいさつ」はその時々の微妙な心の状態を映し出す。そのため、心が十分にコントロールできない小学生年代の子ども達にとっては、「いつでも・明るく・元気よく」が要求される「あいさつ」は、かなりハードルが高い仕草なのである。

そこで大切になるのが、**子ども達と教師との「あいさつ」に対する共通意識づくり**である。前段で述べた「あいさつの語源」や「あいさつの意味」を各学年に分かるように解説をし、「あいさつ」に対する意識を同じ方向に持っていく必要がある。意識が同じ方向を向けば指導のブレがなくなる。ブレがなくなると、次の一手が打ちやすいだけでなく、継続への道筋が見えてくる。

2「あいさつ」指導のアイデア

(1)あいさつの大切さについて語る

当たり前のことであるが、まず初めに教師の姿勢を示す。４月の段階で、**あいさつ**

はコミュニケーションの基本であり、お互いが気持ちよく生活するためにあいさつは欠かせないこと、人と人の関わりで大切であることを話す。「相手も自分も気持ちよくなるあいさつとはどんなあいさつか」や、「クラスや学年、学校でどう取り組んでいくか」を考えさせる。

また、「あいさつ」は、進んで交わすと気持ちよいもの、明るくされると心地よいものであること、人とコミュニケーションを取る上で欠かせない大事なもの、さらに**進んで気持ちよいあいさつができるのは素晴らしいこと**を子どもたちに伝える。

＜指導例①＞

T「みんなはなぜあいさつをするの？　あいさつは何のためにするのかな。」
C「するものときまっているから。」「したほうがいいから。」
T「なるほど、実は朝のあいさつの『おはようございます』という言葉には、**『今日もよろしくお願いします。』**とか**『今日もいっしょに頑張ろうね。』**という意味が込められているのです。」
C「そう言えば、あいさつされると、うれしくなるよ。」
T「うん、お互いに声を掛け合うことでお互いにつながり、気持ちよくなるね。」
T「だから、**『だれもがいごこちのよい学校、地域、家庭』**を作ろうと思ったら、あいさつはとても大切で欠かせないものだよね。」
T「じゃあ。このクラスではどのように取り組んでいけばいいかな…。」

＜指導例②＞

無言で、いきなり黒板に**『一年の計は元旦にあり、一日の計は朝の〇〇〇〇にあり』**と書く。
C「先生『一年の計』は聞いたことあるけど、『一日の計』は聞いたことないですよ。」
T「そうだろう。『計』とは、計画のこと。つまり、一年の計画を元旦に立てるとその一年がうまくいくということ。同じことで、一日の計は朝の何が大事なんだろう？」
C「『歯みがき』じゃないですか。４文字だし。」
C「４文字なら『あいさつ』ですよ。」
T「そう。『あいさつ』です。朝のあいさつが元気なら、その一日が元気に過ごせるし、逆にしょんぼりしたあいさつなら、一日が楽しく過ごせないということなのです。だからこそ、朝のあいさつはしっかり元気よくやってみようよ。きっと、みんなのあいさつを聞いた人は、笑顔で応えてくれると思うよ。」

（2）教師が積極的にあいさつを交わす

児童があいさつを積極的にしないなら、まず教師があいさつをして返事を返させる**「あいさつの押し売り」**をする。これをあきらめずに繰り返し指導して、会えばあいさつをするものだという意識を植え付け習慣化を図る。

そして、気持ちのよい挨拶ができている児童をみんなの前で褒め、やらせてみて、**よいモデルを示していく。実際は小さな声で元気なくあいさつをしている児童でも、自分では上手にあいさつができていると思っている状況がある。**自分から身近な教師や友だち、家族にできるようになれば、地域の人へと広げていくという見通しを話ながら、とにかく**あきらめずにする**ことが大事であろう。

また、教師が児童と共に朝、児童玄関であいさつしたり、各教室を回り、「○年○組のみなさん、おはようございます」とあいさつしていったりすることも考えられる。元気の良い反応には、**「○○さん気持ちいいね」「○組は大きな声だね」**と**プラス面の事実を言葉で返す**ことも大切である。

(3)自分からあいさつできる児童に

あいさつを教師が児童に先立ってすることも必要だが、人にあいさつされないとあいさつできない児童になってしまうのも困りものである。**時には、教師は児童と目を合わせ、優しい笑顔は見せつつ、児童が自分からあいさつするのを待つことも必要。**この時、児童があいさつを返してきたら、たとえ小さい声でも**とびきりのあいさつを返し、一言ほめる**ことで、他の児童に対してモデルを示すことになる。

(4)学級で取り組むアイデア

＜あいさつジャンケン＞

① 朝のあいさつを自分から先にできたら勝ち。
② 何人に勝てたか朝の会で確かめる。
③ 毎日、その日のあいさつチャンピオンを決める。
④ ある一定期間に取り組んだり、定期に行ったりして「すすんであいさつ」が定着するよう取り組む。
⑤ カードに書き込んだり掲示をしたりする。
※趣旨を外れないように、子どもたちの様子を見て声かけをする必要もある。

＜○○の人、おはようございます＞

朝の会のときに、担任が「○○の人、おはようございます。」とあいさつして、当てはまる児童があいさつを返す。楽しくあいさつができるようにする。○○の部分は、２班、男子、女子などいろいろ考えられる。一度に長引かせると、児童が飽きてくるので、３種類程度が良い。最後に、必ず全員があいさつできるようにする。

＜教室に入るとき、必ずあいさつをする＞

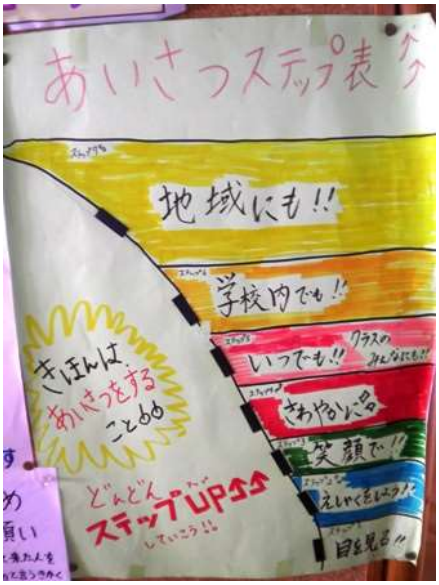
「朝、教室に入るとき、必ずあいさつをする・あいさつを返す」という決まりをつくる。クラスが基本、「今日も１日共にがんばろう」「よろしくおねがいします」の思いを込めてするように話す。教師自ら実践し、声かけをして児童とのコミュニケーションを図る。習慣化すれば、するのが当たり前になる。

＜めあての設定＞

何人の人とあいさつをしたかを尋ねる。学級で足し算をする。「○人にあいさつをする」というめあてを決めて取り組むのもよいが、数にこだわりすぎないよう、心を込めることを忘れないよう指導する。

＜児童のアイデア＞

学級での話し合いや、係から出てきたアイデア、例えば、「あいさつステップ表」（右の写真のようなもの）やポスターを作りたいという意見を生かし、作りたい児童に作成させ、やる気を生かす。



＜6年生のクラスでの取り組み＞

６年のあいさつの姿を鍛え、それを手本とさせる。礼の仕方・部活でのあいさつ・会釈の仕方など、やはり６年生は違う、すごいなと思わせるようにする。

＜話し合いを生かす＞

①　今の学校内でのあいさつの状況について気付いていることを話し合う。
・あいさつをしても返さない人が多い。
・あいさつの声が小さい。
・あいさつをしても返ってこないことが多いので，やりがいがない。

②　①で出てきた課題をもとに，全校児童のあいさつの声が小さいのはどうしてなのかを考え、話し合う。
・朝元気がない人が多いのでは。
・あいさつするのが恥ずかしいのでは。
・家でもあいさつをしないから、学校でもあいさつしないのでは。

③　どうすれば，あいさつの声が響き合う学校になるのかを考え，話し合う。

・相手の名前を呼んであいさつをすれば、呼ばれた人は自分にあいさつをされたことが分かるから，きっとあいさつを返してくれるはずだよ。
・あいさつチェックカードを作って、何人の人とあいさつができたか調べてみてらどうだろう。
・代表委員会に提案して，１ヶ月とか、１週間とか、機関を決めて取り組んだらどうだろう。

※実践してみて

「名前を読んであいさつをしよう」キャンペーンに取り組んだところ、全校にあいさつの声が響くようになった。

(2)児童会・学校で取り組むアイデア

＜運営委員会を中心としたあいさつ運動＞

① 毎朝、運営委員が児童玄関付近であいさつ運動をする。
② 委員会のメンバーだけでなくそれぞれの学年の有志も参加させる。
③ マンネリ化しないよう、しっかりと目的を意識させ、工夫して取り組む必要がある。(立つ場所・声の出し方・仕方・表情など)
④ 朝のあいさつ運動の後、反省会を行い、取り組みについて振り返りを行う。
⑤ めあてをがんばっている学年や登校班、また、元気のよいあいさつをしてくれた人などをお昼の放送で紹介する。放送でほめてもらった学年からは、歓声が上がっている。
⑥ 時には、もっとがんばってほしい点についても放送を行う。
⑦ あいさつをした後に握手をしたり、ハイタッチしたりする期間を設ける。(継続した運動にするための工夫)
⑧ 委員会メンバーが各教室を回り、元気なあいさつをすることにより、教室に入るときもあいさつをするという意識付けを行う。

＜あいさつレンジャー＞

あいさつレンジャーというあいさつヒーローをつくり、全校集会で劇を行った。次の日から、さっそく朝のあいさつ活動を行う。毎月のあいさつ運動では、このあいさつレンジャーが登場するようにして呼びかけを続けている。

＜各学年のめあてを決めておく＞

学年ごとにめあてを決めて、あいさつに取り組むようにする。
　１年生…げんきにあいさつをする。
　２年生…笑顔であいさつをする。
　３年生…目を見てあいさつをする。
　４年生…顔を見てあいさつをする。
　５年生…会釈をしてあいさつをする。
　６年生…立ち止まって会釈をしてあいさつをする。

＜昼のあいさつ＞

　昼休憩時に福祉委員会２名で校舎内を歩き、「こんにちは」のあいさつを行う。
　緑のたすきの福祉委員会の姿を見て、自分の方から声をかけてくれることが多くなってきている。

＜「こんにちは」運動＞

　朝の「おはようございます」だけではなく、中間休憩、昼休憩は「こんにちは」運動として、全校で「こんにちは」の声が響くよう取り組む。来校客はもちろん教職員にも廊下等で出会ったら「こんにちは」のあいさつをするよう取り組む。

＜がんばり週間＞

　全学年がんばり表を掲示し、花シールを貼っていくこと。学年に応じて達成基準を話し合い、達成できればシールを貼る。

＜あいさつ名人＞

　期間を決め、毎日「あいさつ名人」を担当の教員が選出する。給食時間の校内放送で毎日全校から１人ずつ選ぶ。校内放送では、選ばれた児童を放送室まで呼び、あいさつをするうえで心がけているポイントなどをインタビューする。また、「あいさつ名人」に選ばれると、児童会手作りの缶バッジを渡したり、「名人認定証」を作ったり、児童玄関に写真と共に掲示する。

＜学級ごとに行うあいさつ指導＞

学級ごとにあいさつ運動をする日時を決め、全校に向けてあいさつをする。（期間を限定して行う。）あいさつ運動の期間を決め、朝、中間休憩、昼休憩の３つの時間帯のうち２つの時間帯を決めて行う。

＜レベルアップ指導＞

全校で取り組む。段階を３つに分け、各学級で指導していく。
①「あいさつは教室から」「友達にかえそう」
②「あいさつレベルアップ！えしゃく」
④ あいさつレベルアップ！２　人より先に」
「３E（目、えしゃく、笑顔）目を合わせ　えしゃくとあいさつ　いい笑顔」

＜あいさつコンクール＞

あいさつコンクールのようなものを開く。主催は運営委員会や６年生など。学級単位や登校班単位、縦割り班単位であいさつをする。（児童の実態によっては個人でのあいさつということもありうる）もちろん、あいさつの評価をして、がんばりを認めるようなことも必要。（表彰する、お昼の放送で紹介するなど）

＜おはようの日＞

０の付く日を「おはようの日」として、特に強化日とする。その日にあいさつを交わしたかどうかをチェックしていく。

＜あいさつのレベル１＞

簡単なことからできるようにさせるため、「あいさつのレベル」を次のように考えた。
レベル①「声を出す」
レベル②「目を合わす」
レベル③「目線の高さを合わす」
レベル④「笑顔になる」

レベル⑤「会釈をする」
レベル⑥「あいさつの前に、名前を呼ぶ」
レベル⑦「手をあげる、ふる」
レベル⑧「ハイタッチ」

など、あいさつの仕方も様々である。レベルを上げることにより、親愛の念がより伝わることを知らせたい。

＜あいさつのレベル2＞

学校でレベルを作成し、高まっていく喜びを感じとらせていく。最終レベルは、「地域の人に進んであいさつをする」。中学校区としても共通の取り組みとしている。

＜地域との連携＞

保護者・民生委員に協力を依頼する。
標語づくり・看板づくりをトリニティーとして取り組む。

3　留意点

最後に、あいさつ指導で大切なポイントをまとめると次のようになる。意識して取り組んでいきたい。

① なぜあいさつをしないといけないのかをていねいに伝える。
② ほめる。
③ 毎日続ける。（「続けると本物になる。」ことを話す。）
④ あいさつのステップ
⑤ あいさつは手段の一つ、それ自体を目的としない。

※学年末には「あいさつ運動」の輪がこんなに広がりました。

学習発表会のアイディア

1　学習発表会の意義

学習発表会は、一般的に「学校行事」の中の「文化的行事」として行われている。

学習指導要領では、「学校行事」の意義として、「学校行事は、**望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる**ことを目的とし、全校又は学年を単位として、学**校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動**を行うものである。」と示されている。

また「文化的行事」のねらいは「児童が学校生活を楽しく豊かなものにするため、**互いに努力を認めながら協力して、美しいもの、よりよいものをつくり出し**、互いに発表し合うことにより、**自他のよさを見付け合う喜びを感得するとともに、自己の成長をふり返り、自己をのばそうとする意欲**をもてるようにする。また、文化や芸術に親しみ、美しいものや優れたものに触れることによって**豊かな情操を育てる**。」と示されている。

こうした意義をふまえたうえで、学習発表会は以下のようなねらいで取り組まれているものと思われる。

○　平素の学習活動の成果を発表することにより、学習に対する意欲を高め、表現力を育てる。
○　発表および鑑賞の態度（マナー）を培い、学校の一員としての自覚と互いを認め合う心情を高める。
○　発表を通して、表現することの喜びを味わわせ、協力し合うことの大切さを体感させる。

このように学習発表会は、国語科や音楽科、総合的な学習の時間など各教科、領域における学習内容の理解や技能の習得などの成果を総合的に発展させて**発表する場**としての位置づけがあることはもちろんのこと、体験活動をとおして、**目的意識を明確にもつこと、向上心をもって取り組むこと、さらには自他のよさや自己を振り返り伸ばそうとする意欲を育てるなど、総合的な成長を意図的に仕組む場としての位置づけ**も大きい。

2　学習発表会のプログラム例

〈A校〉

＊隔年実施。各学年、出入りを含めて２０分程度の発表。（１学年２０名から３０名）

準備に時間がかかる点を改善して毎年実施し、学習の成果を発表するものに変えていこうとしている。

＊１・２・３年生：劇

＊４年生：音読劇「ごんぎつね」

・台本、楽譜（合奏）は市販のものを使用

＊５年生：英語劇「大きなかぶ」

・これまで学習した内容を活かし、自分の得意なことを発表

・かぶをひくキャラクター（登場人物）をつくれば、人数を調整可能

＊６年生：劇「修学旅行」

・修学旅行で学んだことや感想をもとに教師が台本のもとを作成

・各場面ごとに児童をグループに分け、グループ活動で準備・練習を進める。
・児童が台本をアレンジしたり、小道具を考えたりしながら創作

〈B校〉

＊数年前に「○○っ子まつり」から「学習発表会」に変更
＊毎年実施。各学年、出入りを含めて２０分程度の発表（１学年７０名前後）
＊各学年が、国語科や音楽科、総合的な学習に関連した創作劇や合奏等を行う。

〈C校〉

＊「○○っ子フェスティバル」という名称。毎年実施
＊午前中は学年ステージ発表（１５分程度）と全校音楽（合奏２曲）、午後はクラブ活動のステージ発表（傘踊りや和太鼓など）と保護者や地域の人との交流
＊保護者主催のコーナー（遊び、物作り）では、縦割り班で一緒に活動し、得点を競う
＊公民館主催のコーナー（伝承遊び）では、地域の人に教わりながら一緒に活動を楽しむ
＊学年ごとに、生活科、国語科、総合的な学習のまとめを劇や朗読で発表。（１学年２０人前後）

〈D校〉

＊全校児童５０名。全校表現活動として「演劇」に取り組む。
＊３・４・５・６年生は、総合的な学習の一環として、１・２年生は、国語や体育の表現活動の一環として実施。劇の中で自分の役割を体全体で思い切り演じていくこと、周りのことを考えながら自分の役割を果たすこと、上級生や友達の演技見ることで自分の表現力を高めていくこと、地域に伝わるもの（歴史的な事実、伝承、昔話）を題材とすることで、それらを児童にとって身近なものにすることをねらいとしている。これまでに、「地元ゆかりの戦国武将」や「昔の子どものくらし」などに取り組んだ。今年度は「民話」に取り組む。

＊縦割り班で３ステージ（場面）をつくりあげる。

３　学習発表会のアイディア

⑴内容

○　英語ノートをもとに英語劇の台本を作成。細かな表現はＡＬＴに協力を得る。
○　地域に伝わる「民話」を題材にして全校で劇に取り組む。６年生（６名）が総合的な学習の時間を使って聞き取りをし、台本を作成。

○　毎日学級で取り組む「朝の歌」、「詩の暗唱」、毎月全校で行う「暗唱集会」、「歌声集会」の積み上げを活かし、全校による合唱や暗唱を行うことで、学校全体での達成感を味わう。

○　縦割り班での赤・白・青チームによる「色別歌合戦」を行う。リーダーを中心に、準備、振り付け、パート分け、練習に取り組む。本番までに３回の練習時間を確保。

⑵運営

○　６年生が「学習発表会実行委員会」を結成し、当日までの準備や当日の道具係、放送係を担当し、役割（責任）をもって活躍する。代表委員会でテーマを決定する。

○　委員会ごとに当日の仕事（放送、大道具舞台配置、照明、児童管理、めくりプログラムの作成）を児童が分担して行う。

○　集会委員会の児童が、幕間にマイクをもって観客席をまわって、感想を聞く。

⑶その他

○　公民館主催のコーナー（伝承遊び）を設け、地域の人にやり方を教わりながら一緒に活動を楽しむ。また、保護者主催のコーナー（遊び、物作り）では、縦割り班で一緒に活動し、得点を競う。

○「鳥の劇場」の方に劇の演出・指導を受ける。（「本物」との出会いと学び）

４　活用に向けて

○　「学校行事」の「文化的行事」の分掌担当者が全体の実施計画を立案し、教務主任が、特別時間割（体育館ステージ使用等）を組む。当日までの準備や当日の役割は全職員で分担して実施する。

〈役割分担内容例〉

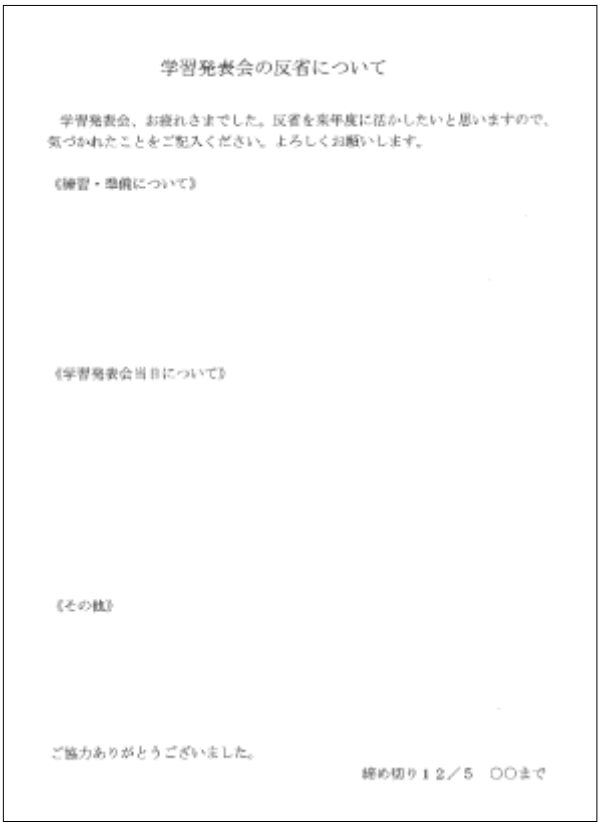
案内状・礼状作成と配布	放送原稿・設備　ビデオ設置
清掃計画	会場準備
総練習計画・プログラム作成	舞台配置図
照明設備点検	演題・テーマ
特別時間割計画・看板	会計
全校表現計画	

〈当日までの日程例〉

月	日	曜	内容
11	2	金	プログラム名提出
	6	火	案内状送付
	12	月	楽器運搬（音楽室から体育館へ）
	19	月	特別時間割開始
	22	木	プログラム配布

			舞台配置図提出提出
			放送原稿提出締切
	28	水	総練習（児童向け発表会）
	30	金	前日準備
12	1	土	学習発表会当日（保護者向け発表会）
			礼状配布

○　事後に保護者の感想（要望）を集めたり、職員の反省をまとめたりして、次年度に活かす。



学習発表会の反省について

学習発表会、お疲れさまでした。反省を来年度に活かしたいと思いますので、気づかれたことをご記入ください。よろしくお願いします。

《練習・準備について》

《学習発表会当日について》

《その他》

ご協力ありがとうございました。

締め切り１２／５　○○まで

○○年度　○○小学校学習発表会感想用紙

本日は、ご多用の中おいでいただきありがとうございました。
この学習発表会に向けて、子どもたちは一生懸命練習してきました。いかがでしたでしょうか。ご覧になったご感想・ご意見を、一言書いていただければ、今後の参考にさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（　）年保護者　（　　）

○　児童の活動（準備・練習・発表等）をふり返りカード等で評価し、活動意欲の向上につなげる。

生徒指導対応のコツ

１　小学校における生徒指導の意義

(1)小学校からの生徒指導

近年、学校を取り巻く状況は急速に複雑化している。都市化や少子化、情報化などが進展する中、規範意識や倫理観の低下によると考えられる児童の問題行動が多発するなど、学校の状況はますます深刻化してきている。

そうした中、**ともすれば学校における生徒指導が、問題行動への対応にとどまる場合もあり、学校教育として、より組織的・体系的な取り組みを行う必要が指摘されている**。だからこそ、時代の変化にも対応しながら、小学校の発達段階に合わせた生徒指導が今後はさらに必要になってくる。「生徒指導は中学校に任せておけばよい」では遅すぎる。小学校段階から生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、教師がしっかり学んでいく必要があるのである。

② 指導要領での位置づけ

小学校学習指導要領第１章第４の２(３)には、次のように規定されている。

> **日ごろから学級経営の充実を図り，教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め，生徒指導の充実を図ること。**

さらに、小学校学習指導要領解説では、次のように示されている。

> 生徒指導は，児童一人一人の人格を尊重しながら，規範意識をはぐくむなど社会的資質や行動力を高めるように指導，援助することである。

特に難しいとらえではない。むしろ当たり前のことが述べられている。ただ、大切なことは、小学校でどの様に「生徒指導の充実」を具体化するかである。

③ 学級経営との関わり

小学校学習指導要領解説特別活動編には、「生徒指導と学級経営との関わり」について次のように示されている。

> 生徒指導を着実に進める上での基盤は学級であり，（中略）**学級経営を行う上で最も重要なこと**は学級の児童一人一人の実態を把握すること，すなわち**確かな児童理解**である。
> 日ごろから，**児童に自己存在感や自己決定の場を与え，その時その場で何が正しいかを判断し，自ら責任をもって行動できる能力を培う**ことが大切である。

ポイントは**「確かな児童理解」に基づいた「信頼関係づくり」と「人間関係づくり」**で、いわゆる小学校で普段から行われている学級経営そのものなのである。したがって、小学校では学級担任の役割は極めて大きく、「学級経営の充実」はそのまま「生徒指導

の充実」に直結していく。

２　生徒指導対応のポイント

(1)「問題行動は起きて当然」の意識

教室では、多人数が生活しているだけに、当然問題は起こるべくして起こる。大切なことは**「問題をどう生かす**か」である。

問題行動は、個々の児童が起こすものではあるが、必ず一般性・汎用性を持っている。問題を起こしたり関わりのある数人の問題だけにしたりするのではなく、**問題をきっかけにして学級全員が学ぶ**場をセットすることが担任の重要な仕事なのである。

(2)発見の具体策

○アンテナを高く
・朝、校門で**あいさつ運動**を行う。
・毎朝、子どもを**教室で迎え**る。
・休憩時間に子ども達と**会話(雑談)**する。
・休憩時間にあえて**廊下に立ち**子ども達の様子を観察する。
・連絡帳、ノートの文字の**乱れを見逃さない。**
・**面談、アンケート、QU質問紙等(年2回程度以上)**などで子どもの変化に気付く…等。

○情報を共有する
・気になる情報を得た場合、**持ち歩いている付箋に書き**担任の職員室机上に貼る。
・学年会や放課後に**情報交換**等を行う。
・**「児童を語る会」**を全職員で行い、全教職員で共通理解する…等。

○校内研修を行う
・生徒指導に関する研修を、**年に数回**は年間予定の中に組み込む。
・教育委員会等に**講師として参加**してもらい指導助言をいただく…等。

(3)初期対応の具体

＜連絡ルートの確保(学年会議等)＞

問題行動への早期対応に向けては、全教職員が下図に示した**「見る」「関わる」「つなぐ」意識**をもちながら生徒指導体制を確立していくことが大切である。学級担任、養護教諭、学年主任、管理職など、それぞれの立場で把握した情報を共有するとともに、**チームとして組織的に対応**する。

問題行動への対応レベル

全教職員共通理解のもと、未然防止の意識を持つ

レベル1 見る	レベル2 関わる	レベル3 つなぐ
小さなサインを見逃さない	すばやい対応に努める	より多くの力で対応する
・元気がない。 ・一人で廊下を歩いている。 ・放課後や班編制で一人になる。	・実態把握の聞き取り ・保護者連絡	・全教職員で共通理解

〇家庭訪問（電話連絡）をする時の基準

① 生徒指導上の問題が起こった<u>事実を伝える</u>。
② 家庭での様子を聞く。
③ 今後指導をしていくことを伝える。
④ 家庭での協力を要請する。

※ 問題行動に対応する場合は、可能な限り家庭訪問することが望ましい。電話連絡の場合も、必ず近日中に家庭訪問に伺う。

3 対応のアイデア

アイデア1

問題行動が起きた際の、具体的な**対応方法のマニュアル化**

① まずは、教師が当事者から言い分を聞く。その後、当事者に、何が起こって、何が問題なのかを学級全員に聞いてもらっていいか尋ねる。ＯＫが出たら②に進む。出なかったら担任と当事者だけで解決するか、学級の問題として全員に聞いてもらうように説得する。
② 学級全員の中で、当事者が言い分を話す。言い訳もできるだけ言わせるようにする。本人が納得するまで言わせる。（臨時学級会）
③ 当事者の言い分を聞いた感想を他の児童が発表する。できるだけ多く（全員）発表させる。
④ 教師が問題解決の調停をする。当事者以外の児童の感想を踏まえるが、それらを尊重しながらも、全く違う視点での助言を与え、解決を図る。当事者の一方に非難が集中した場合は、逆の方の問題を指摘し、バランスを保つ。大切なのは、問題行動そのものではなく、なぜそれが起こったのかという背景を見えるようにすることである。児童が気づかないのはそこである。

アイデア2

（１）問題行動（不快な刺激→感情の昂ぶり→短絡的な行動）を分析し正常行動へ移行する。

①「不快な刺激」の分析

・主に友達との関係（友達に嫌な言葉を言われた）等。
・勉強が分からないことでの悩み。
・家庭的な問題…等。

※教師が児童の話を聞きながら**じっくりと自分の心を整理できるように支援**することが大切。十分な時間がとれない場合は**作文用紙などに書かせる。**苛立ちや不安要因を整理するだけでも心は落ち着く。

②「短絡的な行動」について聞く。

問題行動（破壊、暴力、盗み…等、）は、繰り返される中で強化、習慣化される。

ⅰ　自分の行動を振り返らせ問題点を自覚させる。
ⅱ　児童自身に新たな行動の方向を考えさせる。
ⅲ　教師は児童が自己決定した新たな行動が強化されるように支援していく。

（2）行動を「客観視」させる。

・写真やＶＴＲに撮影する。→**児童の行動を客観的にとらえさせ、内省を促す。**
↓
・何度か繰り返すことで、自分の行動をメタ認知する力も高まり、落ち着いて行動できるようになる。

（3）問題を外在化・客観化する。

・「**児童自身に問題があるのではなく、児童の行動に問題がある**」と捉えることが基本。
・**自分で改めたい行動を紙面（人型の紙などが有効）に書かせる。**
↓

児童と教師が寄り添いながら同じ方向を向いて問題を共有化し解決をしていくことが大切である。外に出してしまった問題を児童と教師が解消できるように協力して取り組んでいく。

アイデア3

（1）予防の手立てを継続して行う

児童が「良い行いに気づき、善悪を判断して正しく行動すること」、そして、「正しい行動をする気持ちよさを感じること」が、自ら「きまりを守ろう」「友だちに迷惑かけないようにしよう」とする心を育てることにつながる。

児童の良い行動を褒めたり認めたりすることを心がける。

「下足場のくつそろえが全員できた」「だまって廊下を歩けた」「元気よくあいさつ・返事ができた」など、特に教師が学年はじめに児童に意識させたいことを取り上げる。

そして、継続して掲示し、**良い行動が増えていく様子を目に見える化する**ことが必要。子どもたちの自信ややる気を高め、みんなで守ろうとする**一体感**や**所属感**を高めていく。

友達同士の**「すてき見つけ」に見える化すること**が、温かい教室作りにつながる。

【例】　『がんばりんご』

日付と様子・行動を書く。

○後ろの壁に掲示したり、教室の上のドア枠に並べていったりする。↓

※　児童の実態に合わせて、徐々に行動レベルを上げていくようにする。

【例】　「プラス言葉」　「みんなのきらきらを伝え合おう」　「キラキラコーナー」

※　すてき見つけを継続的に行うことで、友達を思いやる温かい心情が育てられる。
※　日付と作者名を記入することがポイント

アイデア4

質問紙調査法

子ども達の特性を、平均的な傾向と比べながら子ども達を理解することを目的とし、比較的短い時間で、多くの子ども達の実態をつかむことができる。

- 調査の目的を可能な限り子どもに伝え、個人情報や成績とは関係ないことをはっきり伝える。
- 調査結果に影響を与えないようにするために、子ども達の不安をなくすことが大切になる。安心して取り組むことができる環境を作ることが大切である。

アイデア5

報告・連絡・相談シートの活用

問題行動等が起きた場合、全教職員で共通理解する必要がある。その際、シートの活

用をすることでケースが違っても分かりやすい。

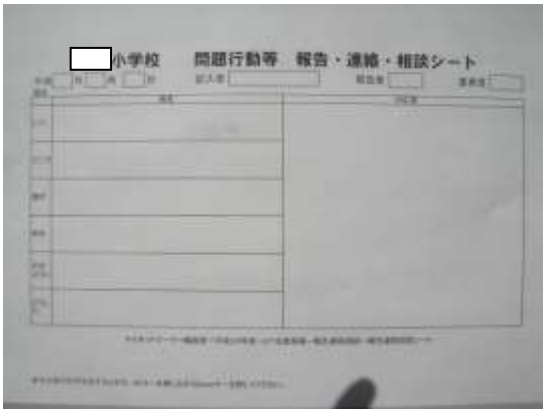
・学年主任・生徒指導主任・教務主任・教頭・校長への報告・連絡・相談

・問題行動等　報告・連絡・相談シート（情報の共有、振り返りができるもの）等を活用する。

・職員全体で情報を共有し、該当児童や児童全体に対する共通した対応・指導や問題行動の未然防止を図る。

・専門機関に相談する

※　プロの目で問題行動を分析してもらい，対応や体制を改善する。



4 具体的な問題行動対応

（1） けんかの対応

けんかは、子ども同士の何らかの行き違いによる気持ちの高揚で起き、その気持ちを受け止めた上での解決を図る。また、正しいかかわり方を育てるチャンスという姿勢で臨む。

① 安全のために当事者同士を引き離し、子どもの気持ちが落ち着くまで待つ。
② 子どもの気持ちをしっかりと聴き、したこと言ったことを子どもに確認させる。
③ どのように行動すべきであったかを考えさせ、納得した解決を図る。
④ 互いのよくなかったことに目を向けて謝れるようにする。
⑤ その上で、適切な関わり方やがまんするなどの社会性を身につけさせるようにする。
⑥ 双方の親に事実関係を説明し、解決に向けた協力を得る。
⑦ 怪我、持ち物の破損は速やかに連絡し、けんかに関わった子どもの家庭同士でも連絡をとってもらうように依頼する。

（2） いじめ問題の対応

いじめは「どの子にも起こり得る」という認識を持ち、子どもが発する小さなサインを見逃さない。また、子ども同士のよりよい人間関係を深める教育活動を進める。

① いじめは、学級全体の問題として、いじめを許さない雰囲気の形成を図る。
② 日頃から子ども同士の温かな人間関係を作っておく。
③ 日頃から子どもの様子に気を配り面談、アンケートなどで子どもの声を聴く。
④ いじめがあった場合、当事者の話を聴くだけではなく、学級全体やその子どもと関係する他の教師・保護者から情報を集め、いじめの全体像を把握する。
⑤ 担任一人で抱え込まず、他の教員と連携をとると共に保護者の協力も得て対応する。

◆ いじめ対応のコツ

いじめている子どもへの対応

① いじめは許さないという毅然とした態度をとる。
② 相手の心の痛みや苦しみを心情的に分からせる。
③ いじめを完全にやめるまで個別指導を繰り返す。

③　言い分を聴き、いじめの背景にある欲求不満やストレス等を共に考える。

いじめられている子どもへの対応

①「先生はあなたの味方だよ。」ということをはっきりさせ心の支えになる。

②　全教職員で「いじめられている子を絶対に守る」という共通理解を図る。

③ はやしたてたり傍観したりする子どもへの対応

③　次は自分がいじめられるのではないかという不安を取り除く。

◆ 暴力問題への対応のコツ

校内で暴力行為が発生したら「絶対に許されない」という認識で毅然として対応する。そして、再発防止に向け、背景を把握しながら個別指導に粘り強く取り組む。

① 毅然として対応する

・「暴力行為はどんなことがあっても絶対に許されない」「暴力は人権侵害である」という認識を持ち、毅然とした態度が必要。

② 再発防止に向けた指導

・「この子は○○な子」という先入観にとらわれず、様々な角度から子どもを見つめる。

・愛情と情熱をもって指導に当たり、子どもや保護者との関係作りに努める。

◆ 万引きへの対応

万引きへの対応は、保護者と協力しながら、常習化しないように再発防止に重点をおく。そして、教員と子どもの心の絆を強くし、子ども自身が内省する指導を進める。

① 再発を防止する

・万引きは、刑法では窃盗罪に当たる犯罪行為である。子どもにとっては、簡単にでき、罪の意識が薄くなりがちな「初発型非行」である。成功経験によって、万引きが繰り返される場合があり、「非行の入り口」と言える。再発防止を第一に考えた指導が大切である。

② 保護者と協力して指導する

・万引きは学校外で発生するため、保護者との連携が欠かせない。万引きが起きたら、家庭での監督を依頼するだけでなく、事実を冷静に伝え、再発防止に向けて協力して指導する必要がある。

③ 教員と子どもの心の絆を強くする

・子どもが抱える問題に沿ったサポートを進めながら、教員と子どもの心の絆を強くするように努める。

・「どうして万引きしてしまったのか」「これからどうすればよいのか」と自分自身の心と真剣に向き合う指導を進めたい。

◆ 落書きへの対応

犯人探しにならないように進めることが大切。道徳や学活で子どもにしっかりと考えさせる資料を使い友達の悲しみと辛さを共感的に受け止めさせることが必要。

（1）加害児童が特定できた場合

① 事実確認（５W１H）を複数人で行う。
② 個別指導をする。
③ 保護者へ事実経過と指導方針を伝える。
④ ３者（学校、児童、保護者）での指導と改善の約束をする。
⑤ 事後経過の確認をする。
⑥ <u>加害児童とともに落書きを消す。</u>

（2）加害児童が特定できなかった場合

① 事実確認をする。（担任、学年主任、生徒指導主任、教頭、校長）
② 落書きを消す。
③ 学活、道徳の時間を使って、学級指導を行う。（再発防止に努める。）
④ 必要に応じて学年集会などで指導する。

※（1）（2）いずれも、学年主任、管理職の関わりが必要である。

4 活用にむけて

① 担任一人で抱え込まない。

全教職員で、全児童を教育していくスタンスを忘れないこと。校長をリーダーとした「チーム○○小学校」で解決することが一番重要である。

② 複数体制で児童の困り感を取り除いていく。

担任一人ではなく、報告、相談、連絡を繰り返しながら、その児童に関わりのある教員でチームを組み児童の思いを聴く、困り感を取り除いていくことが大切である。

③ 問題行動を公にする場合は、様々なリスクを伴う。

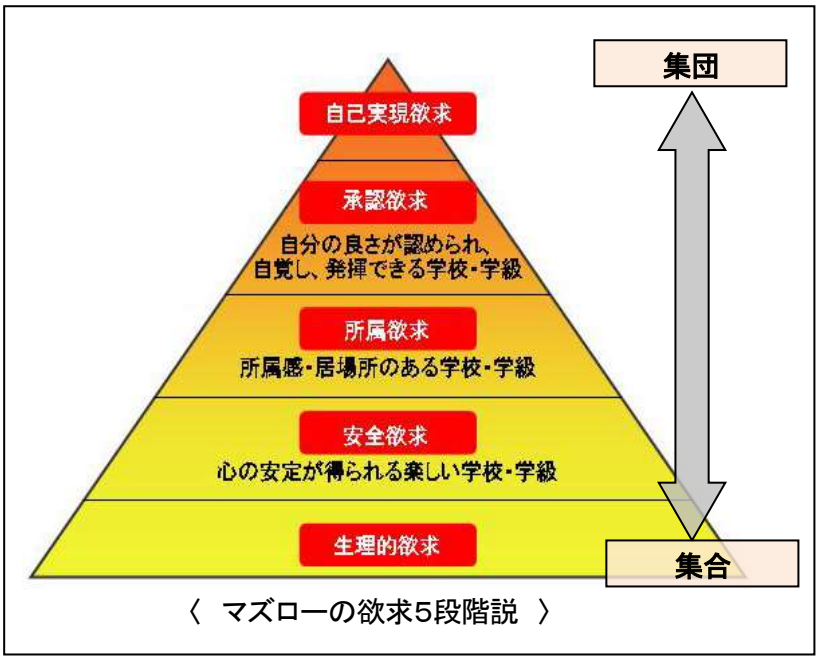
校内で起こった生徒指導上の問題を、家庭、地域等情報公開数することは、熟慮して慎重に行いたい。児童の性格や行動の内容などしっかりと考えてから臨む必要がある。

集団を高めるアイデア

1　集団を高める意義

新しく編成された年度当初の学級は、便宜的、機械的に振り分けられた一つの集まりにすぎない。目標意識も希薄で、様々な願いや欲求をもった子どもが偶然に一隻の船に乗り合わせたような状態である。この**「集合（グループ）」の状態をいかに「集団（チーム）」にまで高めるか**が、学級経営の重要なポイントとなる。

「人間」という字は、「人」の「間」と書く。それは、人間が人間になるためには「人の間」、つまり人間関係が必要であることを意味する。その人と人を結ぶ糸が太く強く幾重にもつながっていくのであれば、その過程こそが「集合（グループ）」から「集団（チーム）」への変容過程である。



〈　マズローの欲求5段階説　〉

マズローの欲求５段階説は、まさしく「集合（グループ）」が「集団（チーム）」へと変容していく過程を示している。つまり、「生理的欲求→安全欲求→所属欲求→承認欲求→自己実現欲求」と高まっていく個人の欲求内容を実現していけるのは、他の個人の関わりの強さや広さ・深さであり、その変容の状態が図の右側の「集合（グループ）」から「集団（チーム）」への過程そのものなのである。**楽しくて、居場所があり、よさが認められる「望ましい集団」の中でこそ、自己実現は達成される。**

では、どのような集団を目指したらよいのか。学習指導要領解説特別活動編には、

ア　活動の目標を全員でつくり、その**目標について全員が共通の理解をもっている**こと。
イ　活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話合い、それを**協力して実践できる**こと。
ウ　一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、**自分の役割や責任を果たす**とともに、**活動の目標について振り返り、生かす**ことができること。
エ　一人一人の**自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強い**こと。
オ　成員相互の間に**所属感や所属意識、連帯感や連帯意識がある**こと。
カ　集団の中で、**互いのよさを認め合う**ことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

と示されている。

学級の中に一過性のグループをつくることは容易い。教師の一方的な指導ですぐにでもつくることができる。しかし、なかなか「集団（チーム）」の域には達せず、担任が変わったら元の木阿弥になってしまうケースが多い。

ではなぜ手をかけ時間をかけて「集団（チーム）」をつくる必要があるのだろう。

それは、集団性が高く、互いに認め合い切磋琢磨する学級集団では、

個々のモチベーションが高く、全体の生産性が上がるだけでなく、一人ひとりの心も学力も育ちやすい。

からである。

このように、『集団を高める』ことは、人間形成、学力向上に向けて大きな土台となっている。すなわち、**望ましい集団をつくることは、学校教育にとって根元的な課題**なのである。

2 集団を高めるアイデア

アイデア（該当学年）〈○・・・ねらい　※・・・留意点〉

〈 学級経営編 〉

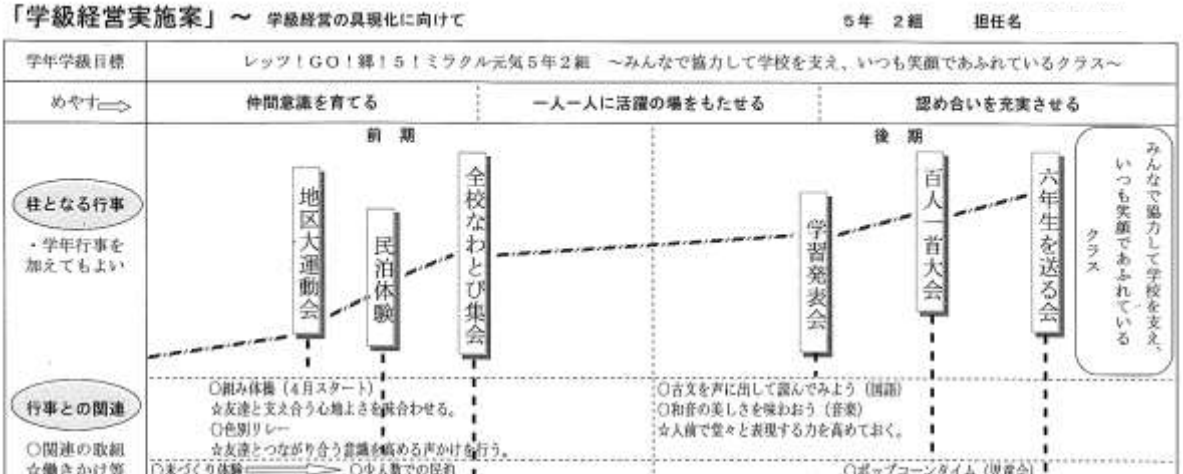
学級経営実施案の作成（全学年）

＜手順＞

① ４月段階での児童の実態を把握（始めの姿）
② 実態と発達段階を考慮して学年目標を設定
③ 「年度末に目指す児童の姿」（終わりの姿）を記入
④ 活動内容と実施時期（スケジュール）を記入
⑤ 活動やねらいの軽重、集団の成長過程を予測して発達曲線を記入

これまでの学級経営案は、多くの時間をさき苦労して作成したにもかかわらず、効果的に活用できていないのが現状であった。内容が何ページにもまたがり、見るのに手間がかかるためである。

そこで、従来の「学級経営案」に改良を加え、分かりやすく図式化し一枚に表した。こうすると、一年間の見通しが持ちやすく、何より全体が俯瞰できるようになったため、集団の成長に合わせた修正加筆が可能になった。



〈 黄金の3日間編 〉

新学期、どの子どもも期待と不安を抱えて学校にやってくる。特に、最初の３日間は、非常に緊張して先生の話を静かに聴いている。それは、「怖い先生なのか」「優しい先生なのか」「自分たちの自由をどこまで許す先生なのか」など、先生の出方をじっと伺っているからである。

だとしたら、この３日間を最大限に使わない手はない。この３日間で、学級を集団として統率することができれば、年間をとおして学級集団が成長していく可能性が高まるのだから。

ただし、闇雲に思いつきで指導しようとしても、無理な話。「集団（チーム）は一日にして成らず」である。周到に準備し、話す言葉の端々まで気を配る計画性と、反応を見ながら即座に軌道修正できるだけの力量が必要となる。それ程までにして迎えるだけの価値が、この「黄金の３日間」にはあるのである。

新しい友だちへの質問（中高学年）

○　普段は交流が少ない友だちとかかわることを通して、友だちとの距離を縮めるとともに、この友だちとよりよい学校生活を築こうとする素地を養う。

①じゃんけんで勝ったら先行

※テンションのあがる質問を！

②５人とやったら、着席

③おわったら、おしゃべり　※まだ終わってない子が安心できる場づくりをする。

※友達と関わるのが苦手な児童には、教師がさりげなく声をかけたり、支援したりする。

※「だれがやさしく話してくれましたか。」「一人でいた時、声をかけてくれたのではだれでしたか。」というような観点でシェアリングを行う。

チェーンワーク（中高学年）

○　テーマに合わせて列をつくることを通して、心と体をほぐすとともに、友だちとひとつのことをやり遂げる気持ちよさを味わう。

①テーマに合わせて、１列に並ぶ。

②並び終えたら、上手にできたか確認する。

・まずは、名前順、誕生日順など。　※無言、チーム対抗など条件を加えていく。

・起きた時刻順　※できたら、バンザイですわる。

・テンションが高い順　※できたら、拍手してハイタッチして席に着く。

※「みんなと上手にできた時、どんな気持ちでしたか。」「やっていて気づいたことはありますか。」というような観点でシェアリングを行う。

〈 年間取り組み編 〉

鏡よ鏡、鏡さん

○　鏡を使って自分自身と見つめ合うことを通して、自分自身を見つめ、自分と出会う。
①宿題として、次のように黒板に書く。
②その１「今日帰ったら鏡に向かって『今日一日よくがんばったね。』と２回以上自分に声をかけてやること」
その２「明日の朝、鏡に向かって２種類の『行ってきます。』を自分に呼びかけるように言うこと」

※実施数日後に、「自分に声をかけてみてどんなことが変わってきましたか。」「２種類の『いってきます』を自分に言ってみてどう感じますか。」というような観点でシェアリングを行う。

いいとこ四面鏡

○　友だちといいところを見つけ合う活動を通して、自己肯定感を高めるとともに、よりよい人間関係を築く。
①班の友だちの名前を上のところに書く。
②右どなりの友だちにワークシートを渡す。
③友だちのいいところを３つに○をつける。
④班の全員にまわす。
⑤感想を交流する。

※シェアリングでは、「いいところを見つけてもらってどう思ったか」を言わせる。
※席替えをした日にすると、いっそう効果的。

いいとこ四面鏡

いろいろな「いいところ」	書いてくれたメンバーの名前			
	さん	さん	さん	さん
1．しっかりしている				
2．頼りになる				
3．心くばりのある				
4．公平な				
5．堂々とした				
6．エネルギッシュな				
7．人なつっこい				
8．活発な				
9．好奇心たっぷりな				
10．何でもよく知っている				
11．意志が強い				
12．てきぱきした				
13．かわいらしい				
14．誠実な				
15．何ごとも一生懸命な				
16．優しい				
17．ユーモアがある				
18．さわやかな				
19．あたたかい				
20．気どらない				
21．ねばり強い				
22．穏やかな				
23．思いやりのある				
24．落ち着いている				
25．正直な				
26．笑顔が素敵な				
27．親切な				
28．包容力のある				
29．話を聞いてくれそうな				
30．人を惹きつける				

自分の名前（　　）

〈　「いいとこ四面鏡」ワークシート　〉

よいこと見つけ（低学年）

○　友だちのよいところに目を向け、互いに賞賛することを通して、自己肯定感を高めるとともに、友だちのよさを実感する。

（１）友だちのよいところ見つけをする。
友だちのよいところに目を向けさせ、よいところ見つけをする。となりの友だち、グループの友だち等、いろいろなパターンを継続的に実施するようにする。よいところを見つけてもらうことで、一人ひとりが大切にされていること、仲間のよさなどが実感できる。

（２）教師が子どものよいところを見つけて紹介する。※シェアリング
毎日の帰りの会で、教師が学級の子のよいところを見つけて発表する。子ども同士

では見つけられないよいところを見つけ、意図的に発表する。こうした活動をくり返し、**評価の規準を見える化していく。**

（3）正義が勝つ学級へ

よいことをした場合、それをみんなが受け止められるような集団でありたい。

低学年のうちは、教師の声かけ次第で、受け止め方が違う。

※よいところ見つけが、そのときだけで終わらないように、随時見つけたよいところを掲示できるようにしておく（**評価の規準の見える化**）。「学級の木」や「きらきら」コーナーと名付けていつでも書くことができるようにする。いくつ集めたかが、一目でわかると意欲づけにつながる。

うそはどれだ

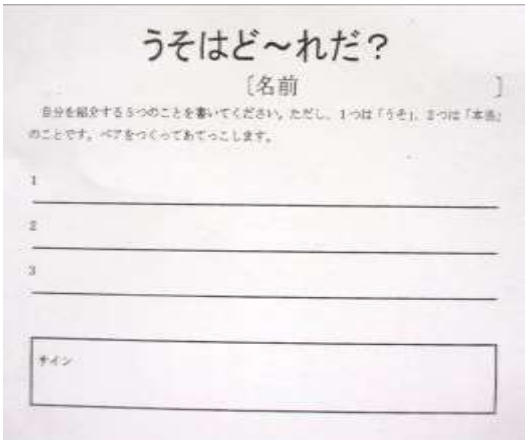
○　知らない友だちの一面を楽しみながら知ることを通して、会話のネタを増やし、友だち同士の交流を活性化させる。

①自分の自己紹介を３つ書く。ただし、１つはうそ、２つは本当のことを書く。

②班の友だちでペアを作り、あてっこをする。

③あってこした友だちに、サインをもらう。

※朝の会、帰りの会などの短い時間で取り組める。


うそはど～れだ？

〔名前　　〕

自分を紹介する５つのことを書いてください。ただし、１つは「うそ」、２つは「本当」のことです。ペアをつくってあてっこします。

1

2

3

サイン

〈　「うそはどれだ」ワークシート　〉

※「どんな新しい発見がありましたか。」「サインをもらって、どんな気持ちになりましたか。」というような観点でシェアリングを行う。

ちがう（同じ）が勝ち

○　出されたお題について思い浮かぶことを出し合う活動を通して、「聞き合い」から「話し合い」にステップアップさせる。

①「ちがう（同じ）が勝ち」と板書する。

②グループで行う。お題に対して、他のグループが考えつかないような答え（同じ考えの答え）を相談して決める。

③画用紙や小黒板に回答を書く。同じ答えがない（ある）グループを得点とする。

④様々なバージョンで行う。（先生の口癖、海に面していない県、言われていやな言葉など）

※「いい考えを出してくれたのはだれでしたか。」「作戦会議がうまくいった時は、どんな時でしたか。」というような観点でシェアリングを行う。

宇宙遊泳

○　みんなで力を合わせて友達を持ち上げる活動を通して、「話し合い」から「紡ぎ合い」にステップアップさせる。

会話のネタを増やし、友だち同士の交流を活性化させる。

①８～10 人のグループをつくる。
②床に寝かした一人を，残り全員で，持ち場を決めて（頭部が大切）持ち上げる。
③担ぎ上げられ役は，しゃべらず，体の力を抜いて，決して動かさない。
④持ち上げ役は，ゆっくりと，黙って持ち上げ，最後は頭上まで差し上げる。
⑤頭上で止め，みんなで声をそろえて「○○さん，すごいぞー！」と叫ぶ。
⑥ゆっくり降ろして，床に寝かせる。頭は最後にゆっくりつける。
⑦全員が交代して行う。

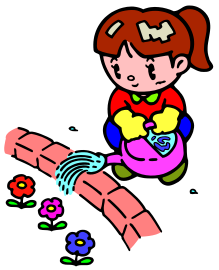
※「持ち上げている時と、持ち上げられている時とどうちがいますか。」「気持ちがとても良いのはなぜでしょう。」というような観点でシェアリングを行う。

〈 係活動編 〉

株券制度①（高学年）

○　個人や集団のがんばりを可視化し、活動の成果を明確に示すことで、目標を具体的にふり返ったり、次の活動に生かしたりする素地を養うとともに、協力して活動するよさを味わう。

＜株券について＞



・　子どもたちのがんばりが見られた際に株券を配り評価する。
・　貯めた株券は、宿題の免除に使ったりお楽しみ会の企画のために使ったりする。また、係活動で使っても良いこととする。

＜株券がもらえる条件＞

（学習面）

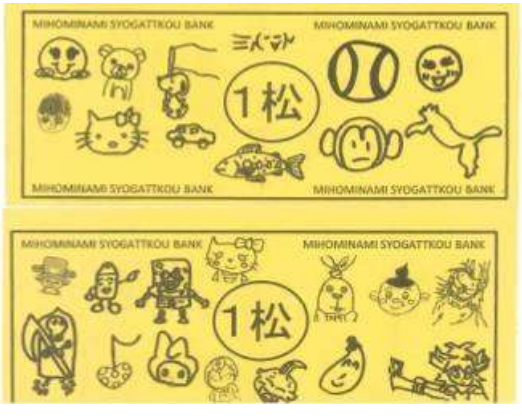
◇単元テストやショートテストが満点の場合　◇宿題ノートが１冊終わったとき
◇１０日連続宿題忘れがなかった場合　◇自主学習の内容がよかった場合

※それぞれ具体的に評価基準を示す。

（生活面）

◇当番活動や係活動などの自己評価で、振り返りカードに○が２０個貯まったとき
◇学年や学級の代表として役割を果たしたとき
◇帰りの会での友だちのよいところ見つけで、印象的な出来事があったとき
※それぞれケースごと、内容に応じて具体的に評価基準を示す。

株券制度②（高学年）



（１）学級通貨の発行

①　学級で決めたルールなどを全員のものとするために、みんなでポイントを集めて学級を高めようという雰囲気をつくる。これができあがりつつある段階で、学級通貨を発行する。

②　話合いの中では、何ができたら「○円」と決める。当然、達成の難しいものはポイントが高くなる。また、ルール違反や友だ

ちに迷惑をかけたり、人にいやな思いをさせたりするとマイナスポイントになるルールも決めておく。

③　ポイントを集計する係も立ち上げる。

④　ポイントが貯まったらパーティーを開くことも決めておく。

（２）お試し期間の実施

①　決まったことに基づいて１週間「お試し期間」を行う。子どもたちはパーティーができると喜んでするが、ポイントはなかなか貯まらない。それどころか、マイナスが思いのほか貯まる。

②　ここで一端、どうすればプラスのポイントが貯まるようになるのか話し合わせる。このお試し期間が重要で、学級の様々な問題が可視化・数値化されて児童の前に提示されることとなる。つまり、学級の問題が浮き彫りになる。

　この段階の話合いで重視すべきことは、表面的な問題の解決方法を話し合うのでなく、その「原因」を話合わせることである。

（３）本格的な通貨の運用

①　１日ごとにプラスとマイナスを報告させる。

②　貯金箱は透明で中が見えるようにしておく。

③　毎日のように開けて数える子どもたちが出てくる。数えながら話していることが学級に絶大な効果を与える。

④　教師はそれとなくみんなに聞こえるように、うまい具合に話を合わせる。

⑤　通貨の運用が始まると、いろいろな面で教師が大きな声をかけたりしなくても効果が出始める。

⑥　１つ１つ波及があるものを取り上げながら、教師の評価を続ける。

⑦　少しずつ学級の中にルールに則った動きが浸透し始める。

⑧　この繰り返しを続けることで集団の高まりが出てくる。

（４）ポイントの見直し

①　これまでなかなかできなかったことができるようになると、ポイントの見直しをしようという声が出始める。

②　このタイミングを待ってポイントの見直しを進める。

③見直しをした後、スタート時と同じようにお試し期間を設ける。すると、新しいポイントの難しさが身にしみて分かる。

※この通貨をめぐって、自分たちに都合がよいように駆け引きを仕掛けてくる。また、窃盗、横領など様々な問題が次から次に出てくる。その時が、学級を変えるチャンスである。そして、特別活動の出番である。

※この実践の行きつくところは、「無償の行為、ボランティア活動」である。そのためのしかけが必要となる。

〈 児童会活動編 〉

〈 第２回松パーティーの様子 〉

見つけていいとも！全校集会（全学年）

○ 和やかな雰囲気の中で、学校の一員であるという所属感と連帯感を持たせる。
○ 異学年がともに活動する中で、児童一人一人の特性を生かし、すべての子のよさを認め、励ます場とする。

〈内容〉

プログラム
１　はじめのあいさつ
２　今月の歌
２　ルール説明
３　グループごとに話し合い
４　見つけたことの発表　→　判定
５　表彰
６　おわりのあいさつ

見つけたことを１つずつ紙に書き、ホワイトボードに貼る。その後、玄関付近に掲示する。

〈 グループでの話し合いの様子 〉

〈事前準備等〉
・縦割り班別に並んでおく。
・判定の仕方
　項目１つにつき　１点
　１グループだけが書いた項目　　ボーナス点として　＋２点
　２グループ同じ項目を書いた場合　　ボーナス点として　＋１点
・各グループで見つけたことを発表する。その際、同じことを書いている場合には続けて発表し、時間短縮を図るとともに判定しやすくする。
・１週間くらい前に集会の内容を知らせ、相談したり見つけたりするようにさせ、いいところに目を向ける機会にする。

〈 学校生活編 〉

キラキラわくわくポイント（全学年）

キラキラわくわくポイントとは、みんなの力でめあてを達成できた時にゲットできるポイントである。そのめあては、全員発表であったり、忘れ物０であったり、迅速な行動であったりする。何か達成するごとに、ガラス玉が１つ（大小あり）、ポイントキーパーに入れられる。ガラス玉は１個あたり、小が２ｇ、大が２０ｇ。毎日、その重さを計測してみんなが力を合わせてできた成果を確かめ合うという活動である。

① キラキラわくわくポイントのめあては、子どもたちから募集する。

〈めあての例〉
・給食の準備開始～いただきますまでが１０分で完了。

・お掃除マスター表で全員がお師匠クラスだった。
・全員発表を達成した。
・下足箱、スリッパそろえがパーフェクトだった。
・全員出席１週間連続（ガラス玉１個)、１か月連続（大ガラス玉１個)。
・全員がありがとう発信できた。
・全員が宿題を提出した。

② それぞれのめあてに担当を決める。

③ 帰りの会で、担当のめあてが達成できたか報告し合う。

④ 達成したら、達成イベントをする。

※担当が声かけするだけではなく、みんなが意識して集団がひとつの方向に向かないと達成することは難しい。

※勢いが出てきたら、付加価値をつけるといっそう盛り上がる。例えば、「５００ｇ を超えたらクリスマスパーティをしよう」という設定にすると、子どもたちはより張り切るようになる。

※担任が、「みんなで」「みんなのために」を強調することが重要である。

３ 活用に向けて

(1)まずは、『実態把握』

たくさんの集団を高めるアイデアを挙げたが、「このアイデア、おもしろそうだからやってみよう。」では、効果的に集団は高まらない。学級活動は、「初めに教材ありき」ではなく、「初めに子どもありき」である。**まず児童の実態を見極め、教師の目指す学級の姿とすり合わせながら指導計画を立てることが前提**となる。その指導計画をもとにして、子どもに適した活動を仕掛けていくことで、子どもと教師が目指す方向に集団が高まっていくのである。

(2)次に、『意欲づけ』

質も大切であるが、量も重要である。そして、継続してこそ効果が現れる。**集団を高める活動の積み重ねが、よいモデルをつく出すことになる**。そのよいモデルの出現で、望ましい集団への高まりが加速する。

これらのアイデアを見ると、「褒める」「賞賛する」という言葉が多く使われている。**児童のよい言動を見つけ、適切に褒め、次の活動への意欲づけを心がける**。

活動を積み重ね、子どもたちの中に「やって楽しい学級活動」のイメージが出来上がると、必ず**「自分たちで何かやりたい」と要求するようになる**。「自分たちで」というのが大変重要で、どのようなかたちで子どもたちの要求が出てくるかにアンテナを張りめぐらせる。そして、要求が出てきたら、可能な限り大げさに扱い、大きなうねりにしていく。

(3)そして、『実行』

活動を共有する場を設ける。例えば、「活動の様子を写真に撮って、その凄さをコメントに書き、常時掲示して可視化する」「学級新聞を発行してみんなに配る」「活動後に色紙に寄せ書きをして残す」などである。**共有することで、活動が発展していく**。

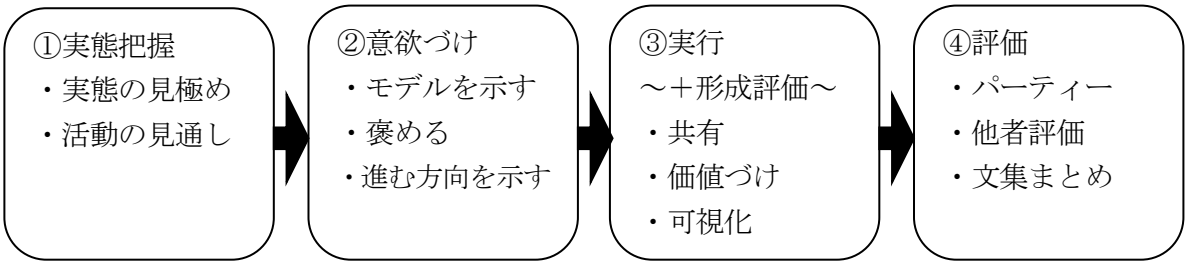
教師のねらいと子どもの目標にずれが生じないように、絶えず確認したりふり返った

りして、意思の疎通をできるだけ多く図りたい。

(4)最後は、『評価』

達成パーティーや記念式典などで、がんばった成果を確かめ合い、集団で取り組む成就感を味わわせる。この喜びが大きければ大きいほど、次の課題に向かう意欲が膨らむ。またアンケートはもちろんのこと、１ヶ月に１回程度は「先生の通知表」など、**子どもの側から教師への評価もあえて入れていく**。実はこうした評価は、俯瞰してながめる力をつけ、結果として集団の力を高める隠れたポイントになることが多い。

〈　集団を高めるイメージ図　〉



〈参考文献〉
・『よりよい人間関係を築く特別活動』（杉田洋　図書文化）

忘れ物をなくす指導のアイデア

1 忘れ物をなくすために

(1)忘れ物にどう対応するか

児童が学校生活で必要とする持ち物は、さまざまである。低学年のうちは、家庭にお願いして、持ち物の準備に協力していただくことが多いが、その後児童の実態に応じて、児童自身の力で自分の持ち物を準備し、忘れ物がないようにさせたいものである。それは自立・自律につながり、ひいてはマネジメント力にもつながっていく。

まず、忘れ物の指導を始める前に確認しておきたいことは、児童と教師の意識にずれがあることである。児童の多くは**「忘れ物をしたくてしているわけではない」**のだが、教師はそうした実態には目を向けず、忘れ物という目の前の事象のみで「忘れ物をする者が悪い」と感情的になっていることが多いのではないだろうか。よって、忘れ物をなくす指導を意図的・計画的に行っている教師は少ないと思われる。忘れ物がいつまでもなくならないはずである。

「忘れる」という能力は、人間に備わっている優れた能力である。「忘れる」ことで、空いた場所に「覚える」ことが入る余地が生まれる。「忘れ物」は必然であって、人間が人間である限り、大人も子どもも「忘れ物」は決してなくならないのである。大切なのは**「忘れ物の実態と背景の分析」、「忘れないようにするための一手」のストックをあらかじめ多く用意しておき、個々の状況に合わせて処方できる**ようにしておくことである。

(2)忘れ物の実態把握

具体的な場面でいうと、例えば「宿題を忘れました」という児童の言い分には、次のように意味がある。

① 本当に宿題をし忘れた。
② 宿題の内容が分からなかったので、「忘れた」と言った。
③ 宿題に取りかかったが最後までできなかったので「忘れた」と言った。
④ 宿題のプリントを無くしたので「忘れた」と言った。
⑤ 宿題に必要な道具がなく、できなかったので、「忘れた」と言った。

①と②以降とには差がある。①は宿題をしようとする意識が全くないケースで、悪びれることもない。②以降は、宿題をする意識はあったので、児童は困った表情をしているはずである。とりわけ③は、「やろうとしたが分からなかった。しかし、分からなかったと言えず、〃忘れた〃と言った。」ということがある。「忘れました」の言葉は短いが、奥が深いのである。忘れ物の指導の第一歩は、**「忘れた」状況を正確に把握すること**から始まる。

(3)忘れ物の原因

忘れ物には必ず何らかの原因が潜んでいる。とりわけ同じ物を忘れる、急に忘れ物が増えだしたという場合には、早急に原因を見定めて手立てを講じる必要がある。学習面に影響が及ぶだけでなく、交友関係さえも崩れていくことが多々あるからである。

① 何を持っていくのか忘れてしまう記憶力不足
② 読み（聞き）取る能力が不十分なため、理解ができない。
③ 注意力が散漫で、必要なことがメモできない。
④ 前もって準備したり、確認したりする習慣が身についていない。
⑤ 学校からの配布物や連絡事項が保護者に届くようになっていない。
⑥ 思い悩むことがあり、準備がままならない。

原因は１つとは限らない。むしろ複雑に絡まっている場合のことが多い。それでも、ある程度原因を特定できれば、方法は立てやすい。

2 忘れ物の対応のアイデア、コツ

○「やったぞ、みんなでパーフェクト」

『忘れ物をすることは悪い』のは、誰もが分かることである。しかし、単に、持ち物がなくて作業ができないという表面的なことにしか目がいかない児童も多い。忘れ物があったときには、それが、全体および個人の利益を損なっていることに気づかせるような声かけを繰り返し、忘れ物をなくすことは、**自分達の成長のバロメーター**にもなるという大局的な意識を持たせたい。それには、全員が忘れ物をしなかったということを**視覚化**することで、意欲付けや意識の定着を図ることが効果的である。

① 学級全体の力で達成できたことをガラス玉に置き換え（学級の力の視覚化）、ためていくシステムを作る。

② 帰りの会などで、達成できたかどうか全体の場で確認する場面を作る。

③ 日々の声かけを大切にする。（教師によるもの、児童どうしによるものなど）

④ 目標を設定し、達成したときにはなにかみんなが喜んだり楽しんだりするごほうびを設定し、活動の意欲付けにする。

○「イエロー、レッドカードをなくせ」

保護者に忘れ物が多い現状を知ってもらい、児童自身に忘れ物を減らしていこうと意識させるため、日頃から準備は、１年生はお家の方と一緒に、２年生はお家の方に確かめをしていただくようにする。

① 忘れ物をしたときは、まず担任に報告するシステムにする。

② 忘れ物をしたときは、その場ですぐに連絡帳に○と書いて忘れ物を赤字ですべて書いておくようにする。

③ 忘れ物が３回以上続くときは、イエローカード（A4版、黄色い画用紙をラミネートした物）をランドセルに入れて持ち帰る。

④ 何回も続くようなときは、レッドカードを持ち帰り、お家の人にコメントをもらう。

忘れ物をする度に書くということから、次から忘れ物をしないという意識が出るようになる、また、連絡帳に記入することで保護者に伝わり、児童への意識付けになることはもちろん、家庭から声をかけてもらうなど協力も得られる。イエローカードがあることで見直しをするなどして、忘れ物をしない習慣がついていく。

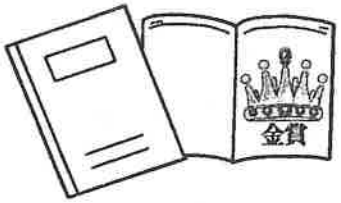
○「連絡帳赤マル作戦開始」

低学年のうちに、「学習準備や家庭学習をきちんとする」という習慣をつけるために、学年の始めに行う。学年通信や保護者懇談等でねらいを伝え、保護者の理解と協力を得ることも大切である。

① 家庭での用意時に記入している宿題や持ち物をランドセルに入れたら赤マルをつける。

② ランドセルの上に連絡帳を置いておく。保護者が赤マルを確認し、「見ました」のサインをする。

③ 忘れ物なしがある程度続いたら、「がんばり賞」のぴかぴかシールをはる。



以上のことにより、「宿題をするのは当たり前」「忘れ物は、自分の損」という意識が生まれる。下の学年のうちに身に付けば、その後は楽になり、保護者の提出物も子どもの方から保護者に催促するようになる。

○「意識付けと連絡帳記入をしっかり」

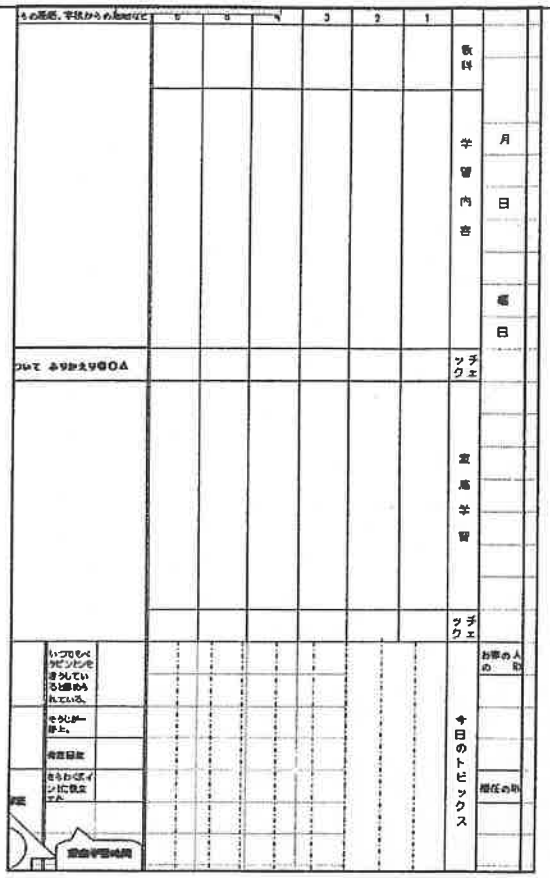
忘れ物をするとどうして困るのかを、具体的な事例をもとにした話をし、忘れ物をしないようにしようという強い気持ちを持たせる。

① 忘れ物をしないためには、連絡帳をきちんと書くことが必要であることを認識させる。
※連絡帳も市販のもの以外に、目的にあったものを作成するのもよい。

② 余裕を持って準備をすることが必要であり、そのためには、前日に準備をすることが効果的であることを、繰り返し繰り返し説得する。

③ 万全を期するために、連絡帳の項目にチェックを入れながら準備していくこと方法ましいことを知らせる。

④連絡帳の書き方を統一する。



・机の上に何も置かない状態で、集中して板書を視写させる。その際、十分な時間を確保する。
↓
・書き終わった後、記述に誤りや漏れがないかどうか、隣どうしでチェックし合うようにする。
必要に応じて、担任が全員の連絡帳をチェックする。
↓
・定着してきたら、特に心配な児童のものを当人の合意と納得の上、担任がチェックするようにする。

○「忘れ物不可能！教室一括保管」

家庭に持ち帰ってもあまり活用しないと思われる教材は教室に一括管理し、授業の度ごとに配布・回収する。但し、家庭学習に必要な場合のみ持ち帰らせ、翌日には回収する。また、家庭での自主学習などに活用するので持ち帰りたいと児童が申し出た場合も、次回の授業に必ず持参することを条件に持ち帰ることを許可する。絵の具セット、習字道具、裁縫セットの３点についても教室保管とし、家庭で必要な場合にのみ家庭に持ち帰るようにする。その際、次回の授業に必ず持参することを条件に持ち帰ることを許可する。

○「忘れ物への対処と責任」

宿題忘れにもいろいろある。「やるのを忘れた」「やったけどノートを忘れた」どちらにしても、忘れた場合、やっていようがいまいが、学校でもう一度やるというシステムを作る。（体調が悪くてできなかった場合は除く。）

① プリントの予備を用意し、ノート忘れの場合に備えて同じマスのプリントも常備する。

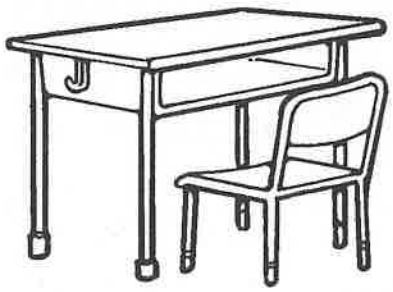
② 休憩のうちに忘れてきた宿題に取り組み、できたら休憩という流れを作る。

※児童にとっては、休憩時間というのはとても貴重な時間であり、その時間を宿題に費やすことはできれば避けたいと、きちんと宿題をやってくるようになる。

○「時間割り用意の手順を徹底」

準備のやり方は個人で違うが、統一したやり方を指導することで準備をするポイントの焦点化と忘れ物をしない習慣化を図る。

① 授業開きの際に、国語であれば、「教科書・ノート・漢字ドリル・漢字ノート」で４点セットというように、常備するものをセットにする。



② セットのことを年度当初の学年便りや学級通信で知らせておく。低学年の場合、保護者にとっても時間割の点検がしやすいと思われる。

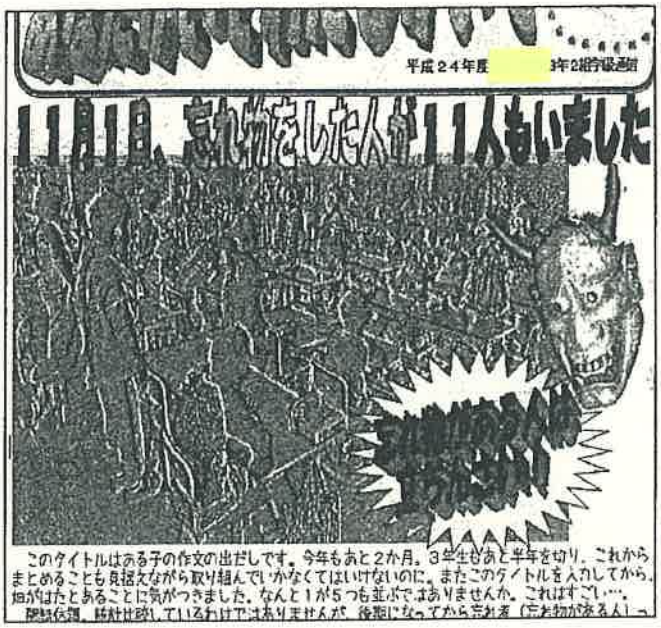
③ 時間割の用意をする時のコツを知らせておく。

・時間割を見ながら、その順に教科書等を重ね、そのままカバンに入れる。
↓
・学校に着いたら、そのまま出して引き出しに入れる。
↓
・使い終わったら、底になるように入れ替える。次の教科で使うものが上に出てくるということになり、引き出しの中を探す時間もかからない。
↓
・全体指導として朝の会を終えた後ぐらいにでも、学習の準備として一斉にこの作業を何回か続ける。

※これらは、次第に習慣として身についていく。これは、１年生のうちから実施して身につけさせたい内容である。

○「保護者も味方に～お家の人に問題提起～」

忘れ物をなくすには、家庭の協力が不可欠の場合も多い。学年・学級通信（数値、画像を用い、インパクトのある記事を心がける）で、全体や個人の状況を知らせ、問題提起をすることで、保護者に自分の子どもの実態を知らせ、指導する側の味方、協力者になってもらう。声かけをする保護者が増えたり、学級懇談などで話し合いの柱として忘れ物を挙がったりするようになる。



このタイトルはある子の作文の出だしです。今年もあと２か月。３学生ならあと半年を切り、これからまとめることも見据えながら取り組んでいかなくてはいけないのに。またこのタイトルを入力してから、始がはたとあることに気がつきました。なんと１が５つも並ぶではありませんか。これはすごい…。

十二日午前八時半ごろ、[redacted]で、虎が吠えるような声が廊下に鳴り響いた。目撃者の証言によると、そこには三年組の担任と十人の児童がいたという。捜査当局の調べによると、十の児童はその日、忘れ物をしており、それに対して、今年、年男の担任は虎のように吠えていたという。……クラスでは、忘れ物がなくならないことが問題になっており、年が変わってもその状況は変わらず、まとめの時期を迎えて、ますます事態を打破する手立てが求められている。

3 活用に向けて

以上のような実践は、以下のことを心がけながら取り組みたい。

○ 年度初め、長期休業明けなど、時期を見て実施し、効果を狙う。

○ 子どもの様子やクラスの目標なども考えて、「がんばり賞」の期間やシールのグレードを変えていったり、マンネリにならない工夫を考えたりすることも必要。

○ 個々に合わせたためあてを大切にし、「忘れ物があるので全員休憩はなし。」といった連帯責任をとるようなことはしない。

○「忘れ物・宿題点検係」は作らず、担任も含めたみんなで取り組む方法により、みんなが力を合わせてなくしていこうという活動にする。

※ 忘れ物をなくすには、**根気強く継続した指導や働きかけ**が必要である。目の前の忘れ物を減らすさまざまな取り組みもするべきであるが、**忘れ物がない生活や、忘れ物をゼロにした達成感が、自分達の成長にどうかかわっていくのか**を理解させ、**自分の目指すゴールイメージを持たせる**ことが大切である。

自立心を学ぶ活動のアイデア

1　自立とは

(1)「自立」と「依存」

「自立」とは、「他の力によらず、自分の力で身を立てること」（広辞苑）とある。しかし、「身を立てる」のは「自分」であっても、「他の力によらず」自分だけで「自立」することは不可能に近い。「自立＝すべて自分でやること」ととらえてしまうと、できないことで子ども達を追い込んでしまう危険性が高い。

多項目教育心理学事典では、**「心理的、行動的、経済的に他人からの援助を必要とせず独立して行動できること。自立は孤立ではなく、他人と望ましい相互作用、人間関係を保ちながら、健康性の高い独立性を保っている状態」**とある。特に後半部分が重要で、「自立」と「依存」は対極にあるのではなく、**「依存」しながら「自立」が成り立っている**と考えた方がわかりやすい。思えば、大人でも、自分一人だけで生活をしたり仕事をしたりすることはできない。大切なのは、「自立」と「依存」のバランスなのである。したがって、「自立」で求める姿は、

「自立」と「依存」のバランスを自分でとるようになること

であり、それこそが**「成長」している姿**なのである。

(2)「自立」に向けて

こう考えると、「自立」の基本はそう難しいことではない。

自分ができることを精一杯やること

につきる。そして、「依存」の割合を減らして「自立」に向かうためにすることは、**「困った時には人に頼る」「分からないときには人に聞く、教えてもらう」**ことであろう。こうした行動や意識が積み重なって「自立」の割合が増えていく。だから、「自立」している人のところには多くの報告や相談が入る。つまり、**「自立した人」＝「頼られる存在」**なのである。

2　自立心を育てる５つのポイント

(1)聞き上手になる…相手を大切に思い、きちんと耳を傾けて「聴く」

①　あいづち　「へえ」「なるほど」「そうなんだあ」 ②　うなずき　（首を縦に振りながら）「うん、うん」 ③　繰り返し　（相手の発言の全部、または、一部分を繰り返し言う）

(2)ほめ上手になる…「ほめる」とは、事実に基づいて本当のことを伝えること。ほめる対象は、子どもの努力や成果。

①　細かく、具体的にほめる。 ②　タイミングよくほめる。 ③　心をこめてほめる。

(3)じっくり考えさせる…「自立」するには時間が必要。「待つ」ことの積み重ねが「自立」に直結していく。

① 対象になる人の**行為について問うのではなく、事象そのものについて聞く。**
×「なぜ、あなたは、こんな失敗をしたんだ？」
○「失敗した原因は何だろう？」
② 問題解決の方法を考える
・実現可能な方法だけでなく、実現が不可能な方法も含めて、できるだけ**多くの考えを出させる。**
・担任も関わって、子どもと**「一緒に考える（考えている）」状況をつくる。**
・**ブレーンストーミング、KJ法など**、様々な思考方法を用いて、じっくり考えることのおもしろさを体感させる。

（4）自分で決めさせる…子どもは、自分の振るまいには責任をもつ。ただし、任せ放しにせずに、フォローをあらかじめ考えておく。

① 適切な声かけ
〈例〉「あなたはその方がいいと思うんですね。」
「あなたが決めたことだから、いいですよ。」
② 観察
・丸投げではなく、どう取り組んでいるかについて**丁寧に観察**することが必要。
③ 現状把握
・状況を見ながら、「どうだい、進み具合は。」「何か困っていることはないか。」というような**声かけをしながら現状把握**を行う。
④ フィードバック
・うまくいっていない場合には、当初の目標や計画とのズレがないか検討し、**軌道修正のためのアドバイス**を行う。

（5）様々な体験をさせる…体験の幅は、人間性を豊かにする。広く豊かな体験のうえに成り立つ「自立」は、揺るぎないものである。

① 集団づくりを意図して、様々な体験を仕組む。
② 集団決定した活動を必ず成就させ、達成感を味わわせる。
③ 「他の役に立つ」ことの喜びを体験させる。

3 活動のアイデア

＜「自分で目標を決めて取り組む活動」＞

○「立腰教育」の実践（森信三氏が主体性確立の基盤として提唱されたもの）

① 子どもたちは全員席に着く。足は床につけ、膝は閉じる。背中は椅子の背もたれにもたれず、担任の方をしっかりと見させる。
② （担任）「腰骨を立てます。」→（子ども）「はい。」その後静かに目を閉じる。
③ 保育園では無音だったが、寂しい感じがしたので、モーツアルトのＣＤをかけた。心が落ち着く音楽があるといい。
④ まず、肩に手をやり、腰骨をしっかりとさすり（腰骨が立っていない子はしっかりと押さえ）、頭を軽く両手で押さえることを、担任は一人ずつ行う。
⑤ 全員が終わったら、子どもたちの前にある椅子に座って、全体を見渡す。
⑥ （担任）「はい。目を開けます。」の言葉で、静かに目を開ける。

＜リフレッシュタイムの取り組み＞
（中学校での「調息」につなげるため、中学校区の小学校で共通して行っている。

・中間休憩後、3 校時始まり前の 1 分間、音楽を流す。
・ポイントは、４つ。目を閉じ、姿勢を正す。背筋は椅子にもたれない。
手は膝に置き、足は床に付ける。

＜児童椅子に座るときの姿勢の改善の取り組み＞
・座る面の真ん中あたりにテープを貼り、それより前に座ることを意識づける。

○ 自分のことが自分でできるようになることからはじめよう

〈給食をこぼしてしまったとき〉
・おそらく家では、お家の人が拭いて片づけてもらうことが多いであろう。やり方を教え、自分でさせながら教師は見守る。
※手で拾えそうなものは拾う。→雑巾で拭く。→雑巾をきれいに洗って干しておく。

〈おしっこを失敗してしまったとき〉
・誰でも失敗することはあり得ることだから、その後きちんと片づければ大丈夫であることを子どもたちに伝えておく。
※恥ずかしがらないで、自分で先生のところに伝えに行く。
→保健室へ行って、下着を借り、服を着替える。お礼を言うことも忘れない。
→家に帰ってから自分でお家の人に伝える。
→次の日借りた下着と服を持って自分から保健室へ返しに行く。挨拶も忘れない。

○ 自己目標の決定と掲示

一人一人に、短いスパン（２週間がいい）で取り組める目標を考え、紙に書かせる。自己決定した目標は、教室内に常時掲示をし、帰りの会で自己評価させ、貯めていく。自己の目標を達成した満足感は、次の目標への原動力となり、それが、個性を磨くことにつながっていく。

※自分の課題を見つけさせること
→具体的な目標を立てさせること
→やり方を知らせること
→自分でやらせてみること
→みんなで認め合えること
→できたら、次の課題へ

☆ たとえ、失敗したとしても、結果だけではなく、自分からやろうとしている過程を評価すること。

○「継続は力なり」自主学習のノート貯金

※使い切った自主学習ノートをその都度のり等でくっつけていく。教室に置いておき、年度の終わりにはガムテープなどで製本する。何十冊にも重なった自主学習ノートの重みが自分の学びの実感となり、見返すことで成長のふり返りにもつながる。

（他の学習ノートも同様に行うことができる。特に算数ノートは効果あり。）

※おすすめのページには付箋を貼っておくことで見る視点にもつながる。

○「自分の夢を育む」ことと「自分の生活を向上させること」

総合的な単元構想の中に学級活動（２）を関連づけて、学級全体で自分の生活向上を図る。

※自分の夢を実現するためには日常生活の中でどんなことを頑張るか具体的に決める。
（個人目標の設定）
→友達の考えに対してのアドバイスカード
→話し合い（テーマは「みんなが個々に決めた目標を達成するためのアイデア」）
→教室に掲示、目標が達成できたら学級で取り組んでいるポイントに加えていく。
→この目標は、保護者にも共有してもらう。
→担任は、付加価値をつけていく。変容が見られる児童には「自己客観視」の力が育ってきていることを繰り返し集団に話していくこと。

☆　生活の中の１つ１つの局面で**「自己決定し」「自己評価し」「自己目標のステップアップをする」**としてとらえ実践をする。「大志」とともに「足元の現実」の両方をもつことが大切。

○　振り返りカードの工夫

児童の実態から、生活上の問題点や課題を洗い出し、下記のような自作振り返りカード(明日へのステップ)を作成した。毎月の最終日に、この振り返りカードを児童に書かせ続けた。カードは厚紙に貼り付け、累積していくようにした。
実施の際には、「昨日までの自分」より、もっと「良い自分」になるために、自分自身を振り返ってみること、「先生にしかられるから」ではなく、『良い自分』『強い自分』になるためであること、この２点の趣旨をしっかりと話してから、実施するようにした。

明日へのステップ①　　月　日 名前(　　)
「昨日までの自分」より、もっと「良い自分」になるために、振り返ってみよう

①	宿題や自学、音読や日記を、家できちんとやらなかった日はなかったか。
②	教科書やノート、筆箱など、勉強道具の忘れ物をしたことはなかったか。
③	人に悪口を言ったり、ばかにするようなことを言ったりしたことはなかったか。
④	無視したり、かげぐちを言ったり、変なデマを流したりたことはなかったか。
⑤	人をたたいたり、けったり、つついたり、乗っかったりしたことはなかったか。
⑥	おもちゃ類やゲームソフト、カード等、あげたりもらったりしたことはなかったか。
⑦	お金をあげたり(貸したり)、お金をもらったり(借りたり)したことはなかったか。
⑧	行ってはいけない場所、入ってはいけない場所に入ったりしたことはなかったか。
⑨	ヘルメットとタスキを着けずに自転車に乗ったことはなかったか。

⑩ 子どもだけで校区外へ行ったことはなかったか。

「先生にしかられるから」ではなく、『良い自分』『強い自分』になるためです。

☆　記入の際に、前月や前々月の記載事項が当然目に入り、以前の自分の姿を思い起こすことができることは、自己の変化や変容を認識するための手助けとなる。

＜集団で目標を決めて取り組む活動＞

○百人一首を覚えよう

※２０首ずつプリントをしたものを用意し、（Ｎｏ１～Ｎｏ５）暗唱した人から次に進むことができる。

○「ミニ先生」で授業をしよう

※担任が出張のとき、自習ではなく、**子ども(ミニ先生)による授業**を行う。
→「どの教科か」を「だれ」が先生になって授業するかを決める。
（２日前ぐらいまでに）
→ミニ先生は「どこ」で「なに」を使って「どんな」学習をするか、大まかな授業アイデアを担任と打ち合わせておく。
→挨拶は日直が行う。学級日誌と各自の振り返りノートに各授業の感想を書く。
→翌日、ミニ先生へねぎらい（みんなで拍手を送る）と簡単な講評を行う。

※気をつけること
・初めのうちは、希望者を募り、担任がいるときに一日一コマ程度行ってやり方を理解させておく。
・学年団の先生、補欠できてくださる先生にも詳細を伝えておくことで、フォローしてもらうこともあり。
・どんなつたない授業でも、力いっぱいよいところをほめる。
・ミニ先生の授業は、複数で行うこともよしとする。ただし、それぞれの出番があることを確認しておく。
・デジカメ等で学習の様子の記録者心を残すよう伝えておくとよい。
・プリント等を作った場合は、担任が印刷しておくが、授業後は、ミニ先生が採点する。このとき、担任のペンを貸し出すと喜ぶ。

☆　ミニ先生は、「楽しい授業をしよう」という意欲が生まれる。学級の子どもたちは、主体的な学習態度が身につくとともに、**「先生がおられなくとも、自分たちでちゃんとできるんだ。」という自信が自立心につながっていく。**

○ クラス会議（学級会話し合い活動）

クラス会議とは、民主的な話し合いによる生活上の諸問題の解決方法である。
　アドラー心理学をもとにした話し合いの手法で、お互いによいところを見つけ、解決策を話し合う。

※輪になって、みんな対等に全ての子が発言する。

※主な議題
…「学級目標を話し合おう」
「クラスの遊びの計画」
「生活目標」
「子ども同士の人間関係のトラブル」
「お互いの生活上の困りごと」等

○ 富桑っ子会議（代表委員会富桑版）

全校児童が体育館または多目的ホールに集まる。
①全体進行により、議題を伝える。
②学年グループに分かれる。
・よいみつけをする
・議題について全員で意見交換をする。
・１巡目で多かった意見を集約し、再度賛成反対を言い合う。
③グループでまとまった意見を全体の場で言う。
④理由とともに意見を言い合い、結論を出す。
※全体進行を務める６年のリーダーシップが磨かれ、どの学年の子どもたちもしっかりと聴くことができるようになった。

○ もくもくそうじ

（１）年度当初に「もくもく掃除」について全校で共通理解を図る。
担当による劇で、子どもの関心を高めるとともに、具体的な対応の仕方を学ぶ。（話さなくても、必要なことを伝える手だてはある。）

①「がまん玉」…友達とおしゃべりをしないで、黙って時間いっぱいする掃除
②「しんせつ玉」…重たいバケツの水を持ってあげたり、大変な掃除場所を手伝ってあげたりする掃除
③「みつけ玉」…さらにきれいにしようという気持ちで、汚れた所を見つけてする掃除

（２）教師も子どもたちと一緒に掃除する。
①から③のステップは、子どもたちだけのものではない。教師も「もくもく掃除」に取り組むことで子どもたちも育っていく。きまりを破ってしまいがちなのが教師。子どもたちと同じ気持ちや思いで掃除を取り組んでいくようにする。

（３）自分の掃除をする担当場所をはっきりとし、責任を持ってきれいにする。
年に何度か掃除場所が変わる。新しい場所になった最初に、具体的に掃除する場所や掃除の仕方の確認をする。

（４）掃除後のふり返りをする
そうじがんばり表に、今日の自分の掃除についてふり返りをさせる。自分をふり返ることで、課題がはっきりと見えてくる。そして、次の意欲へとつながっていく。

（５）音楽の工夫
　　オルゴール音で、静かにしないと聞こえないぐらいの音量で流す。

☆　掃除には、３つのステップがあることを子どもたちに分かるように説明し、①のレベルから③のレベルを目指して取り組む児童を育てる。黙って取り組むには、自分　で考えないと行動できない。また、周りの様子や友達の様子を見て考えないと行動に移せない。「もくもく掃除」を自立した行動へとつなげる１つの取り組みとして考えている。
☆　学校全体で継続して取り組んでいくことで、「自分で考え、自分で判断して行動する子ども」が育ってくる。

４　活用に向けて

○　自立心はすぐには身につかないものである。「２自立心を育てるポイント」を**繰り返し行うこと**が大切である。

○　自立心は、**学級集団づくりの過程でこそ、育成しやすい**ものであるので、集団づくりを主眼におく。

○　それぞれ、**乗り越えるための「支え合い」「励まし合い」**や小さいハードルを越えたときの**「わかち合い」**が必要である。

「協力」を学ぶ活動のアイデア

１ 「協力」を学ぶ活動の意義

国語大辞典によると、「協力」とは、「同じ目的のために、他と力を合わせること。」と記されている。学校では、学習や生活を共に行ったり集団で活動したりしていく上で、「他と力を合わせること＝協力」は必要不可欠な資質・能力であり、**「協力」する環境の中でこそ社会性は身に付いていく**ものである。

もちろん、一人で学んだり活動したりすることでも学力や技能、生活習慣は身に付くが、友達や教師、さらには地域の人たちと一緒に「協力」し合いながら活動することで、その効果は一層高まる。なぜなら、「協力」し合う人間関係をとおして、**自尊感情などを含めたコミュニケーション能力**（人の話を聞く ・人の話が理解できる ・自分の意見を的確に伝える）が培われるだけでなく、**信頼感や役立ち感、友達と一緒に行うことの楽しさや達成感**など、およそ**一人では身に付けられない資質・能力・感情が体得できる**からである。

２ 基本的な考え

（1）多様な価値観を育てる集団づくり

「協力」の心情を育てるには、まず、**多様な価値観が育まれる集団づくり**必要である。一元的な価値観のもとにつくられる「協力」は、「助ける者と助けられる者」の固定化を促し、互いに「助け合う」ことを難しくしてしまう。

＜多様な価値観を育くむ集団づくり＞

学級活動…係活動、学級内クラブ活動、各種実行委員会、学級会計画委員
授業（学習）…ペア学習、グループ学習、課題別グループ
児童活動…たてわり活動、委員会活動、クラブ活動、行事実行委員会、代表委員会

（2）教科学習で取り組むポイント

学校教育にあっては、家庭学習と違い、集団での学び合いが学力の向上にも大きな役割を果たす。とりわけ、新学習指導要領で重点として挙げられている「言語活動」と「体験活動」の両者は、集団での学び合いを通して充実を図ることが可能である。

① グループで「協力」せざるを得ないような課題解決的「体験活動」を仕組む
② 活動を活発にする課題設定や働きかけ言葉かけを工夫する
③ 活動が盛り上がると、聞き合い・話し合いが活発化する
④ 伝えるための表現の選択肢（書く、話す、描く、動きなど）を示す
⑤ 課題解決に向けて「協力」したことがいかに効果的だったかを価値付ける

ポイントは②と⑤。教科学習で集団活動を採り入れる場合、当初は思うように進展しないケースが多い。そこであきらめることなく**「活動を活発にする課題設定や働きかけ言葉かけを工夫する」**と、話し合いや活動が盛り上がり、一気に解決に向かうことが多い。

さらに、解決して終わりではなく、振り返りの場面で自分の心の成長や友達の援助の大切さに気づいた感想を採り上げることで、**「協力」できる集団に成長している現状を価値付け**ていく。こうした一連の集団づくりの流れが「言語活動」と「体験活動」の両者を集団での学び合いを通して充実を図る重要な工夫となる。

(3)道徳の時間と特別活動「協力」を学ぶ活動について

特別活動において、何らかの活動を一つしたら道徳性が身に付いた、その活動でよくない言動を直すように指導したことで道徳性が養われた、などということはあり得ない。**道徳性は一朝一夕には身に付かない内なる心の育み**であるだけに、何度も何度も似たような経験を積み重ねながら少しずつ養われるものである。そのため、**特別活動における道徳的実践は、ねらいとする道徳性を焦点化し、一貫した取り組み、継続的な取り組みをとおして養うこと**が最も大切なこととなる。

そこで、特別活動における「協力」を学ぶ活動を、道徳のどの内容と関連させるかについて整理しておくことが必要であろう。

1 主として自分自身に関すること	学級や個人のめあての設定
2 主として他の人とのかかわりに関すること	学級内での係活動や集会活動
3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	飼育栽培活動、学校行事
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	クラブ、委員会、たてわり活動

3「協力」をPDCAサイクルで学ぶ

(P:計画)実態把握を「協力」する活動につなぐ

○ 男女の仲が悪く、机を離して座ったり、男女別々のグループになったりしがちなケース。

○ やさしい思いがなかなか言動に表せない児童が多いケース。

○ ＱＵ調査で、不満足群に多く児童がいるケースや、アンケート（見かけ）上は満足群にいるが、実態は孤立している児童がいるケース。

○ 男女の仲がよいが、今ひとつ盛り上がりに欠ける学級集団。

○ 全体に落ち着いてはいるものの、忘れ物が多かったり、不登校傾向の児童がいるケース。

(P:計画)活動の計画段階から「協力」を仕組む

○ グループづくりを子ども任せにするのではなく、常に**教師の意図的なグループ編成**（意図的に線を入れて作ったアミダくじを使用、班長が教師の作成したメンバーを指名するグループ編成）で行う。

○ 活動の**実行委員に教師の意図**（男女仲良くするため、特定の児童を仲間に引き込むため等）**を説明**し、活動前からねらいを絞っておく。

○ 幾つかの計画案をグループ毎にプレゼンさせ、**入札方式**（採用の決定は他の児童）

で活動内容を決定する。

○　自分の作品や活動案が全体の一部分になっているので、そろわなければ作品（活動）ができないという**ジグソーパズル型活動の**計画。

（Ｄ：実践）「協力」する活動に向かうための準備

① 「協力」に必要なルールや道具の準備。

例：男女を一緒に遊ばせるために、**「一緒に遊ぶボール」**（異性が一人入っていないと遊べないボール）を準備する。（その他のボールは与えない。）

② うなずいたりあいづちをうったり、「ナイス」「いいですねー」と言ったり、賛成の場合に拍手するなどの**「反応」を教えておく。**

③ 「協力」している姿を撮影するためのデジカメを準備。**報道記録班に任命し、腕章を作って腕に巻かせる。**

④ **活動記録新聞の作成担当をあらかじめ編成**しておく。

（Ｃ：評価→Ａ：改善）振り返りを今後の活動につなぐ工夫

① 評価項目に沿って活動を振り返る

「自分は協力できたかどうか4段階評価」「一番協力していたのはだれか記述」
「今回の活動の協力指数を10段階で表す」「学級全体の様子を記述」

② 評価カードの記入とは別に、**挙手による感想発表者を募る。**

③ 必ず**実行委員長のあいさつ**を入れる。児童から児童への総括評価にもなり、リーダー育成にもつながる。

④ 必ず**最後に教師のあいさつ**を入れる。活動の総括評価をする。評価は**「計画段階の関わり」「活動中の関わり」「個や集団の変容」に分けてコメント**する。

⑤ 撮った写真を**活動新聞**に貼り付けたり、**学級の写真集**としてコメントを付けて掲示したり、**学級の歴史**として掲示・記録（記録集）したりする。

⑥ 次の日の朝に、必ず前日の活動について**短くコメント**をする。さらに、**学級通信**で活動の様子をレポートし、**次回への期待感**を記しておく。

4　「協力」を学ぶ活動のアイデア

(1)学校生活全般を通して

① 朝の会・帰りの会

・朝の会で**「ペアのお話」コーナー**をつくる

内容：「休日したことやしたいこと」「しりとりや言葉集め」「家の○○紹介」「昨日のニュース」「今日の自分のめあて」「先生に期待すること」

・帰りの会で**「今日のイチオシボーイ＆イチオシガール」**を発表

方法：①日直・担当係・教師のいずれかが発表する。
②発表された児童の**顔写真を撮る。**黒板に理由を書いて一緒に撮影する。
③**学級の歴史**や**写真集にとじる。**

② 給 食

○　班の机の真ん中に、学校周辺から摘んできた**花を飾る**。
○　開始前に上品な**BGM**をかける。
○　実行委員のあいさつ→教師の一言→担当者「**乾杯**」
○　会食→記録ＤＶＤ視聴→指名感想発表
○　写真記録班は写真を撮り**インタビュー**もしておく。**新聞づくり**をする。
○　納杯のあいさつ→乾杯
　＊　黒板に式次第を書く。活動によっては**スペシャルゲストを招く**。

③ 掃 除

○ 掃除を一生懸命するための**合言葉**を決める。例：そうじダ・イ・ス・キ
（ダーだまって、イー一生懸命、スー隅々まで、キーきれいに）
○ 合言葉をそのまま評価の観点にし、評価カードを作って毎日評価する
○ あらかじめ全部の班が満点をとれたら次のイベントをしたり給食パーティーをしたりすることを決めておく。
○ 全班満点になったら記念写真を撮る、担当者を胴上げする、学級の星（目標を達成したときにつけるマーク）をつける。
○ 学級の写真集、学級の歴史に掲示し、学級通信にも載せる。

(2)学級活動を通して

① 学級目標・学級歌・学級旗づくり

・「どんな学級にしたいか」を単語で出し合う
・学級の状況に似合った単語を選択し、つないで文にし、学級目標をつくる
・学級の雰囲気に似合った曲を選び、メロディに合わせた詩を、学級目標の文言を入れながら作詞する。
・学級歌に合わせて掲揚する旗を作るよう教師から提案する。
・旗のデザインを募集する。
・学級目標や学級のキャラクターをデザインした旗を作成する。
・できた旗を掲揚できるように細工し、毎朝学級歌に合わせて掲揚する。

② 学校目標と関連付けて、学級のポイントをためていく。(上の写真参照)

・上の４つの事項に当てはまることを、１日の生活の中から見つけ、帰りの会で

出し合う。
・ここで出たこと1 件１ポイント（ディーマークポイント）として貯めていく。
・留意すること「**学校目標を下ろしてきていること」「全員でポイントを貯めていこうとする意欲を持たせること」**
・よくない行いがあった時には、減点（マイディーポイント）も行う。
・ポイントを貯めるとお楽しみ会ができるようにする。

③ 協力を「みえる」化する

(ア)班のチームワークを高める。（図1参照）
クラスの人間関係を表すバロメーターとしてもとらえることができる。不思議と人間関係が良いと点数は下がらないが、そうでないと低下する。子ども達が互いに心遣いしなければ得点の維持・向上はできない。
① 班で協力してできたことを○×で毎日得点化していく。
② 項目は、「１分間着席」「廊下歩行」「掃除」など、生活や学習規律に関わることとする。**チームワークを高めて協力するためにはきまりやルールが不可欠**。
③ これを学級で集計して日々のカレンダーに書き込んでいく。記録を更新すると笑顔で評価するように心がける。すると次第に子ども達も引き込まれて「今日は何点だろう。」と関心を高めていく。
はたらく →めあてをもった掃除
まなぶ →友だちに伝わるように最後まではっきり話そう
っなぐ →感謝の言葉を相手に伝えよう
こころと体をきたえる →姿勢良くすわろう
図１
図2
プラスポイント
マイナスポイント
(イ)学級のチームワークを高める。（図２参照）
① 学級で毎月向上した集団の重点目標を決め、達成のために取り組んでいる。学級目標の掲示はどのクラスでもあるが、張られたままではもったいない。班のチームワークカードと連携させながら活用する。
②達成できた目標は黄色→青に項目欄を張り替えていくことで、**「動きのある学級目標」**にしていく。
③これを行事等と関連付けながら年間を通して行うことで、協力する気持ちが途切れないように取り組んでいく。
④達成だった部分は来月まで持ち越して取り組むことになる。余白部分には協

力できた場面の写真を掲示してモデル化していくようにする。

④ エンカウンター・ゲームなど

「ならびっこ」
・平均台の上に適当に一列に並んで立ち、先生の指示のもと、協力しながら下に落ちないようにして並び替えを行う。

「フラフープを下ろそう」
・３年の道徳副読本（学研）にも掲載。５～９人が円になって人差し指を出し、その上にフラフープを置く。そして、フラフープを落とさないように床まで協力して下ろす。

「魔法の鏡」
・５，６人が手をつないで輪になるが、その輪の中にフラフープを１つ入れる。手を離さないでこのフラフープを全員でくぐり抜けて、フラフープの向こう側に元のような内向きの円を作る。

「レンジでチン！」
・こおり鬼のゲームを基本に、助ける方法をアレンジしたゲーム。２人で両手をつなぎ合い、こおっている人を囲む（氷を溶かす）と助けることができる。１人でなく、２人で助けるところがポイントである。

「マンションの住人あてゲーム」
・マンションの見取り図をグループに1 枚ずつ配る。
・次に、マンションに住んでいる住人に関する情報が書いてある（それぞれ異なる内容のもの）カードを1 人に数枚ずつ、全員に配る。
・そして、１人ずつ自分に配られたカードの情報を班の友だちに伝える。その際に、カードを友だちに見せてはいけない。自分のカードに書かれている情報を何とかして言葉で伝える。
・最後に、友だちからの情報をきちんと聴きとり、マンション見取り図に誰がどの部屋に住んでいるか書きこんでいく。時間制限とタイムをとり、班ごとに競わせる。

「言葉で写し絵ゲーム」
・グループ４人で行い、２人ずつ手本の絵を見て伝える人と説明を聞いている人に分かれる。
・次に、「伝える人」は、形や色、画用紙のどこに書くのかを説明する。
・「描く人」は説明を聞いて画用紙にクレパスで絵を描く。描く人と伝える人を

交代して行う。
・最後にできあがった絵と手本の絵を比べて感想を発表し合う。
「室内雪合戦」
・雪がなくてもできる雪合戦ということで、児童を引きつける。事前に作戦を考えさせることで、仲間意識や団結力を高めさせるとともに、友だちと協力して一つのことを成し遂げる良さを実感させるのに適した遊びである。
「ボールを隣の人が捕球するゲーム」
・全員がボールを持ち一斉に隣に向かってボールを上げる。全員が落とさなくなるまで、作戦を立てて何回でも繰り返す。
「新聞紙を積み上げるゲーム」
・４人程度のグループを作り、各グループに新聞紙１日分渡す。新聞を折ったりちぎったりして、制限時間内で新聞紙を積み上げた高さを競う。何度でもやり直しができ、時間の経過とともに、グループ内で協力する姿が見られるようになる。

＜留意点＞

エンカウンターで大事なのは「シェアリング」である。それぞれの活動を通して何を感じたかをそれぞれが言葉に出して「共有」し合うことで、温かい雰囲気ができ、協力することのすばらしさをより感じ取ることができる。

（３）縦割班活動・児童会活動を通して

＜アイデア１＞

①（ねらい）全校児童が参加して、異学年どうしが楽しくふれあい、交流を図ることによって、お互いの立場にたって、助け合い、協力して楽しい活動ができるようにする。
②全校児童で構成し、通年制とする。
③毎月第３木曜日６校時（１４：３０～１５：１５）までとする。
④色別リーダーには６年の学級代表があたる。班別リーダーは６年生の学年の話し合いによって選出される。
⑤ 別リーダーは、代表委員会・各種実行委員会への参加、なかよし活動の円滑な運営にあたる。
⑥ 別リーダーは、なかよし活動の計画、円滑な運営、決定事項の実施にむけて中心となって活動する。
・なかよし活動の競技として、①練習を必要とするもの②作戦によって結果が左右されるものなどを条件として考え、全員が一致団結して参加する意義を感じさせる。

・６年生をリーダーとして、作戦会議や練習当日の運営などに積極的に関わらせることで、下学年への気配りや互いの良さを学ばせる。
・**背負う・手をつなぐ・抱き合うなどの身体的距離感を縮める**ことで、心理面でも近づけるように工夫する。

＜アイデア２＞

① 動会を縦割り３色対抗とし、応援練習などを縦割りのグループで行い、仲間意識の育成を図る。
② 童集会を縦割り３色対抗の集会とし、競い合うことで仲間意識の育成を図る。
・サンドフェスティバル２０１２（全校なかよし遠足で砂丘で行う縦割り対抗のミニ運動会）
・MMグランプリ（美保小ミュージックグランプリ；学年ごとに歌を中心に発表をし、全校で音楽に親しむ集会）
・芝リンピック（芝生の校庭で縦割り対抗のミニ運動会）
＊　縦割り対抗の集会では、応援を色ごとに工夫して行う。
③児童会集会の「美保っ子チャレンジパーク」では、各学級が遊びのコーナーをつくり、全校の児童を迎え楽しんでもらう取り組みをしている。いかに楽しめるコーナーをつくるか各学級ごとに工夫し、運営も児童が進んで行うよい機会となっている。

＜アイデア３＞

・児童の実態として、班員だけでなくリーダーの名前さえ覚えていない児童もいる。まずはお互いが顔と名前を知り、仲間意識をもたせることが協力への第一歩と考える。
（縦割り班の組織）
赤、白、青、黄の4 色ごとに３班ずつ編成。兄弟姉妹は同じ班には属さないが、同じ色別になることはある。(本年度は各班17～18 人)
（活動内容）
①全校遠足： ○目的地まで一緒に歩く。○現地でのミニゲーム、昼食
②交流給食： ○年３回程度(４月、９月、１月)
③縦割り班遊び：○原則、月に１回計画実施。○掃除、ドリルﾀｲﾑをカットして、時間確保（３0 分間）。○6 年を中心に遊びを計画○掲示板に晴れ用雹用の２つのパターンの内容、場所、持ち物などを掲示し告知する。
④運動会：リレー：○各色ごとにひと班ずつが゛出場し、３レース行う。
○ショートコースあり(５名)。原則としては、下の学年を優先とするが、グループ内の作戦で決定。入場、開会式、座席ともに色別。

⑤その他：色別対抗読書リレー：〇図書委員会の企画として行っているものである。各色別班で学年ごとにシールの色が決められており、貸し出しごとにそのシールを色別の台紙に貼っていく。状況も一目で分かり好評である。

＜アイデア４＞

①縦割り班活動の一つとして。毎週決まった時間に設定。（本校では、毎週金曜日の業間休憩に「きらめき班活動」として行っている）
②全校を９つの縦割り班に分ける（きょうだい学年で組んでいるペアが同じ班になるようにしている）。９班を３つずつ黄、青、緑のグループに分ける。
③遊びを通して協力できるような活動を行う。
・活動の始めと終わりは班ごとに集まってあいさつをする。

二人三脚リレー、三人四脚リレー

・ペアが二人三脚で走り、より早く走ったりより上手にバトンタッチしたりできるように練習する。
・班別対抗リレーに向けて、走順を話し合って決めるなどして班全体のタイムを上げるための工夫をする。
・三人四脚、四人五脚とだんだん数を増やしていく。

ひし形リレー

・コーンをひし形に置き、その周りを走るリレーである。
・距離は短いが、コーナーが鋭角であるため曲がりにくく異学年が同時に走っても差がつきにくい。
・走順を話し合ったりコーナーを効率よく曲がる作戦を立てたりして協力してタイムの向上を目指す。
・班ごとの競争であるが、色別対抗の競争でもある。
・自分の班が勝てなくても、同じ色の班が勝てるように応援するなど、協力し合える場面が多く設定できる。
・活動によって得た得点を色別に積み上げ、廊下に掲示をしている。年間をとおして協力を意識した活動が継続してできるよう工夫している。

（４）教科の中で特別活動の趣旨を生かす

① 国語科での実践

1年「こえのゆうびんやさん」

・班の中で１人が声の郵便屋さんとなり、教師が伝えることを、班の友だちに伝えるという授業。１人がみんなのために、みんなが１人のために協力しようとする姿が

多く見られた。

3年「こちら、子ども相談室」
・班の中で、司会者、相談者、相談を受ける人に役割分担して行う。司会者の進行に周りが協力しながら発言したり意見を聞いたりする力が求められる。また、相談役の悩みに対して、相談を受ける人が一生懸命考えてアドバイスすることで、友だちのために協力しようという意識も高まっていく。

③　その他の実践

・教師の発問に対してほとんどの児童が同様な考えをもっていたところに、ある児童の異論を唱える意見で場の空気が一変し、それをきっかけに読み取りが深まっていった事例があった。**「集団思考」の場面で「子ども間で思考の交流が行われ、個々の思考に変容が生じた。」**のである。このように子どもたちは、授業を通して多様な価値観を知らず知らずのうちに学ぶ。そこで身に付けた素地の上で学ぶ「協力」こそが、全員が参画する双方向の協力につながっていく。
・算数のペア学習で問題の解き方を説明し合ったり、答え合わせを交換して行ったりする。社会科で、課題に対して**ペア対話→班対話→学級全体**の話し合いを行う。
・体育の体ほぐしや体つくりの運動で、互いの体に触れながら協力して運動を行う。
・図工で「海をつくろう」と呼びかけ、大きな白い紙の周りに学級児童全員が集まり、一斉に絵の具で色を塗った。学級全体で協力して集中して取り組み、一つの「作品」が形となったので、児童の喜びもひとしおだった。

５ 活用に向けて

・「協力しよう」「協力して活動できたか」など「協力」という言葉を、普段、私たちも子どもたちもごく普通に当たり前のように使っている。しかし、「協力するとは、具体的にどうすることなのか。子どもたちの姿としてどうなのか。」を考えてみなくてはならない。
・意識しなくても自然に協力して活動できる児童を育成していくために、まずは教師自身が、**目の前の児童をしっかり見つめ、意図して「協力をねらった活動」を仕組んでいき、「協力を学ばせていく」ことが大切**である。
・家庭科の調理実習、理科の実験や観察、音楽の合奏、あるいは社会見学や宿泊学習・修学旅行等の集団行動・学習など、ここで挙げてきた以外にも、様々な協力の場面が考えられる。すなわち、学校生活全般に渡っていると言える。
・「協力」は「学校・学級経営の要」である。個別に実践してみるのもよいが、学校・学級として、どのような児童に育てていきたいかという**「めざす子ども像」に沿**

って、一年間を見通して、計画的に意図的に取り組んでいく（学級経営案や年間指導計画に位置付けていく）ことで、「その場限りの協力」で終わらず、継続したものになっていく。

「がまん」を学ぶ活動のアイデア

１　「がまん」とは

「がまん」には大きく２通りある。

一つは「自分の取りたい発言や行動等の欲求を抑えること。」「わがままをせず、節度ある行動をとること。」**自制心**とよばれる「がまん」である。

二つ目は、よりよく生きていくために自分がやらなくてはならないことをしっかりとやり抜くための「がまん」。何事にも粘り強く取り組み、困難な状況の中でも努力をし続ける**忍耐力**とよばれる「がまん」である。

前者が基本的な生活習慣と大きく関わっているのに対し、後者は自分の夢や希望の達成や実現に大きく関わっている。どちらの「がまん」も必要であるが、身に付ける時期を考えると、前者は主に下学年で、後者は主に上学年で身に付けておきたい。

２　「がまん」の意義

よりよく生きるためには理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力が必要である。夢や希望は容易に実現できるわけではなく、現実とのちがいにひるんだり失敗や挫折を繰り返したりしながらも、くじけずに粘り強く取り組んだ結果、ようやく手に入れることができるものである。「がまん」の先には目標があり、やり遂げた喜びや充実感がある。「がまん」とは**目標を達成する力**、目標達成のために**自分をコントロールする力**に他ならない。

物が豊かになり生活が便利になる中で、子どもたちは欲しいものを得るためのアクセルを踏み続ける方法はよく知っているものの、制御・コントロールするためのブレーキの使い方を知らない、どこにあるか分からないという状況も見られる。**「子どもたちを不幸にする一番確実な方法、それはいつでも何でも手に入れられるようにしてやることだ。」**というルソーの言葉を思い返さなくてはならない。**楽をせず、心や体を使うことによって、仲間との関係を深め「がまん」を自覚させたい**ものである。

３　活動のアイデア

(1)行事を通して

＜マラソン大会(全)「クラスみんなで○分○秒」＞

自分の目標達成が、クラス全体の目標達成へと直結しているので、自分だけの記録に満足せず自分のがんばりがクラスのためになるという連帯感を高めるとともに、苦しさをがまんして走り切ろうとする気持ちを育てる。自分が走り終わっても友達を応援するなど、がまんでつながる一体感が得られる。

〈具体策〉

①　試走タイムを計り、全員のタイムを合計する。

② 自分の目標タイムを設定させ、各自の目標タイムを合計する。
③ 全員で何分何秒短縮することになるのか、全体で短縮時間を設定する。
④ 目標タイムに向けて練習する。
⑤ 大会当日のタイムを合計し、目標達成かどうかたしかめる。
⑥ 教師から「何がよかったから目標達成できたのか。」「“がまん”をどう意識したか。」の２点についてコメントする。
⑦ 全員で記録写真を撮り、学級の歴史として残す。通信で家庭に知らせるとさらに効果的。

＜組体操（高学年）＞

痛さ、怖さに耐え、友達を気遣いながら緊張感のある美しさを求める組体操は「がまん」の結晶である。痛さや怖さをがまんするのは美しい演技のためであり、そのためにいっしょにがんばっている友達のためでもある。正しい姿勢、表情、移動、失敗したときの姿勢・・頭のてっぺんから足の指先まで気を配る心の強さが求められる組体操は、まさに「がまん」を学ぶ場である。

① まずは気をつけ

どこがかゆくなっても、虫が止まっていても、土がついても気をつけの姿勢を維持することを繰り返し指導する。とにかく、**正しい「気をつけ」を目標に自分の体、動きを意識させる**。これだけでも我慢強さを鍛えることができる。

② 機敏な動き

足の裏が痛くてもがまんして美しく素早く移動することを身につけさせる。機敏な動きは見て美しいだけでなく、**友達への気遣い**でもあることを知らせる。

③ 気遣い合い

友達を上に乗せる技になってくると、下の段の児童は痛みが伴い、高くなれば、上の児童は恐怖心が出てくる。土台になる児童は上の人が安心して立てるよう、「痛みを我慢して踏ん張ろう。」という気遣いが必要である。

上に乗る児童は痛みを感じる場面は少ないが、土台となっている友達が痛さをこらえて支えているのは感じているはずである。素早く動き、下の友達の負担を少しでも減らそうと気遣うことが大切である。友達の気遣いを感じることが「がまん」へとつながっている。もちろんそれを考えていないような行動をとる児童へは教師の指導が必要となる。

〈留意点〉

○ ねんざしていたり、風邪を引いていたりしても参加している場合もあるので、表情、動き、態度には十分留意する。

○ 指導の様子を記録にとして残し、振り返る材料にする、また、教師からの評価に「がまん」とのつながりを含めてコメント

をする。

(2)日常生活の中で

＜心のノートの活用(中学年)＞

最後までやり抜こうとする心と途中であきらめようとする心は誰にでもあり、最後までやり抜く上で問題になるのは自分のこころであることに気づかせる。

①今の自分よりもっとよくなりたいと思うことはどんなことか発表し、心のノート（中学年）Ｐ２１に目標を書く。

②互いの目標を理解し合い、心のノート（中学年）Ｐ２３の「やりとげられた金メダル」に取り組む。

＜調息(全学年)＞

中間休憩を終えて、３校時に入る前に「調息」として、自分の席に着いて１分間何もしないでじっと過ごす。気持ちを落ち着けたり、気持ちを切り替えたりし、「がまん」の素地をつくる。

①休憩に入る前に次の学習の準備をしておく。

②休憩が終わる２分前着席。

③何もせずに１分間すごす。

- おしゃべりをしない。
- 学習の準備などもしない。
- 自由な姿勢で過ごす。

＜黙想(全学年)＞

中間休憩を終えて、３校時に入る前に、自分の席に着いて１分間、姿勢を正し、目を閉じて過ごす。気持ちを落ち着けたり、気持ちを切り替えたりし、「がまん」の素地をつくる。

① 背筋を伸ばしてまっすぐ座る

② 手は膝の上に置く。

③ ゆっくり呼吸する。

④ 静かに目を閉じ「休憩時間モード」から「授業時間モード」に切り替える。

＜がまん貯金(低学年)＞

「がまん」を楽しむために（「がまん」に対するプラスのイメージづくり）学級で**「がまん」**したことを貯金していく。

① 「がまん」の貯金箱をつくり（中が見えるよう透明のもの)、がまんしたことがあったら、ビー玉を入れていく。

② 一人一つの「がまん」が入っているが数を記録し、意欲を高める。

〈留意点〉

○　必ず学級目標との関連性を意識して取り組む。

○　「がまん」の判断基準があいまいになりやすいので、達成できたかどうかの判断は教師が行う。

（3）イベントを通して

＜大縄跳び（全学年）＞

大縄跳びは連続して跳ぶのは苦しいが、それを乗り越えると大きな達成感がある。忍耐強さだけでなく団結力も生まれる。

①　自分たちで目標回数を設定させる。

自分たちで決めることで、最後までやり通すという責任も生まれる。

②　目標回数に達するまで努力させる

失敗をもとに、縄をまわし、並び順、かけ声、自主練習計画などの作戦を立直しながら、目標達成への努力を続けさせる。

③　日付、跳んだ回数を記録する。

苦しくても、目標に近づいていることが目に見えれば苦しさものり超えられる。

〈留意点〉

○　縄跳びが苦手な児童が攻められたり居場所がなくなったりすることがないよう十分配慮する。

○　回数だけでなく、友だちへの声かけやかかわり方も評価する。

＜読書リレー（中学年）＞

１冊５００ページ以上の本をクラスでリレーしていく。（読書好きなら１週間程度、読書が苦手な子は２週間以上かかる）本をバトンに学年終了日までに全員読破を目指す。読書を好まない児童にとってはかなりの忍耐力が必要である。しかし、読み終えたときの達成感次へつないだことの喜びは大きい。

①　５００ページ程度の本を選ぶ。

②　本が回ってきたら氏名、受け取った日、次へ渡した日を記録する。

〈留意点〉

○　ページ数が多いので内容は難しくなく興味を持ちやすいものを選ぶようにする。

＜座禅体験（高学年）＞

学年行事、親子会やふるさと体験学習（佐治）の活動の１つに座禅を取り入れ、お寺で本格的な

座禅体験をする。（時間３０～４０分）

４　活用に向けて

（１）目に見える目標（見通し）を持たせる

いつ終わるか分からない練習、何を求められているのか具体的に分からない活動は、児童のモチベーションを下げるだけである。高く険しい山も、今何合目か分かっていれば登る意欲は湧いてくる。具体的な見通しを児童に提示したい。

○　ゴールの姿を明確に示す。

・学級目標を掲げる。

・ポスターを作り掲示しておく。

○　ゴールの姿にどんな意味があるのかを示す。

○　今、ゴールまでのどの時点にいるのか到達度を「見える化」する。

・カウントダウンカレンダー、カウントアップカレンダーをつくり、毎日記録を書き込む。

○　合い言葉や活動中言い続ける言葉を決める。

・「努力の継続」（努力は単発ではなく、努力し続けてこそ達成できる。）

・「あきらめたら、そこがゴール」

・「信じる強さが、願いを叶える。」

（2）充実感を得られる評価を

成功体験は大切であるが、成功だけでは「がまん」を学ぶことはできない。簡単に手に入るものほど簡単に手放してしまう。失敗があるからこそ、その失敗を乗り越えようとするところに「がまん」を学ぶきっかけが潜んでいる。

○　成功させるために**手を出しすぎない**。失敗にも意味がある。**失敗させる勇気をもつ**。

○　失敗した経験にもしっかりと意味付けをする。**失敗を評価する**。（成功させるための意欲に火をつける。）

○　成功だけを評価しない。**そこに行き着くまでの試行錯誤、紆余曲折に「がまん」の姿がある**。

・　「学級の歴史」に写真や文で残す。

・　学級通信に写真や文を書き、共通理解する。

おわりに

「学級経営ハンドブック　第２集」ができあがりました。昨年度の第１集に引き続き、「鳥取市のもち得る優れた学校文化を継承し、優れた教育活動の土台となる学級経営の手法を共有する。」というねらいで編集し、分かりやすく使いやすいハンドブックとして完成しました。

第１集は、学級経営や特別活動を行う上で重要な「１０の活動」について記載しましたが、第２集では、学級経営、児童会・クラブ運営、学校行事運営、道徳との関連で育てたい心情の中から「１２の活動」について、先生方の知恵と技とアイデアとコツを集めました。日常的に利用可能なアイデアとともに、学級経営の質を高めるアイデアを盛り込んでいます。

すぐに使えるハンドブック形式となっているので、是非、ご自分の学級経営に取り入れていただきたいと思います。一人でも多くの方がこの「学級経営ハンドブック　第２集」を活用して多くの実践と改善を重ねることを願っています。

最後になりましたが、ハンドブック編集委員の皆様には、ご多用の中、執筆、校正、発刊に至るまでご協力いただき心よりお礼申し上げます。

編　集　委　員

村上　光重（逢　坂）	前田　哲雄（浜　村）	豊福　　聡（湖南学園）
吉田　淑子（面　影）	伊奈垣真吾（城　北）	浅井　寛恵（宝　木）
広沢　栄貴（中ノ郷）	松林　隆裕（明　治）	門脇　智子（湖山西）
渡邉　直子（久　松）	中澤　達也（美保南）	宮前　直行（若葉台）
田村　純子（日　進）	中林　永成（瑞　穂）	前田　尚美（青　谷）
畑　　光生（浜　村）		